

令和6年度

植物防疫年報

福岡県農林業総合試験場病虫害部予察課
(福岡県病虫害防除所)

第1 福岡県農林業総合試験場病害虫部予察課（病害虫防除所）の概要

I 沿革

- 昭和16年（1941年） 病害虫発生予察事業が始まる
農事試験場を中核として、県内7か所に観測所を設置
- 昭和22年（1947年） 観測所を県下6か所とし、観察員を各1名配置
- 昭和27年（1952年） 本庁及び地方事務所に17か所の病害虫防除所を並置
- 昭和30年（1955年） 地方事務所の廃止に伴い、病害虫防除所を農林事務所、農業改良普及所に移転
- 昭和45年（1970年） 病害虫防除所を各農林事務所6か所に統合
- 平成元年（1989年） 6か所の病害虫防除所を本所及び2支所（筑後、行橋）に統合
- 平成18年（2006年） 残留農薬分析室を整備
- 平成26年（2014年） 組織再編に伴い農林業総合試験場 病害虫部予察課として配置

II 所在地

農林業総合試験場 病害虫部予察課
〒818-8549 筑紫野市大字吉木 587
TEL (092) 924-0062 FAX (092) 928-6404

III 管轄区域

管 轄 区 域	市町村数	農協数
【福岡農林管内】 福岡市、筑紫野市、春日市、大野城市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、糸島市、那珂川市、宇美町、篠栗町、志免町、須恵町、新宮町、久山町、粕屋町 【朝倉農林管内】 久留米市、小郡市、うきは市、朝倉市、筑前町、東峰村、大刀洗町 【飯塚農林管内】 直方市、飯塚市、田川市、宮若市、嘉麻市、小竹町、鞍手町、桂川町、香春町、添田町、糸田町、川崎町、大任町、赤村、福智町 【筑後農林管内】 大牟田市、柳川市、八女市、筑後市、大川市、みやま市、大木町、広川町 【八幡農林管内】 北九州市、中間市、芦屋町、水巻町、岡垣町、遠賀町 【行橋農林管内】 行橋市、豊前市、荻田町、みやこ町、吉富町、上毛町、築上町	60	20

IV 業務体制

1 組織体制

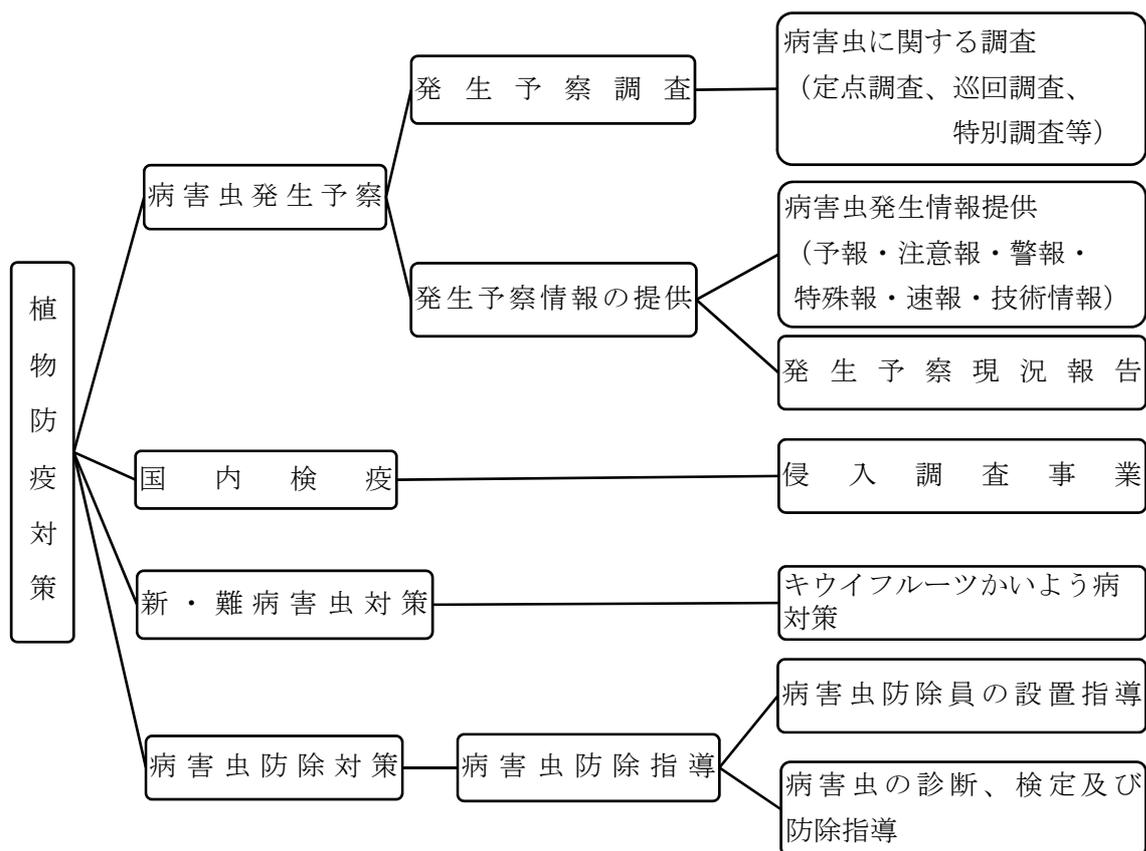
病虫害部

予察課

部長： 石井 貴明 (8名) 課長： 東 勇司
(所長兼務)

副 長： 古賀 由利香
企画主査： 末信 真二
技術主査： 嶽本 良子
技術主査： 土谷 俊弘
技術主査： 小田 哲嗣
技術主査： 吉永 文浩
技 師： 尾崎 友輔

2 業務内容



3 病虫害防除員の設置

植物防疫の施設に関する条例（昭和27年7月31日条例第42号）及び福岡県病虫害防除員の任用、勤務条件等に関する要綱（令和6年4月1日施行）に基づき、農作物の栽培面積や病虫害の発生動向等を考慮し、22名の病虫害防除員（普通作物6名、果樹11名、野菜3名、特用作物2名）を設置した。

防除員の管轄は市町村区域とし、発生予察調査及び防除指導等を行った。

病虫害防除員活動実績一覧

担当作物	担当市町	活動日数			
		病虫害調査日数 (日/人)	防除指導日数 (日/人)	人数	
普通作物	水稻+大麦+小麦+大豆	久留米市	18	2	1
	水稻+小麦+大豆	大川市	17	2	3
		宮若市 みやま市			
	水稻+大麦	築上町	12	2	1
水稻+大豆	上毛町	13	2	1	
(小計)					(6)
果樹	かき	うきは市	13	2	2
		朝倉市			
	かんきつ	八女市	14	2	3
		宗像市 みやま市			
	ぶどう	宮若市	10	2	1
	なし	久留米市	11	2	5
		筑後市			
行橋市					
嘉麻市 朝倉市					
(小計)					(11)
野菜	イチゴ	宗像市 嘉麻市	10	2	2
	冬春ナス	みやま市	7	2	1
(小計)					(3)
特用作物	茶	八女市	8	2	2
合計			7~18日/人	2日/人	22

第2 業務実績

I 病虫害発生予察

1 発生予察調査

(1) 対象病虫害

ア 指定病虫害

国内における病虫害の発生が局地的でなく、かつ、急激にまん延して農作物に重大な損害を与える傾向があるため、特別の対策を要するものとして農林水産大臣が指定するもの。

イ 指定外病虫害

指定病虫害以外の有害動植物について重要な病虫害として知事が定めるもの。

調査対象病虫害一覧

	農作物名	指定病虫害名	指定外病虫害名
普通作物	水稲 (普通期)	いもち病、ばか苗病、ごま葉枯病、もみ枯細菌病、苗立枯病、紋枯病、稲こうじ病、縞葉枯病、白葉枯病、トビイロウンカ、セジロウンカ、ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイ、コブノメイガ、斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ、ミナミアオカメムシ、アオクサカメムシ、イネカメムシ、アカスジカスミカメ）、スクミリンゴガイ、イネミズゾウムシ、フタオビコヤガ、ニカメイガ、イネドロオイムシ	心枯線虫病、イネクロカメムシ
	水稲 (早期)	トビイロウンカ、ヒメトビウンカ、セジロウンカ、ツマグロヨコバイ、斑点米カメムシ類、スクミリンゴガイ	—
	大麦	赤かび病、さび病類、うどんこ病	縞萎縮病、斑葉病、網斑病、黒穂病類
	小麦	赤かび病、さび病類、うどんこ病	縞萎縮病、黒穂病類、黄斑病、シロトビムシ類
	大豆	紫斑病、アブラムシ類、ハスモンヨトウ、吸実性カメムシ類（アオクサカメムシ、イチモンジカメムシ、ホソハリカメムシ、ミナミアオカメムシ）、フタスジヒメハムシ、マメシンクイガ	葉焼病、べと病、さび病
果樹	かき	炭疽病、カキクダアザミウマ、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類、カキノヘタムシガ	—
	かんきつ	かいよう病、そうか病、黒点病、ミカンハダニ、チャノキイロアザミウマ、アブラムシ類	—
	ぶどう	灰色かび病、べと病、晩腐病、アザミウマ類	黒とう病、褐斑病

	農作物名	指定病害虫名	指定外病害虫名
果樹	なし	黒星病、黒斑病、赤星病、ハダニ類、カイガラムシ類、アブラムシ類、シンクイムシ類（ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ）、ハマキムシ類	—
	キウイフルーツ	かいよう病	—
野菜	冬春イチゴ	灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、アザミウマ類、ハダニ類、アブラムシ類、コナジラミ類	萎黄病、菌核病、チョウ目害虫
	冬春トマト	灰色かび病、葉かび病、疫病、すすかび病、うどんこ病、黄化葉巻病、コナジラミ類、アブラムシ類、アザミウマ類	ハモグリバエ類
	冬春ナス	灰色かび病、うどんこ病、すすかび病、アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマ）、アブラムシ類、ハダニ類	コナジラミ類、ハモグリバエ類
	冬レタス	灰色かび病、菌核病、アブラムシ類	—
	冬キャベツ	黒腐病、菌核病、アブラムシ類、モンシロチョウ	軟腐病、べと病、ウワバ類
特用作物	茶	炭疽病、ハダニ類（カンザワハダニ）、チャノキイロアザミウマ、チャトゲコナジラミ、クワシロカイガラムシ、チャノミドリヒメヨコバイ、ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、チャノホソガ	もち病
作物共通	—	ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナガ、シロイチモジヨトウ、果樹カメムシ類	—

(2) 調査の種類及び調査地点

病害虫発生予察に係る調査は、定点調査・巡回調査及び特別調査とした。

調査ほ場は気候、栽培品種、作型等の栽培方法及び市町村・農協の管轄区域等を考慮し、農作物の主要な栽培地帯を中心に、農作物の種類ごとに設置した。

発生予察に係る調査地点数一覧

(単位:地点)

作物部門	農作物名	区分	予察調査ほ		防除適期決定ほ等	
			病害虫部予察課等	防除員	予察灯	フェロモントラップ
普通作	水稲	定点	予察灯 1 (筑紫野市)		<ウンカ等> 4 (糸島市、遠賀町、大木町、 行橋市)	<コブノメイガ> 1 (筑紫野市)
		巡回	48	6		
		特別	ウンカ類飛来状況調査 5 ヒメトビウンカ保毒虫検定 16 斑点米カメムシ類発生状況調査5 種子伝染性病害発生状況調査 いもち病183 もみ枯細菌病64			
	大麦	巡回	11	2		
	小麦	巡回	16	4		
		特別	16			
	大豆	巡回	12	5		
特別		12				
果樹	かき	巡回	9	2		
	かんきつ	巡回	8	3		
	ぶどう	巡回	4	1		
	なし	巡回	7	5		
		特別	中間寄主<赤星病> 3			
	キウイフルーツ	特別	2			
野菜	イチゴ	巡回	育苗期・本ぼ 12	2		
		特別	親株 12			
	冬春トマト	巡回	6			
		特別	コナジラミ類保毒虫検定1			
	冬春ナス	巡回	6	1		
	冬レタス	巡回	6			
	アスパラガス	巡回	3			
	冬キャベツ	巡回	7			
野菜共通	定点	黄色粘着板トラップ <コナジラミ類> 3 (筑紫野市、筑後市、うきは市)			<オオタバコガ> 5 (大刀洗町、みやま市、 広川町、北九州市、福岡市)	
特用作	茶	巡回	8	2		
		定点				<ハマキムシ類> 2 (八女市)
作物共通	定点	フェロモントラップ <ハスモンヨトウ> 1 (筑紫野市)			<ハスモンヨトウ> 2 (筑後市、行橋市)	
	定点	予察灯 <果樹カメムシ類> 2 (筑紫野市、八女市)		<果樹カメムシ類> 4 (久留米市、うきは市、 朝倉市、飯塚市)	<チャハネオカメムシ・ハマキムシ類・シ クイムシ類> 8 (宗像市、うきは市 3、 朝倉市 2、八女市 2)	
	定点	フェロモントラップ <果樹カメムシ類> 1 (筑紫野市)				
	特別	越冬密度 <チャバネアオカメムシ> 30 餌作物着生量調査 <ヒノキ球果> 46 ピーティング調査 <ヒノキ球果> 12 口針鞘数調査 <ヒノキ球果> 12				
合計	定点		8カ所	0カ所	8カ所	18カ所
	巡回		157カ所	33カ所	0カ所	0カ所
	特別		419カ所	0カ所	0カ所	0カ所

2 気象概況

(1) 気象概況(福岡 令和6年4月～令和7年3月)

旬 月	上旬			中旬			下旬		
	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間
4月	<p>期間のはじめと終わりに高気圧に覆われて晴れた日もあったが、気圧の谷や前線、湿った空気の影響で曇りや雨の降った日が多かった。3日は低気圧が九州北岸を通過した影響で大雨となった。気温は平年よりかなり高いか高く、旬平均気温は14.3～16.8℃(平年差 1.7～3.4℃)となった。降水量は概ね平年より多いかかなり多く、旬降水量は49.5～151.0mm(平年比 107～278%)となった。日照時間は平年より少ないかかなり少なく、旬間日照時間は平年比 50～76%となった。</p>			<p>11日、15日、20日は気圧の谷や前線の影響で雨が降ったが、高気圧に覆われて晴れた日が多かった。気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は16.4～18.6℃(平年差 2.4～3.5℃)となった。降水量は平年並か平年より少なく、旬降水量は16.5～38.0mm(平年比 34～97%)となった。日照時間は平年並か平年より多く、旬間日照時間は平年比 91～114%となった。</p>			<p>期間の中頃に高気圧に覆われて晴れた日もあったが、九州南部付近を低気圧や前線が次々と通過した影響で曇りや雨の日が多かった。気温は平年よりかなり高いか高く、旬平均気温は17.0～19.2℃(平年差 1.4～2.7℃)となった。降水量は平年並か平年より多く、旬降水量は25.5～77.5mm(平年比 86～162%)となった。日照時間は平年よりかなり少なく、旬間日照時間は平年比 29～54%となった。</p>		
	かなり高い	かなり多い	少ない	かなり高い	平年並	平年並	高い	平年並	かなり少ない
5月	<p>高気圧に覆われた日が多かったが、気圧の谷や湿った空気の影響を受けた日もあった。気温は平年並か平年より低く、旬平均気温は 16.6～18.9℃(平年差 -0.9～0.0℃)となった。降水量はおおむね平年より少なく、旬降水量は 6.0～31.5mm(平年比 14～54%)となった。日照時間は平年並で、旬間日照時間は平年比 95～106%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、12日は前線が通過した影響で大雨となり、16日は低気圧が対馬海峡を通過した影響で強風が吹いた。気温は平年並か平年より高く、旬平均気温は18.5～20.7℃(平年差 0.2～1.0℃)となった。降水量は平年並で、旬降水量は26.5～70.5mm(平年比 54～105%)となった。日照時間は平年よりかなり多く、旬間日照時間は平年比 135～151%となった。</p>			<p>天気は数日の周期で変化し、26日から27日は前線の影響で28日は低気圧が九州南部を通過した影響で福岡県南部を中心に大雨となった。気温は平年並か平年より高く、旬平均気温は19.8～22.2℃(平年差 -0.2～0.9℃)となった。降水量は平年より多いかかなり多く、旬降水量は37.0～160.0mm(平年比 138～582%)となった。日照時間は平年より少ないか平年並で、旬間日照時間は平年比 81～97%となった。</p>		
	平年並	少ない	平年並	高い	平年並	かなり多い	平年並	多い	少ない
6月	<p>天気は数日の周期で変化し、高気圧に覆われて晴れた日もあったが、気圧の谷や湿った空気の影響で雨が降った日もあった。気温は平年より低く、旬平均気温は19.9～22.0℃(平年差 -1.1～-0.3℃)となった。降水量は平年並か少なく、旬降水量は 11.5～49.0mm(平年比 21～130%)となった。日照時間はおおむね平年より多く、旬間日照時間は平年比 100～133%となった。</p>			<p>16日までは高気圧に覆われて晴れた日が多く、17日以降は低気圧や梅雨前線などの影響で雨が降った日が多かった。気温はおおむね平年よりかなり高く、旬平均気温は23.3～25.7℃(平年差 1.0～2.1℃)となった。降水量は平年並か平年より多く、旬降水量は43.0～126.5mm(平年比 73～131%)となった。日照時間は平年より多く、旬間日照時間は平年比 130～150%となった。</p>			<p>期間を通して梅雨前線の影響を受け、曇りや雨の日が多く、大雨となった所もあった。気温は平年並か平年より高く、旬平均気温は23.8～25.2℃(平年差 0.1～1.1℃)となった。降水量は平年並か平年より多く、旬降水量は89.5～285.5mm(平年比 72～154%)となった。日照時間は平年よりかなり少なく、旬間日照時間は平年比 19～34%となった。</p>		
	低い	平年並	多い	かなり高い	多い	多い	平年並	平年並	かなり少ない

旬 月	上旬			中旬			下旬		
	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間
7月	<p>高気圧に覆われやすく、晴れて気温が上がり猛暑日となった所があった。一方、期間のはじめと終わりは梅雨前線や湿った空気の影響を受け、大雨となった所もあった。</p> <p>気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は27.7～30.4℃(平年差 2.7～4.3℃)となった。</p> <p>降水量はおおむね平年並か平年より少なく、旬降水量は33.0～241.0mm(平年比 17～159%)となった。</p> <p>日照時間は平年より多く、旬間日照時間は平年比 118～183%となった。</p>			<p>期間の前半は九州北部付近に梅雨前線が停滞した影響で大雨となった所があり、期間の後半は高気圧に覆われて晴れた日もあったが湿った空気の影響を受け雨が降った。</p> <p>気温は平年並で、旬平均気温は26.0～28.1℃(平年差 -0.4～0.9℃)となった。</p> <p>降水量はおおむね平年より多く、旬降水量は81.0～243.5mm(平年比 81～219%)となった。</p> <p>日照時間は平年並か平年より少なく、旬間日照時間は平年比 59～83%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、21日と期間の中頃は湿った空気の影響で雨が降った。</p> <p>気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は28.7～31.2℃(平年差 1.7～2.8℃)となった。</p> <p>降水量は平年並か平年より少なく、旬降水量は0.0～47.5mm(平年比 0～68%)となった。</p> <p>日照時間は平年より多いかかなり多く、旬間日照時間は平年比 124～145%となった。</p>		
	かなり高い	平年並	多い	平年並	多い	平年並	かなり高い	平年並	多い
8月	<p>期間を通して高気圧に覆われて晴れ、気温がかなり高くなった。また、強い日射の影響により雷雨となった所があった。</p> <p>気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は29.3～31.8℃(平年差 1.8～3.0℃)となった。</p> <p>降水量は平年よりかなり少ないか少なく、旬降水量は0.0～41.5mm(平年比 0～82%)となった。</p> <p>日照時間は平年よりかなり多く、旬間日照時間は平年比 147～161%となった。</p>			<p>期間を通して高気圧に覆われて晴れた日が多かった。また、強い日射の影響などにより雷雨となった所があった。</p> <p>気温は平年よりかなり高いか高く、旬平均気温は28.3～30.6℃(平年差 0.8～2.2℃)となった。</p> <p>降水量は平年よりかなり少ないか少なく、旬降水量は0.0～52.0mm(平年比 0～73%)となった。</p> <p>日照時間は平年よりかなり多くか多く、旬間日照時間は平年比 141～165%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、期間の終わりは台風第10号の影響で大雨となった。なお、台風第10号は、29日8時頃に強い勢力で鹿児島県薩摩川内市付近に上陸し、九州を横断した。</p> <p>気温は平年よりかなり高いか高く、旬平均気温は27.6～29.7℃(平年差 1.0～2.5℃)となった。</p> <p>降水量は平年より多いかかなり多く、旬降水量は118.0～543.0mm(平年比 123～472%)となった。</p> <p>日照時間は平年並で、旬間日照時間は平年比 87～113%となった。</p>		
	かなり高い	かなり少ない	かなり多い	高い	少ない	かなり多い	高い	多い	平年並
9月	<p>期間を通して高気圧に覆われて晴れたが、10日は湿った空気や日射の影響で雷雨となった所があった。</p> <p>気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は26.6～29.4℃(平年差 2.0～3.3℃)となった。</p> <p>降水量は平年よりかなり少ないか少なく、旬降水量は0.0～16.0mm(平年比 0～25%)となった。</p> <p>日照時間は平年よりかなり多く、旬間日照時間は平年比 165～202%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、期間の前半は湿った空気や日射の影響で雷雨となった日があった。</p> <p>気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は28.2～31.0℃(平年差 4.8～6.3℃)となった。</p> <p>降水量は概ね平年より少なく、旬降水量は0.0～63.5mm(平年比 0～110%)となった。</p> <p>日照時間は平年より多いかかなり多く、旬間日照時間は平年比 127～166%となった。</p>			<p>期間の前半は曇りや雨の日が多く、21日から22日は前線に向かって湿った空気が流れ込んだ影響で大雨となった所があった。期間の後半は高気圧に覆われて晴れた日が多かった。</p> <p>気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は24.2～26.6℃(平年差 2.8～3.9℃)となった。</p> <p>降水量は平年並か平年より多く、旬降水量は18.5～125.5mm(平年比 32～233%)となった。</p> <p>日照時間は平年並か平年より多く、旬間日照時間は平年比 96～128%となった。</p>		
	かなり高い	少ない	かなり多い	かなり高い	平年並	かなり多い	かなり高い	多い	多い

旬 月	上旬			中旬			下旬		
	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間
10 月	<p>天気は数日の周期で変化し、2日から4日にかけてと6日から8日にかけては秋雨前線の影響で雨が降った。 気温は平年並か平年より高く、旬平均気温は20.3～22.5℃(平年差 0.2～1.8℃)となった。 降水量は平年並か平年より多く、旬降水量は34.0～115.5mm(平年比 94～254%)となった。 日照時間は平年よりかなり少ないか少なく、旬間日照時間は平年比 63～78%となった。</p>			<p>期間のはじめと20日は高気圧に覆われて晴れたが、気圧の谷や低気圧、前線の影響で曇りや雨の日が多く、19日は前線の影響で大雨となった所があった。 気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は20.4～23.1℃(平年差 2.9～3.9℃)となった。 降水量は平年並か平年より多く、旬降水量は11.0～60.5mm(平年比 36～283%)となった。 日照時間は平年より少ないか平年並で、旬間日照時間は平年比 74～93%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日もあったが、気圧の谷や湿った空気の影響を受けた日が多く、曇りや雨の日が多かった。 気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は18.2～20.8℃(平年差 2.1～4.1℃)となった。 降水量は平年並か平年より多く、旬降水量は14.0～69.5mm(平年比 52～179%)となった。 日照時間は概ね平年よりかなり少なく、旬間日照時間は平年比 35～57%となった。</p>		
	高い	多い	少ない	かなり高い	平年並	少ない	かなり高い	多い	かなり少ない
11 月	<p>1日から2日にかけては低気圧や前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込み大雨となった。その後は高気圧に覆われておおむね晴れたが、10日は気圧の谷や湿った空気の影響で雨が降った。 気温は平年より高いかかなり高く、旬平均気温は15.4～18.1℃(平年差 1.1～2.7℃)となった。 降水量は平年より多いかかなり多く、旬降水量は80.0～279.5mm(平年比 252～1137%)となった。 日照時間は平年並で、旬間日照時間は平年比 92～111%となった。</p>			<p>15日～18日は気圧の谷や前線の影響で雨が降ったが、高気圧に覆われて晴れた日が多かった。18日は冬型の気圧配置となり強風が吹いた。 気温は平年より高いかかなり高く、旬平均気温は14.4～17.0℃(平年差 2.5～4.0℃)となった。 降水量は平年より少ないかかなり少なく、旬降水量は0.0～10.5mm(平年比 0～26%)となった。 日照時間は平年並で、旬間日照時間は平年比 95～112%となった。</p>			<p>期間の前半は高気圧に覆われて晴れた日もあったが、気圧の谷や寒気の影響で雨が降った日が多かった。27日から29日にかけては、上空に強い寒気が流れ込み大気の状態が非常に不安定となり、雷雨となった所もあった。 気温は平年並か平年より低く、旬平均気温は9.1～12.3℃(平年差 -0.8～0.3℃)となった。 降水量は平年より多いかかなり多く、旬降水量は22.5～78.0mm(平年比 135～305%)となった。 日照時間は平年並か平年より少なく、旬間日照時間は平年比 76～104%となった。</p>		
	かなり高い	かなり多い	平年並	高い	少ない	平年並	平年並	かなり多い	平年並
12 月	<p>高気圧に覆われて晴れた日があったが、4日以降は寒気の影響を受けたため雲が広がる日が多かった。 気温は平年並か平年より高く、旬平均気温は7.2～10.9℃(平年差 -0.3～1.0℃)となった。 降水量は平年より少ないかかなり少なく、旬降水量は0.5～11.0mm(平年比 2～38%)となった。 日照時間は平年より多いかかなり多く、旬間日照時間は平年比 123～150%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日もあったが、寒気や気圧の谷の影響で雲が広がり雨の降った日が多かった。20日朝は高気圧に覆われて晴れた影響で気温が下がり、福岡で初霜、初氷を観測した。 気温は平年並か平年より低く、旬平均気温は4.8～8.6℃(平年差 -1.0～-0.1℃)となった。 降水量は平年並か平年より少なく、旬降水量は1.5～23.5mm(平年比 11～127%)となった。 日照時間は平年並か平年より多く、旬間日照時間は平年比 85～117%となった。</p>			<p>期間の前半は高気圧に覆われ晴れた日が多かったが、21日から22日は湿った空気や寒気の影響で雨や雪が降った。期間の後半は気圧の谷や寒気の影響で曇りの日が多かった。22日朝は福岡で初雪を観測した。 気温は平年並で、旬平均気温は4.7～8.0℃(平年差 -0.4～0.3℃)となった。 降水量は平年より少ないかかなり少なく、旬降水量は1.0～10.5mm(平年比 6～33%)となった。 日照時間は平年並か平年より多く、旬間日照時間は平年比 105～132%となった。</p>		
	平年並	かなり少ない	多い	平年並	平年並	平年並	平年並	少ない	平年並

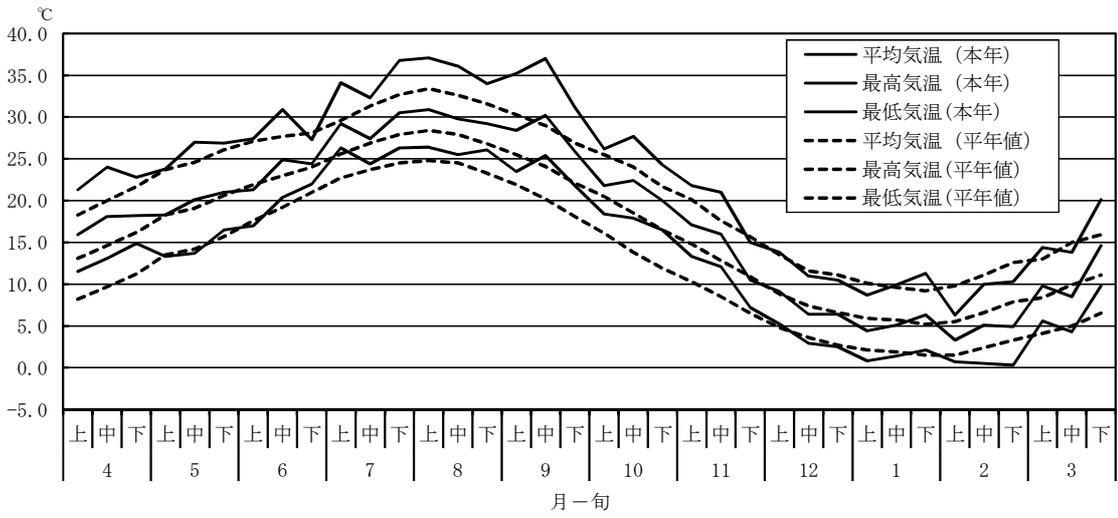
旬 月	上旬			中旬			下旬		
	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間	平均気温	降水量	日照時間
1月	<p>期間のはじめは高気圧に覆われて晴れたが、その後は寒気や気圧の谷の影響で曇りや雨、雪の降った日が多かった。9日から10日は強い寒気が流れ込み、強い冬型の気圧配置となったため、強風となった。10日は、飯塚で3センチ、八幡で2センチ、福岡市中央区で1センチの積雪を観測した。 気温は平年より低く、旬平均気温は3.1～6.0℃(平年差 -1.5～-1.0℃)となった。降水量は平年並で、旬降水量は7.0～25.0mm(平年比 43～96%)となった。日照時間は平年並か平年より多く、旬間日照時間は平年比 97～116%となった。</p>			<p>17日までは気圧の谷や寒気の影響で曇りの日が多く雨や雪が降った。その後は高気圧に覆われて晴れた。 気温は平年並か平年より高く、旬平均気温は3.9～6.7℃(平年差 -0.6～0.4℃)となった。 降水量は平年より少ないかかなり少なく、旬降水量は0.5～13.5mm(平年比 2～47%)となった。 日照時間は平年並で、旬間日照時間は平年比 83～113%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、27日から29日は寒気の影響で雪や雨が降った。 気温は平年より高いか平年並で、旬平均気温は5.2～7.6℃(平年差 0.6～1.7℃)となった。 降水量は平年より少ないかかなり少なく、旬降水量は1.0～13.5mm(平年比 5～47%)となった。 日照時間は平年よりかなり多く、旬間日照時間は平年比 144～189%となった。</p>		
	低い	平年並	平年並	平年並	かなり少ない	平年並	高い	少ない	かなり多い
2月	<p>1日は低気圧が九州を通過した影響で大雨となった。4日から6日、7日から8日にかけて強い寒気が流れ込み、冬型の気圧配置が強まった影響で、5日は飯塚で3センチ、八女で1センチ、八幡で1センチ、8日は北九州空港で1センチの積雪を観測した。また、7日は強い風が吹いた。 気温は平年よりかなり低く、旬平均気温は1.7～4.3℃(平年差 -2.8～-2.1℃)となった。 降水量は平年並か平年より多く、旬降水量は20.5～51.0mm(平年比 103～214%)となった。 日照時間は平年よりかなり少ないか少なく、旬間日照時間は平年比 32～89%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かった。気温は平年より低い平年並で、旬平均気温は3.7～6.6℃(平年差 -1.7～-0.6℃)となった。 降水量は概ね平年より少なく、旬降水量は2.0～17.0mm(平年比 7～66%)となった。 日照時間は平年よりかなり多いか多く、旬間日照時間は平年比 135～172%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、23日から24日にかけて強い寒気が流れ込み、冬型の気圧配置が強まった影響で、24日は飯塚で1センチの積雪を観測した。 気温は平年より低いかなり低く、旬平均気温は3.8～6.3℃(平年差 -3.4～-1.8℃)となった。 降水量は平年よりかなり少ないか少なく、旬降水量は0.5～7.0mm(平年比 2～23%)となった。 日照時間は平年並か平年より多く、旬間日照時間は平年比 108～132%となった。</p>		
	かなり低い	平年並	かなり少ない	低い	少ない	かなり多い	低い	かなり少ない	平年並
3月	<p>期間の前半は気圧の谷や前線、寒気の影響で曇りや雨の日が多く、後半は高気圧に覆われて晴れた日が多かった。 気温は平年より高いか平年並で、旬平均気温は8.1～10.4℃(平年差 -0.3～2.2℃)となった。 降水量は平年より多いかかなり多く、旬降水量は45.5～102.5mm(平年比 124～257%)となった。 日照時間は平年より少なく、旬間日照時間は平年比 66～86%となった。</p>			<p>期間の前半は晴れた日もあったが、気圧の谷や湿った空気の影響で曇りの日が多かった。後半は強い寒気の影響を受け、曇りや雨の日が多く、雪やみぞれの降った日があった。 気温は平年より低い平年並で、旬平均気温は7.3～9.4℃(平年差 -1.6～-0.9℃)となった。 降水量は平年並か平年より多く、旬降水量は30.0～76.5mm(平年比 76～231%)となった。 日照時間は平年より少ないかかなり少なく、旬間日照時間は平年比 52～73%となった。</p>			<p>高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、27日と28日は気圧の谷や湿った空気の影響で雨が降った。期間の終わりは寒気の影響を受けた。 気温は平年よりかなり高く、旬平均気温は13.4～15.7℃(平年差 2.8～4.3℃)となった。 降水量は概ね平年より少なく、旬降水量は5.0～27.5mm(平年比 19～61%)となった。 日照時間は平年より多いかかなり多く、旬間日照時間は平年比 123～143%となった。</p>		
	高い	多い	少ない	低い	多い	かなり少ない	かなり高い	少ない	かなり多い

注1) 表中の平均気温、降水量、日照時間は、福岡地点での平年値との比較を表す。

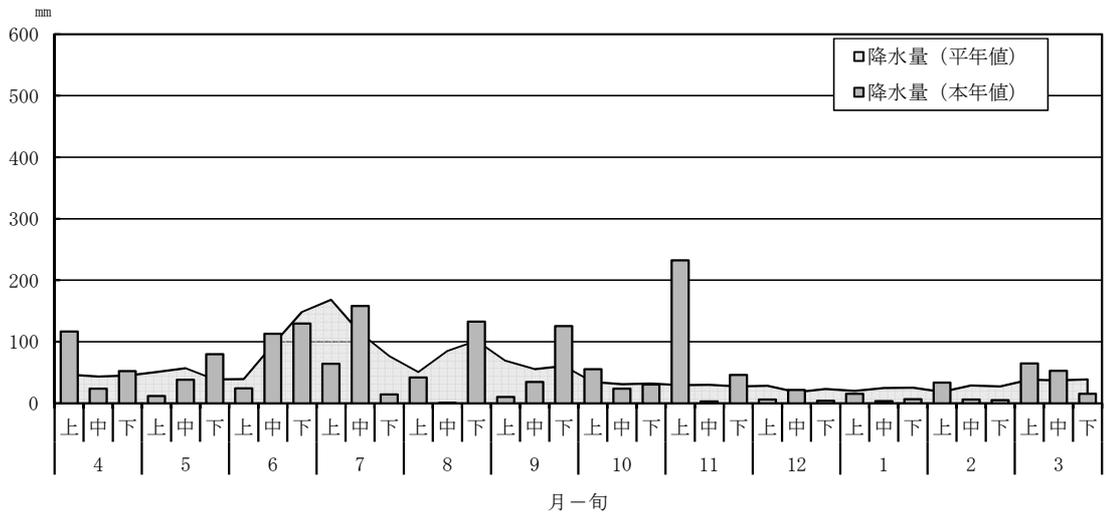
注2) 福岡県気象月報 福岡管区气象台 令和6年(2024年)4月～令和7年(2025年)3月から抜粋

(2) 気象図(太宰府アメダス、令和6年4月～令和7年3月)

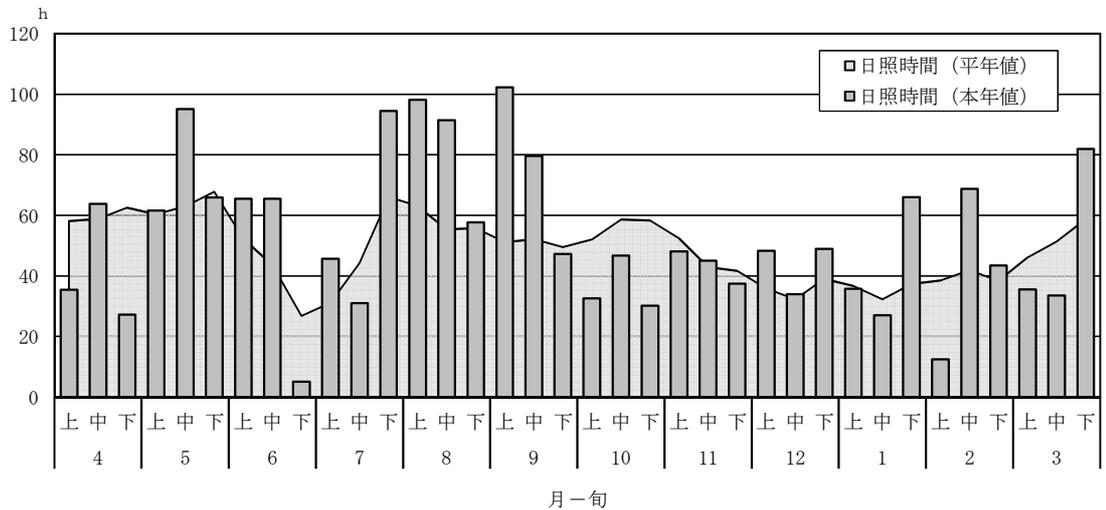
① 気温の推移



② 降水量の推移



③ 日照時間の推移



注) 平年値：1991～2020年

3 農作物の生育概況

(1) 普通作物

ア 水稻（令和6年度米・麦・大豆生産改善情報第2号より抜粋）

6月下旬から7月中旬にかけての断続的な日照不足により早生を中心に生育が抑制されたものの、それ以降は天候に恵まれ、全もみ数は平年並みとなった。

しかし、出穂期以降の高温（特に高夜温）により、白未熟粒等の発生や粒肥大の抑制等がみられたことから、登熟がやや不良となり、作況指数98となった。

イ 麦類（令和6年度米・麦・大豆生産改善情報第1号より抜粋）

播種期は、好天に恵まれたことから作業は順調に進み、播種最盛期は小麦、二条大麦、六条大麦及び裸麦（以下、「4麦」という）ともに前年並みとなった。出芽も前年並みであり、その後の生育は順調であった。

1月中旬から2月末にかけて高温多雨であったことから、草丈は長く、莖数はやや少なくなった。また、多雨により踏圧等の中間管理作業が十分に実施できなかったほ場では、出穂のばらつきがみられた。

3月以降も高温多雨であったことから一部で湿害や病害が発生し、根の活力が低下したことによる下葉の枯上がりや枯熟れ様障害が散見された。

生育期間を通して高温で経過したことから、出穂期は4麦とも前年同様にやや早くなった。また、出穂期以降も高温多雨であったことから赤かび病の発生が懸念されたが、適宜防除が行われた結果、発生の程度はわずかであった。

収穫作業は順調に終了し、生育が前進したことから刈取最盛期は前年に比べて小麦で3日、二条大麦で1日、はだか麦で2日早くなった。

以上のことから10a当たり収量は、豊作であった前年産に比べると、小麦、二条大麦、はだか麦で不良となった。

ウ 大豆（令和6年度米・麦・大豆生産改善情報第2号より抜粋）

播種は、播種は県北地域で6月下旬から、県南地域では7月上旬から開始されが、降雨の影響により7月22日頃が最盛期となった。出芽・苗立ちは、概ね順調であったが、7月中旬播きについては、梅雨末期の大雨により一部のほ場で出芽不良が発生した。

初期生育は、7月下旬から8月下旬の気温が非常に高く、降雨は少なく乾燥状態が続いたため、生育量が確保できず草丈は低くなった。特に県北部の沿岸部では降雨がなく、生育不良が目立った。開花期は平年並みであった。

8月中旬以降は、高温多照が続き、8月末の台風10号によるまとまった降雨以外は殆ど雨が降らず、乾燥が続き莢数はやや少なくなった。9月上旬以降も、気温は高く多照、少雨が続き乾燥気味の生育となり、子実肥大に影響した。

病害虫は、ハスモンヨトウやカメムシ類が多発し被害が目立った。紫斑病、白絹病は連作ほ場で発生が目立った。昨年、発生が見られた黒根腐病は少なかった。

葉の黄化は10月25日頃から始まり、落葉期は11月5日頃で、青立ち株の発生が目立った。特に県北地域や遅播きで発生が多かった。

播種後から莢伸長期の生育が、乾燥により確保できず、主茎長は短く、m²当たり莢数はやや少なかった。

収穫は11月上旬から始まり、最盛期は11月中旬であった。12月は降雨日が多く、収穫作業が遅れ12月中旬に概ね終了した。

収量は、百粒重は同等からやや重かったものの、莢数が少なかったため、平年に比べ少なくなった。

品質は、大粒割合はやや低く、中粒が中心となった。なお、紫斑病粒は例年並に認められた。

(2) 果樹 (令和6年度専門委員会資料、生産対策会議資料、専技情報より抜粋)

ア かき

展葉期は平年より1～5日程度早く、開花期は平年より6～9日早かった。「富有」では雌花の着生は平年より多かった。

結果率は、「早秋」、「富有」が平年より低く、その他は平年並であった。果実肥大は、地域差はあるものの概ね小玉傾向であった。

収穫盛期は「富有」では4～12日程遅かった。鳥害が多く、また、日焼けやカメムシ被害により正品果率は低かった影響で出荷量は前年を下回った。食味は良好であった。

イ かんきつ (温州みかん)

発芽は平年より3～4日早く、開花は平年より2～3日程早かった。着花数は、極早生は並～やや多、早生はやや少～並、普通はやや少～並であった。着果量は、極早生は平年並、早生と普通は平年より少なく、裏年であった。

果実肥大については、着果が比較的多かった極早生では小玉傾向。着果が確保された早生では小玉であったが、裏年となった早生、普通では果実肥大が良く大玉傾向で推移した。

糖度については、極早生では高傾向、早生と普通では高温のため低い傾向であった。

ウ なし

露地作型において、満開日は「幸水」では4月4日、「豊水」では4月2日で、前年より遅く平年よりやや早かった。果実横径は平年よりやや大きかった。

露地「幸水」は、果実肥大は平年並で、着果量がやや少なく、病害虫の被害等により出荷量は平年を下回った。「豊水」は全般的に大玉傾向であったが、着果不足により収量は平年より少なかった。また高温の影響で全品種で果肉障害が発生した。

(3) 野菜

ア イチゴ (令和5年6月～令和6年4月) (令和6年度イチゴ生産販売振興対策会議資料より抜粋)

切り離し後、降雨が比較的少なく日照時間が長かったため、苗の生育は概ね順調であったが、6月下旬～7月上旬の断続的な降雨により根傷みの発生が多く、徒長が見受けられた。さらに、7月10日の記録的豪雨により県南の一部地域で苗冠水や流失等甚大な被害が発生した。梅雨明け後は高温が続き炭疽病や高温障害の発生が多くなった。また、ハダニ類、アブラムシ類、チョウ目害虫の発生がみられた。

花芽分化は、早期作型では5型でばらつきがみられ、普通作型は夜温が下がらず大幅に遅れ、9月25日から9月28日にかけての定植が中心となった。定植後は降雨が少なく、マルチ・天井被覆は順調に進んだ。炭疽病による枯死株が例年より多くみられ、またヨトウ類が大発生し、多くの被害がみられた。

早期作型の出荷は、早いほ場で11月6日から開始となり、前年度と同時期に始まったが、高温により小玉傾向となった。11月中旬以降は平年より気温が低く、生育が緩慢となり、出荷が昨年より遅れ、出荷量も下回った。普通作型の1番果房終盤は1月中旬以降であった。

2番果房の出荷は、早期作型では1月下旬頃から始まったものの、曇天及び低温により草勢が低下し、玉落ちが早く、2月15日から2月20日にかけて緩やかなピークとなった。厳寒期における病害虫としてはハダニ類、アザミウマ類、うどんこ病、灰色かび病の発生がみられた。

3月に入り、2番果房が概ね終盤となる中、3番果房の開花は例年よりやや遅かった。2番果房と3番果房は比較的連続していたが、2番果房の玉落ちが早く、3月上旬に出荷の谷となった。3番果房の出荷は3月中旬から徐々に増加したが、2月の曇天による日照不足や株疲れから、小玉傾向で玉落ちが早い状況となり、出荷量は前年を下回った。ミツバチの訪花不足や果房間の養分競合、日射量不足による養分不足により、不受果や先詰まり果、種より果が多くみられた。3月下旬以降気温が上昇する中、降雨が続いたことにより、3月下旬から4月上旬にかけて、灰色かび病や黒かび病が多発した。

4番果房は4月以降から収穫が開始されたが、生育ステージのバラつきが大きく、ダラダラ

とした出荷となった。

イ 冬春トマト（令和5年10月～令和6年4月）（令和6年度トマト生産対策会議資料より抜粋）
生育初期は定植後の高温乾燥傾向により、1～4段目の着果不良や果実の裂果、芯腐れで正品率が低下し、根傷みによって生育に差がみられた。

早い作型では1～4段目まで着果不良や高温乾燥による裂果が多く発生したが、10月中下旬以降は発生が落ち着いた。病害虫に関しては、秋期にコナジラミ類の発生が多く、黄化葉巻病や黄化病が散見され、一部産地においては平年より少なかったもののすすかび病が確認された。12月上中旬に朝晩の気温が低下したため、コナジラミ類等の害虫は減少したが、依然として黄化葉巻病や黄化病の発生が途切れることなく、葉かび病等の病害も平年並で発生した。

年明け後は全産地出荷開始となったものの、1月に軟化玉や空洞果、凍傷等の品質低下が各産地で発生し、2月には天候不順による影響で果実の着色程度にばらつきが見られ、3月も着果不良により数量が伸び悩んだが、4月以降徐々に増量した。

ウ 冬春ナス（令和5年9月～令和6年4月）（令和6年度ナス生産対策会議資料より抜粋）

好天が続いたことから年内の生育は順調に推移し、10月下旬に各産地の出荷が出揃い、11月中旬に出荷ピークとなった。病害虫は乾燥傾向により、うどんこ病やチョウ目害虫、ハダニ類の発生が多くみられた。

12月下旬に大きく冷え込み、数量は急減、細果と曇天による赤果が増加。2月に入り、気温の上昇とともに数量は増加。着果負担により樹勢が低下し、細果が増加。病害虫は、灰色かび病、黒枯病の発生がみられた。

3月に入り、気温は上昇したが、樹勢回復は遅く、数量は伸び悩み、細果が多かった。3月下旬は悪天候となり、樹勢低下、花芽流れが発生、数量は減少した。4月に入っても天候は回復せず、花芽流れや黒枯病等の病害発生で数量は伸び悩んだ。

エ 冬レタス（各普及指導センターからの情報）

7月中旬以降、高温乾燥により、播種から育苗にかけて、発芽不良や生育不良の発生が多く、ほ場によっては枯死も確認された。9月以降も高温傾向で推移したが、定期的な降雨により生育が順調な地域もあった。一方、乾燥傾向で推移したため、チョウ目害虫被害が目立ったほ場も多かった。また、一部地域では、11月上旬の大雨により、畝上冠水が発生し、苗の水没や生育不良が生じた。12月以降は低温乾燥により生育が遅れた地域もあった。

オ 冬キャベツ（各普及指導センターからの情報）

9～10月の高温寡雨により、定植遅れや初期生育の停滞や枯死が発生した。また、11月の大雨により、湿害等の被害が発生した。また、一部地域では降雹による被害も発生した。また、ハスモンヨトウ、オオタバコガをはじめとするチョウ目害虫による被害が多発し、菌核病の発生も散見された。12月以降は低温傾向となり、生育は遅れ気味であった。

（4）特用作物

ア 茶（農総試八女分場 令和6年度萌芽生育状況報告、実収報告より抜粋）

萌芽期は4月6日で前年より5日遅く、過去5か年の平年値に比べ2日遅かった。

八女分場作況園における一番茶摘採日は4月28日で前年より5日早く、過去5か年の平年値より6日早かった。二番茶摘採日は6月13日で平年より5日、前年より2日早かった。

一番茶摘採から二番茶摘採までに要した期間は46日で、平年より1日、前年より3日長かった。

一番茶の生葉収量は501kg/10aで、平年比80%、前年比56%であった。二番茶の生葉収量は473kg/10aで、平年比71%、前年比75%であった。

4 主要病害虫の発生及び防除状況

(1) 主要病害虫の発生状況、原因解析及び防除対策

ア 普通作物

(ア) 普通期水稲 (2024年6～9月)

a いもち病 (葉いもち：並、穂いもち：やや少)

(a) 発生経過

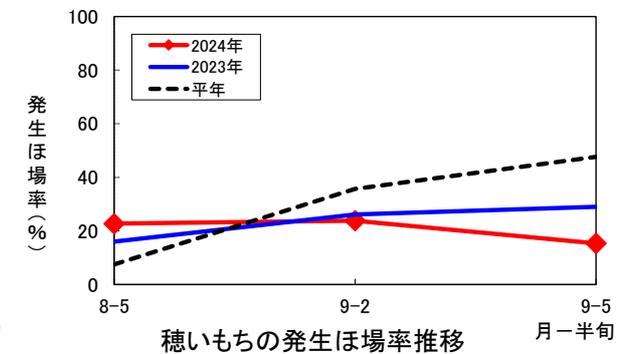
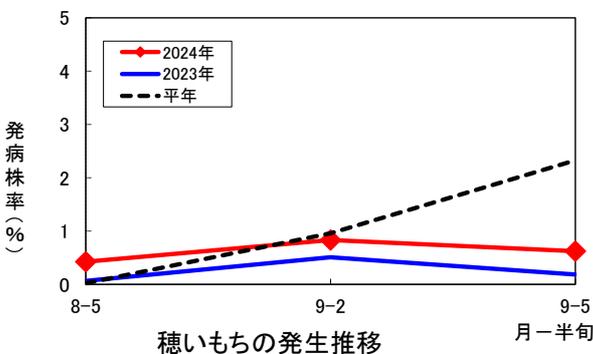
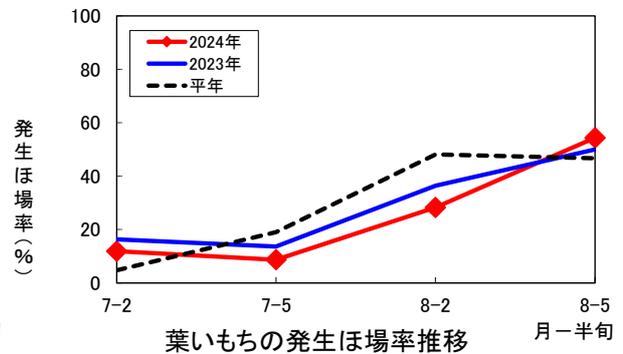
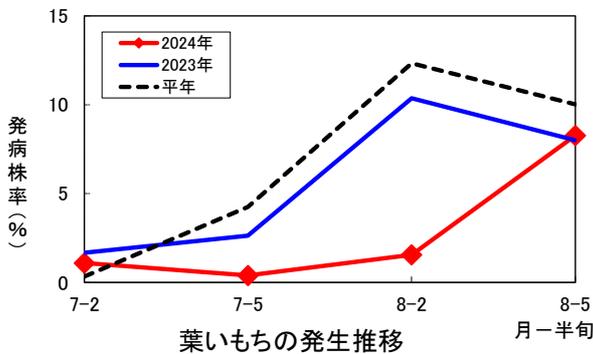
- ・葉いもち：7月2半旬に発生が認められ、平年よりやや多かったが、7月5半旬以降、発生量は少なく推移した。8月5半旬で平年並となった。
- ・穂いもち：8月5半旬に発生が認められたが、9月2半旬以降、発生量は平年よりやや少なく推移した。

(b) 原因解析

- ・葉いもち：6月下旬～7月中旬の寡照傾向が感染に好適な条件であったが、7月下旬～8月の気温は平年より高く、降水量は8月6半旬を除いて少なく、日照時間は平年より多く推移したため、発生量は平年よりやや少なくなった。なお、作付けの早い中山間部や極早生品種を中心に発生が認められた。
- ・穂いもち：7月5半旬以降の気温が高く、降水量は8月6半旬を除いて平年より少なく推移したため、葉いもちの発生が抑制された。

(c) 防除指導

- ・適切な種子消毒や育苗期の防除により、本田への持ち込みを抑える。
- ・長期残効型の箱施薬剤を利用し、発生を確認したら直ちに防除を行う。
- ・曇雨天が多く、葉の湿潤状態が継続する場合は防除回数を増加する。降雨が続き、地上散布が困難な場合は早めに粒剤の施用を行う。
- ・BLASTAMによる感染好適日の情報、巡回調査結果を防除所ホームページに掲載した。
- ・葉いもちの発生が多い場合は、出穂期直前と穂揃期の2回防除で穂いもちの発生を抑制する。



b 紋枯病

(a) 発生経過 (発生量: 並)

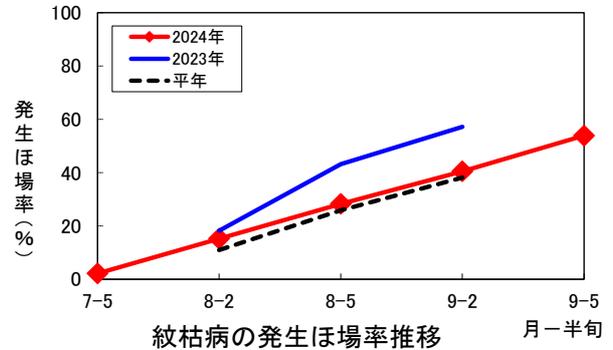
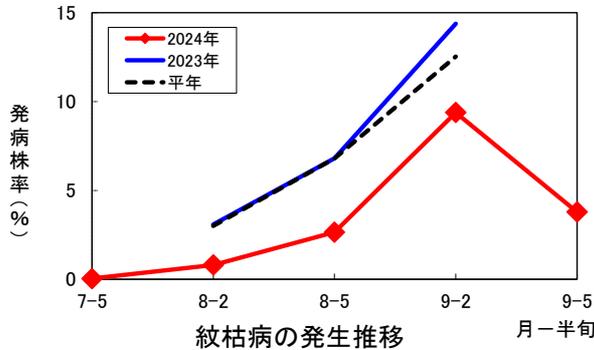
- ・7月5半旬に発生が認められたが、発生量は平年並であった。

(b) 原因解析

- ・ 7月5半旬以降の気温が高く、降水量は8月6半旬を除いて平年より少なく推移したため、発生量は平年並となった。
- ・ 発生が多かったほ場では、土壌中に伝染源が蓄積している可能性がある。

(c) 防除指導

- ・ 箱施薬剤による防除及び出穂2週間～10日前の本田薬剤防除。
- ・ 出穂期以降高温多雨で経過し、病斑の上位進展が認められる場合は、補正防除を行う。



c 縞葉枯病

(a) 発生経過 (発生量: -)

- ・ 発生は認められなかった。

(b) 原因解析

- ・ 本病を媒介するヒメトビウンカの縞葉枯病ウイルス保毒虫率が極めて低かったため、発生が抑制された。
- ・ ヒメトビウンカに効果が高い箱施薬剤の使用。

(c) 防除指導

- ・ 冬期のほ場耕起と畦畔雑草防除によるヒメトビウンカの生息密度低減。
- ・ 箱施薬剤によるヒメトビウンカの防除。

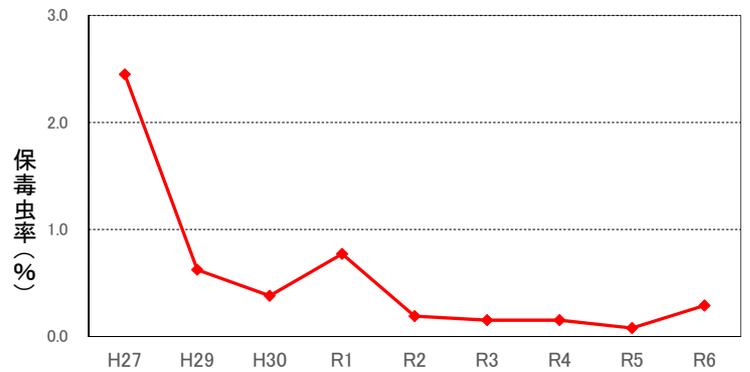


図 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移 (検定対象: 15地点の小麦ほ場で採集した第一世代幼虫)

d ヒメトビウンカ

(a) 発生経過 (発生量: やや少)

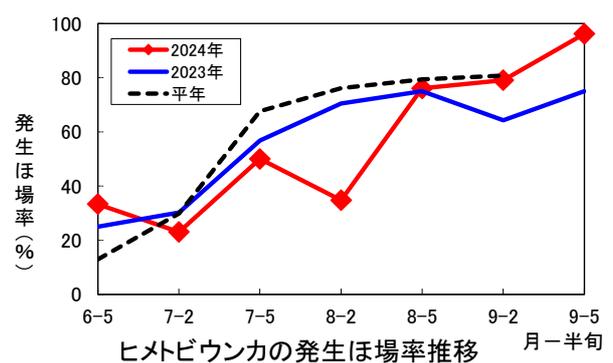
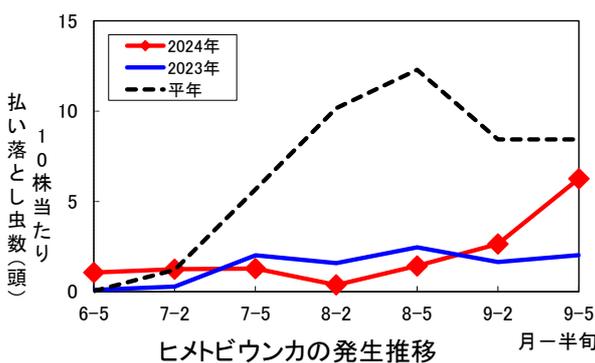
- ・ 5～9月の予察灯 (県内5か所合計) における誘殺虫数は、21頭 (平年 59頭) で、平年より少なかった。
- ・ ほ場では6月5半旬から発生が認められ、平年よりやや少なくて推移した。

(b) 原因解析

- ・ 本種に効果の高い箱施薬剤の施用や本田防除の実施により発生が抑制された。

(c) 防除指導

- ・ 冬期のほ場耕起と畦畔雑草防除。
- ・ 箱施薬剤による防除。



e セジロウンカ

(a) 発生経過（発生量：やや少）

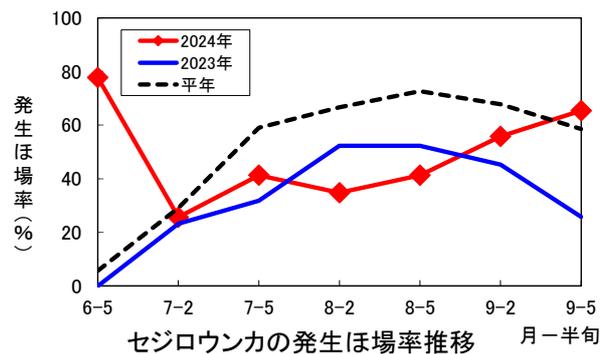
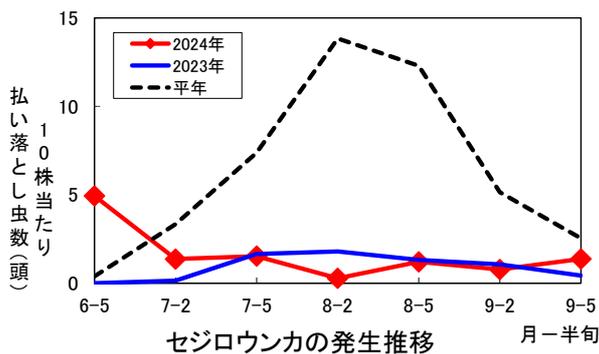
- ・ 5～9月の予察灯（県内5か所合計）における誘殺虫数は、1454頭（平年467頭）で平年よりやや多かった。
- ・ ほ場では6月5半旬に発生が認められ、平年より多い発生であったが、7月2半旬以降、少なく推移した。

(b) 原因解析

- ・ 本種に効果の高い箱施薬剤の施用や本田防除の実施により発生が抑制された。

(c) 防除指導

- ・ 幼穂形成期から穂揃期に吸汁加害を受けると、下位茎葉の黄変枯死や出穂遅延、もみ数の減少が生じるので、7月5半旬から8月2半旬に幼虫の発生が多い場合は薬剤防除を実施する。



f トビイロウンカ

(a) 発生経過（発生量：少）

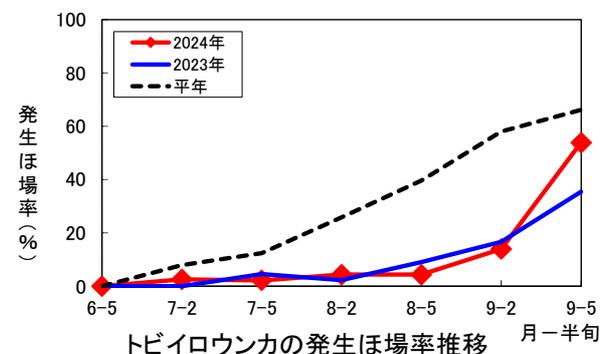
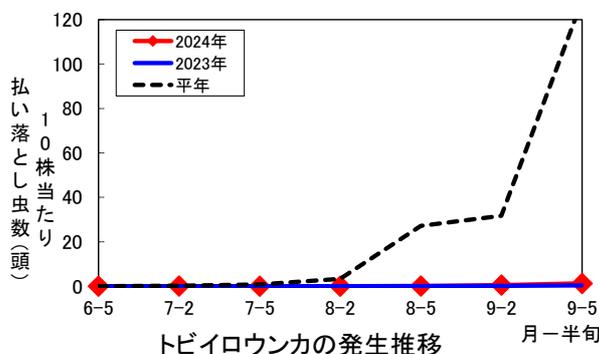
- ・ 予察灯で6月28日以降、散発的に飛来が確認されたが、5～9月の予察灯（県内5か所合計）における誘殺虫数は、7頭（平年42頭）で平年より少なかった。
- ・ ほ場では6月5半旬から発生が認められたが、発生密度および発生ほ場率は平年より少なく推移した。

(b) 原因解析

- ・ 6～8月の飛来量が少なく、本種に効果の高い箱施薬剤の普及や本田防除の実施により発生が抑制された。

(c) 防除指導

- ・ 飛来に基づく発生予想パターン図を参考に、適期防除を行う。
- ・ ほ場での発生状況を確認し、要防除水準を超えた場合は早急に防除を行う。
- ・ 薬剤が株元まで届くよう散布し、散布後に防除効果を必ず確認する。効果がみられない場合は追加防除を行う。



g 斑点米カメムシ（イネカメムシ）

(a) 発生経過（発生量: やや多）

- ・ 5～9月の予察灯（県内5か所合計）における誘殺虫数は2020年頃から増加傾向で、過去4か年で最も多かった。
- ・ 9月2半旬に実施した出穂後の水稲におけるすくい取り調査で、イネカメムシの発生量は過去3か年平均よりやや多く、前年よりやや少なかった。発生ほ場率は、31.0%（過去3か年平均23.9%、前年38.1%）であった。

(b) 原因解析

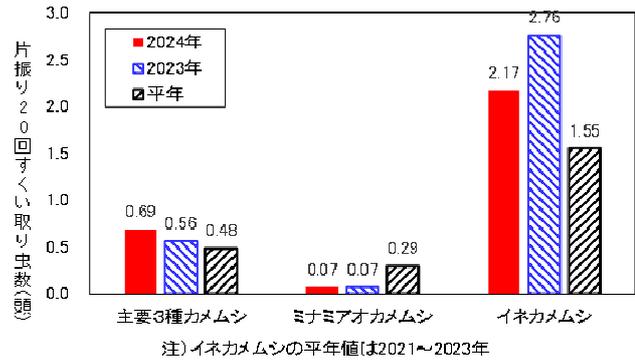
- ・ 8月以降は高温傾向、9月は高温少雨で推移し、増殖に好適な条件であった。
- ・ 熟期が異なる品種が作付けされている地域では、カメムシ類の増殖に有利な状況であったと考えられる。

(c) 防除指導

- ・ 出穂期前後の本田防除及び追加防除。
- ・ 令和6年7月29日に技術情報第8号を発出し、防除の徹底を呼びかけた。

イネカメムシの予察灯誘殺成虫数（県内5地点）

年次	2024	2023	2022	2021	2020
5月	3	0	0	0	0
6月	7	7	8	0	0
7月	825	282	141	8	1
8月	299	388	96	25	4
9月	225	280	169	72	5
年計	1359	957	414	105	10



ほ場における斑点米カメムシ類の発生密度（9月2半旬）

h 斑点米カメムシ（ミナミアオカメムシ、主要3種カメムシ類※）

※主要3種カメムシ類：クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ

(a) 発生経過（発生量: 並）

- ・ 5～9月の予察灯（県内5か所合計）における誘殺虫数は、ミナミアオカメムシでは前年・平年より多かった。主要3種カメムシ類では前年よりやや少なく、平年よりやや多かった。
- ・ 9月2半旬に実施した出穂後の水稲におけるすくい取り調査で、ミナミアオカメムシの発生量は前年及び平年よりやや少なかった。主要3種カメムシ類の発生量は、前年・平年並であった。

(b) 原因解析

- ・ 8月以降は高温傾向、9月は高温少雨で推移し、増殖に好適な条件であった。
- ・ 薬剤防除が適期に行われたため、発生は抑えられたと考えられる。

(c) 防除指導

- ・ 穂揃期と穂揃い7～10日後の本田防除。
- ・ 予察灯の誘殺虫数及び巡回調査（月2回）の結果を防除所ホームページに掲載し、迅速な情報提供に努めた。

ミナミアオカメムシと主要3種カメムシ類の予察灯誘殺成虫数（県内5地点）

害虫名	ミナミアオカメムシ				主要3種カメムシ類			
	2024	2023	2022	平年	2024	2023	2022	平年
5月	29	15	36	24.2	2	2	0	0.5
6月	46	9	142	28.8	5	3	10	4.7
7月	275	85	751	172.0	42	42	31	17.7
8月	197	38	210	67.1	49	54	64	39.6
9月	358	131	234	90.9	26	42	28	17.5
年計	905	278	1373	383.0	124	143	133	80.0

i コブノメイガ

(a) 発生経過（発生量:多）

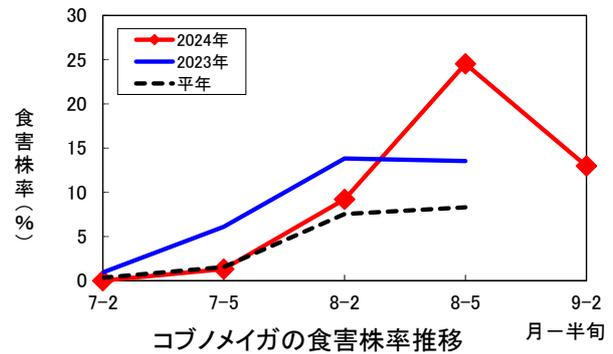
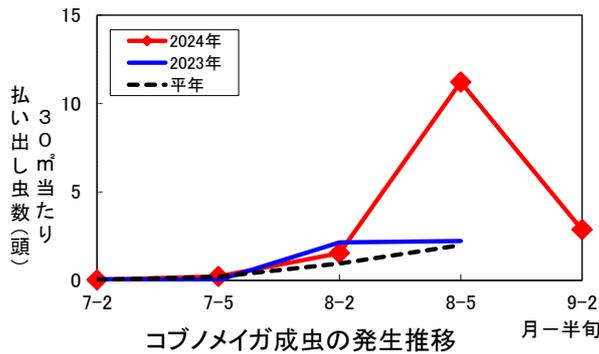
- ・ほ場では7月5半旬から発生が認められ、発生密度及び発生ほ場率は8月5半旬まで平年より多い傾向で推移した。8月5半旬調査では平年・前年より食害株率が高かった。
- ・全域で多い傾向で、収穫前の9月5半旬調査においても、ほ場で成虫が確認され、上位葉の食害が認められた（調査データ無し）。

(b) 原因解析

- ・7月4半旬以降、気温は高く、降水量は8月6半旬及び9月5半旬を除いて少なく推移し、増殖に好適な条件が続いたことで発生が多くなった。
- ・箱施薬剤のジアミド剤（クロラントラニリプロール）の薬剤感受性低下が考えられる。

(c) 防除指導

- ・箱施薬剤による防除。
- ・本田期の基幹防除。



j その他病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
白葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・台風等による冠水がなかった。 ・ほ場基盤整備が進み、中間宿主となる雑草の生息地が減少した。
稲こうじ病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：並	・9月2半旬に発生が認められ、発生量は平年並であった。	・8月の気温は高く、降水量は8月6半旬を除いて平年より少なく推移したため、発生量はやや少なくなったと考えられる。
心枯線虫病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・種子消毒の徹底。
もみ枯細菌病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・9月2半旬に発生が認められ、発生量は平年並であった。	・8月の気温は高かったが、降水量は8月6半旬を除いて平年より少なく推移したため、発生量はやや少なくなったと考えられる。
ばか苗病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・種子消毒の徹底。
ツマグロヨコバイ	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	・6月5半旬から発生が認められ、平年よりやや多く推移した。	・箱施薬によるウンカ類との同時防除。
イネクロカメムシ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・8月2半旬に発生が認められたが、発生はほとんど認められなかった。	・本田での補正防除。

病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
イネミズゾウムシ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・箱施薬剤等による防除。
ニカメイガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・8月5半旬に発生が認められた。	・箱施薬剤等による防除。
フタオビコヤガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・箱施薬剤等による防除。
スクミリンゴガイ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：多	・一部のほ場で食害が認められた。	・浅水管理。 ・薬剤による補正防除。

(イ) 大麦 (2024年1～5月)

a 赤かび病

(a) 発生経過 (発生量：多)

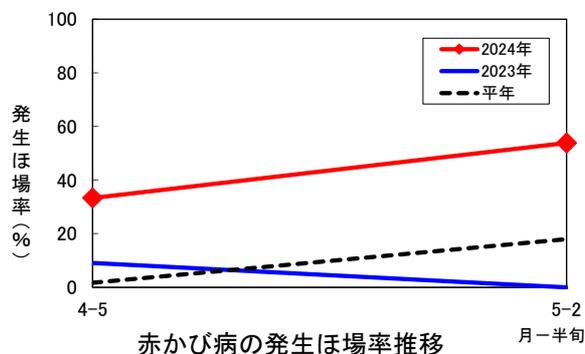
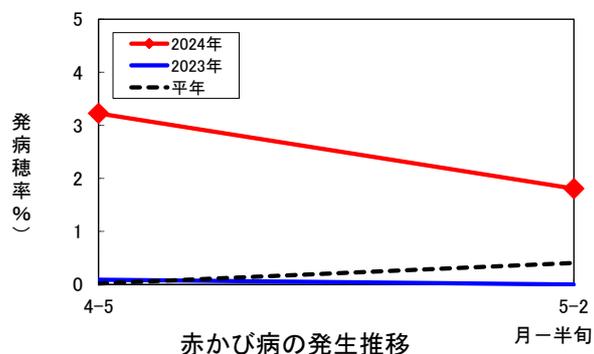
- ・4月5半旬に発病が認められ、発病穂率は平年より多く、ほ場発生率も平年より多かった。

(b) 原因解析

- ・4月上旬～中旬に断続的な降雨があり、4月中旬の気温が高く経過したため、本病の発生に好適条件であった。
- ・本病の防除適期に降雨が続き、防除の遅れにより、発生が助長されたと考えられる。

(c) 防除指導

- ・穂揃期後10日頃に重点をおいて実施する。
- ・降雨が続き、多発が予想される場合には、第一回目散布の7～10日後に補正防除を行う。
- ・令和6年3月7日付けで麦赤かび病に関する技術情報第12号を発出し、適期防除を呼び掛けた。さらに、4月24日付けで注意報第1号を発出し、緊急防除を呼び掛けた。
- ・現地対応で2回防除を実施した地域では、発生が少ない傾向であった。



b 網斑病

(a) 発生経過 (発生量：やや多)

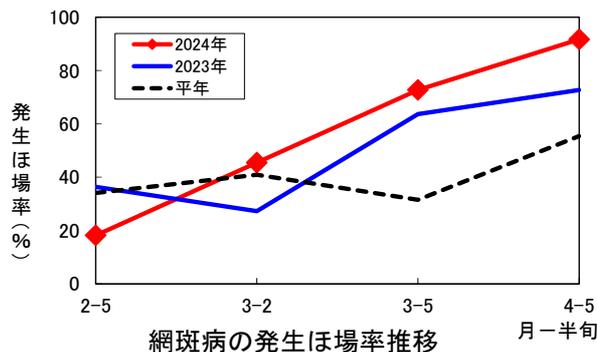
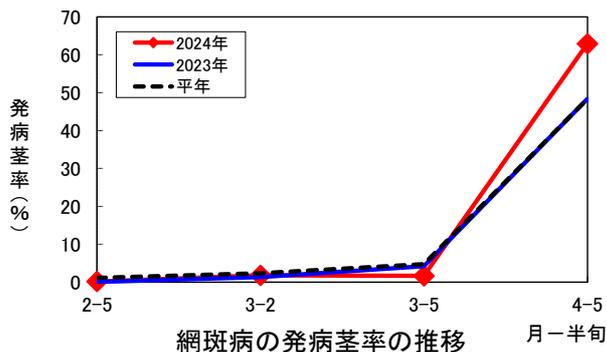
- ・2月5半旬調査で発生が認められ、4月5半旬の発病量は平年よりやや多かった。

(b) 原因解析

- ・1～2月の気温が平年よりも高く、降水量は多く推移した。
- ・3月中旬から4月の気温が平年より高く、降水量も平年より多く推移したため、4月以降の発生が多くなったと考えられる。

(c) 防除指導

- ・健全種子を利用する。トリフルミゾール等による種子消毒の実施。
- ・茎立期に発生を確認し、感染が広がっている場合は、出穂15日前～出穂期までにプロピコナゾール等で補正防除を行う。
- ・第一次伝染源となる被害残さはすき込むが、多発するほ場では2年以上水田に転換する。



c その他病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
うどんこ病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・耐病性品種の普及。 ・赤かび病対象薬剤による同時防除。
黒穂病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・種子消毒の徹底。
さび病類	平年：並 前年：－	平年：やや多 前年：－	・4月5半月に発生が確認され、発生量はやや多く推移した。	・3月中旬～4月の気温が平年より高く、麦の伸長が早くなったため、発生しやすくなったと考えられる。
縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・耐病性品種が普及したことにより、発生が抑制された。
斑葉病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は認められなかった。	・種子消毒の徹底。

(ウ) 小麦 (2024年1～5月)

a 赤かび病

(a) 発生経過 (発生量：多)

・5月2半月調査で発生が認められ、発病穂率、発生ほ場率ともに平年より高かった。

(b) 原因解析

・開花期である4月上旬～中旬に断続的な降雨があり、4月中旬の気温が高く経過したため、本病の発生に好適条件となった。

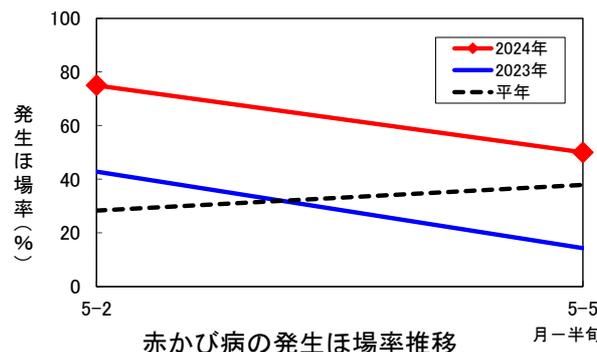
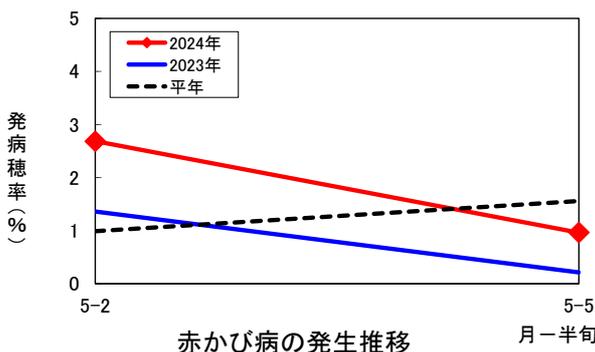
・麦の防除適期に降雨が続き、降雨後の散布や防除時期の遅れにより、発生が助長された。

(c) 防除指導

・開花期(出穂後7～10日)に重点をおいて実施する。

・降雨が続き、多発が予想される場合には、第一回目散布の7～10日後に補正防除を行う。

・令和6年3月7日付けで麦赤かび病に関する技術情報第12号を発出し、適期防除を呼び掛けた。さらに、4月24日付けで注意報第1号を発出し、緊急防除を呼び掛けた。



b 黄斑病

(a) 発生経過（発生量：やや多）

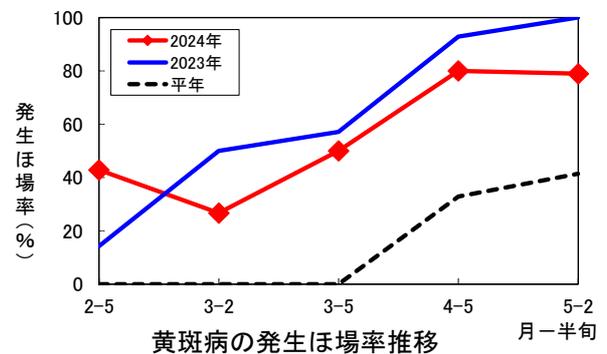
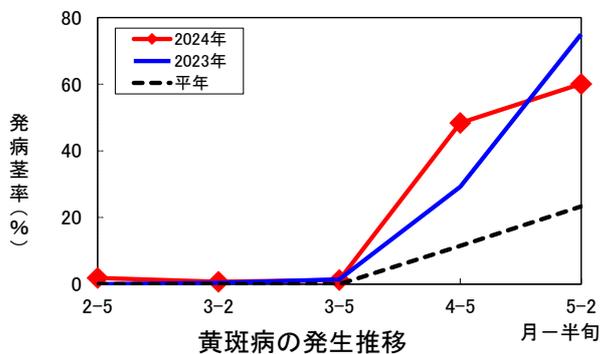
- ・ 2月5半旬調査で発生が認められ、4月5半旬以降、平年より多く推移した。

(b) 原因解析

- ・ 1～2月の気温が平年より高く、降水量は平年より多く推移した。
- ・ 3月中旬～4月の気温が平年より高く、降水量も平年より多く推移したため、4月以降の発生が多くなったとなった。

(c) 防除指導

- ・ 被害残さは第一次伝染源となるため、ほ場外に持ち出し処分する。
- ・ 水田との輪作による発病の抑制。
- ・ 茎立期に発生を確認し、感染が広がっている場合は、出穂期までにプロピコナゾール等で補正防除を行う。
- ・ 令和6年2月27日付けでコムギ黄斑病に関する技術情報第11号を発出し、適期防除を呼び掛けた。



c その他病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
うどんこ病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・赤かび病対象薬剤による同時防除。
黒穂病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・種子消毒の徹底。
さび病類	平年：並 前年：並	平年：多 前年：多	・4月5半旬に発生が認められ、発生量は多く推移した。	・3月中旬～4月の気温が平年より高く、麦の伸長が早くなったため、発生しやすくなった。
縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・耐病性品種が普及したことにより、発生が抑制された。
シロトビムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・2月5半旬調査で一部ほ場で発生が確認されたが、発生量は平年並であった。	・種子消毒の実施や適期播種により被害が少なかった。 ・一部のほ場で、種子消毒が未実施で、生息数が多かったため被害を受けた。

(エ) 大豆（2024年7～10月）

a ハスモンヨトウ

(a) 発生経過（発生量：多）

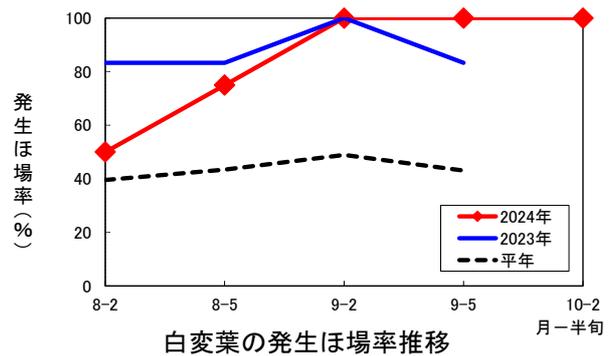
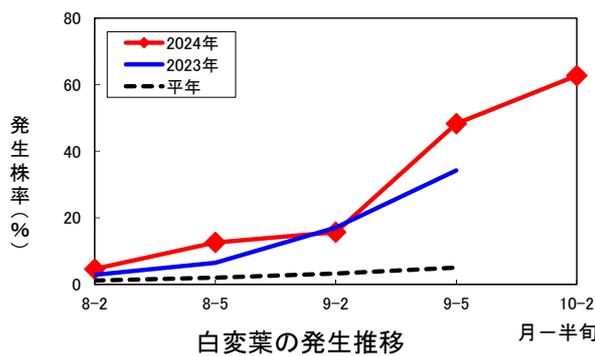
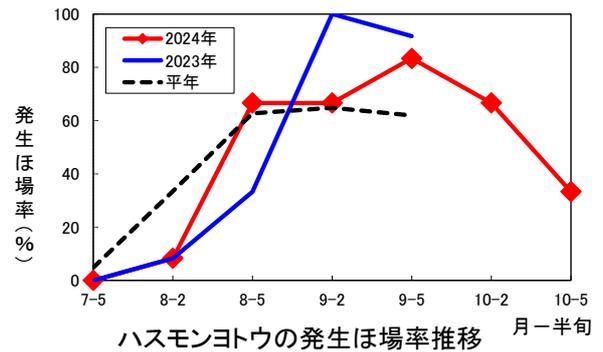
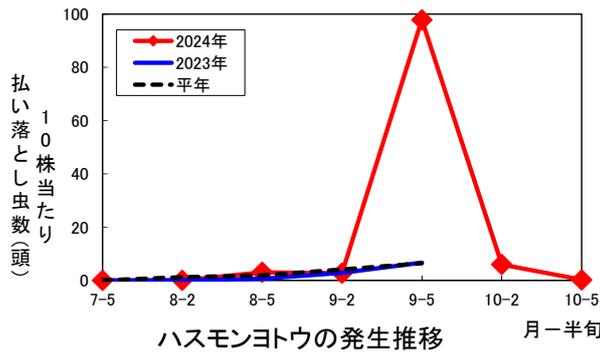
- ・ 8月2半旬以降、白変葉の発生は平年より多く推移し、9月2半旬から5半旬にかけて幼虫の発生量は急増し、平年より多かった。
- ・ 9月2半旬から4半旬にかけてフェロモントラップ（県内3か所）の誘殺虫数は増加した。さらに10月4半旬以降急増し、11月5半旬以降減少した。

(b) 原因解析

- ・ 8～10月の気温は平年より高く、8月6半旬、9月5半旬を除いて少雨傾向で推移した。基幹防除が実施されたが、増殖に好適な条件であったため、発生が多くなった。
- ・ 一部薬剤の感受性低下が考えられる。

(c) 防除指導

- ・ 白変葉は見つけ次第除去する。
- ・ 若齢幼虫期防除の実施。
- ・ フェロモントラップを活用した防除適期の把握。
- ・ 同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布の徹底。
- ・ 令和6年9月19日に注意報第5号、同年9月27日に注意報第6号を発出し、防除の徹底を呼びかけた。



b 吸実性カメムシ類

(a) 発生経過 (発生量：多)

- ・ ミナミアオカメムシの5～9月の予察灯 (県内5か所合計) における誘殺虫数は、平年より多かった。
- ・ ミナミアオカメムシのほ場で発生量はやや多く、ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシのほ場で発生量は多かった。9月2半旬以降、増加傾向で推移した。

(b) 原因解析

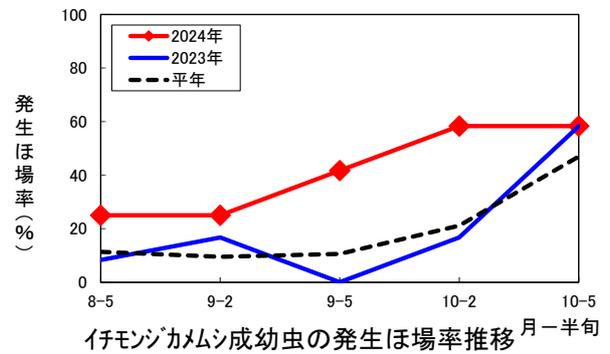
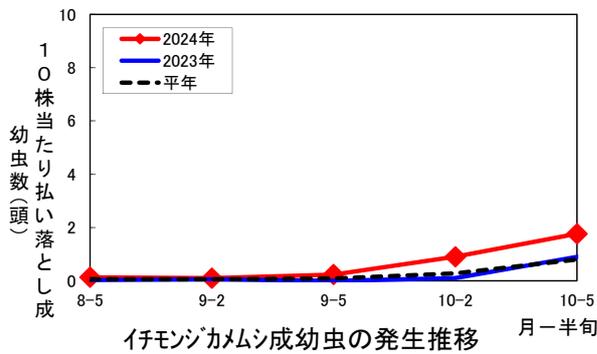
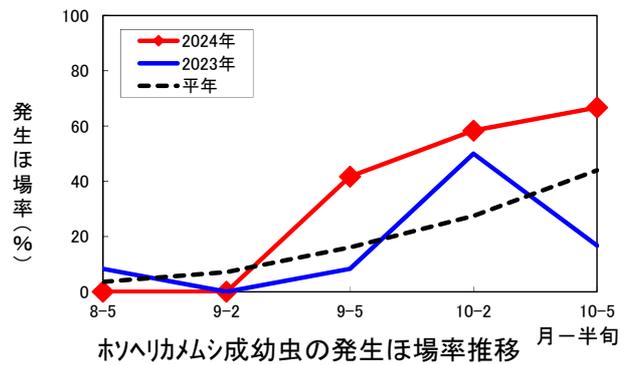
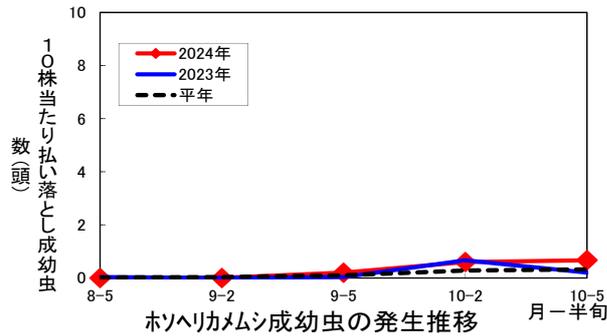
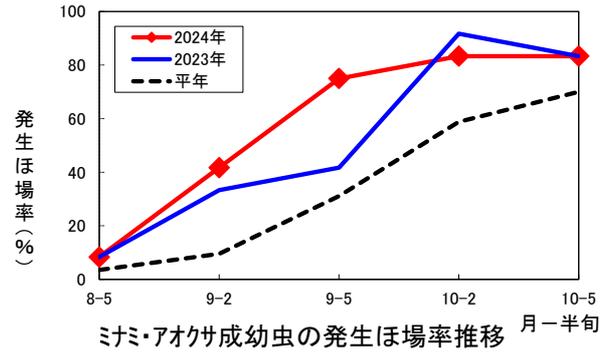
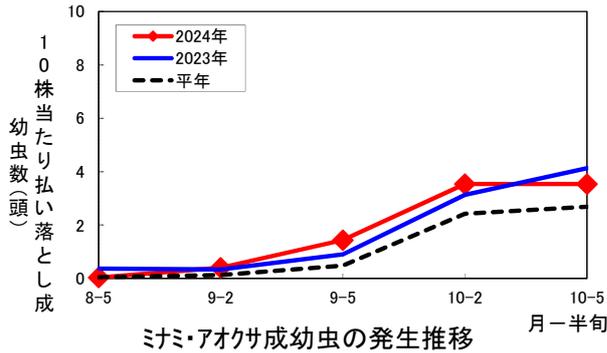
- ・ 8～10月の気温は平年より高く推移し、8月6半旬、9月5半旬を除いて少雨傾向で推移した。基幹防除が実施されたが、増殖に好適な条件であったため、発生が多くなった。

(c) 除指指導

- ・ 開花期後30日前後に1回目の防除を行う。
- ・ 多発生の場合は、その後7～10日後に2回目の防除を行う。

ミナミアカメシと主要3種カメシ類の予察灯誘殺成虫数（県内5地点）

害虫名	ミナミアオカメシ				主要3種カメシ類			
	2024	2023	2022	平年	2024	2023	2022	平年
5月	29	15	36	24.2	2	2	0	0.5
6月	46	9	142	28.8	5	3	10	4.7
7月	275	85	751	172.0	42	42	31	17.7
8月	197	38	210	67.1	49	54	64	39.6
9月	358	131	234	90.9	26	42	28	17.5
年計	905	278	1373	383.0	124	143	133	80.0



c その他病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
さび病	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：やや多	・9月2半旬に一部地域で発生が認められたが、発生量は平年より少なかった。	・8～10月の降水量は8月6半旬、9月5半旬を除いて少雨傾向で推移した。台風の接近や風が少なかったため、発生が少なくなったと考えられる。
べと病	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：少 前年：少	・8月2半旬に一部地域で発生が認められたが、発生量は平年より少なかった。	・8～10月の降水量は8月6半旬、9月5半旬を除いて少雨傾向で推移し、台風の接近や風雨が少なかった。
葉焼病	平年：やや遅 前年：遅	平年：少 前年：少	・9月2半旬に一部地域で発生が認められたが、発生量は平年より少なかった。	・8～10月の降水量は8月6半旬、9月5半旬を除いて少雨傾向で推移し、台風の接近や風雨が少なかった。
紫斑病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：多	・収穫物調査で、前年より発生量が多く、発生ほ場率も高かった。	・9月下旬～11月上旬の降水量が前年より多く、感染に好適な条件であった。
フタスジヒメハムシ	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：多 前年：多	・8月5半旬に発生が認められ、平年より多かった。	・8～10月の気温は平年より高く推移し、8月6半旬、9月5半旬を除いて少雨傾向で推移した。増殖に好適な条件であった。
アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	・8月2半旬に発生が認められ、平年並であった。	・カメムシ類対象薬剤による同時防除。

イ 果樹

(ア) かんきつ (2024年3～10月)

a 黒点病

(a) 発生推移 (発生量：並)

- ・6～8月の発病果率は平年よりやや少なく推移したが、以降は平年並の発生となった。

(b) 原因の解析

- ・昨年度も発生量は少なく、樹体等の菌密度も低かったが、多雨や日焼けの影響で夏季以降発生が見られた。

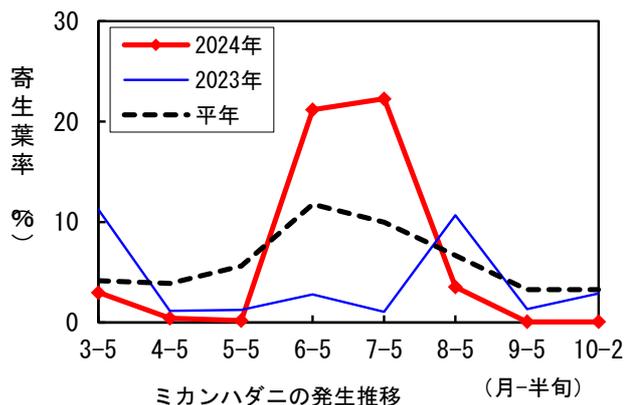
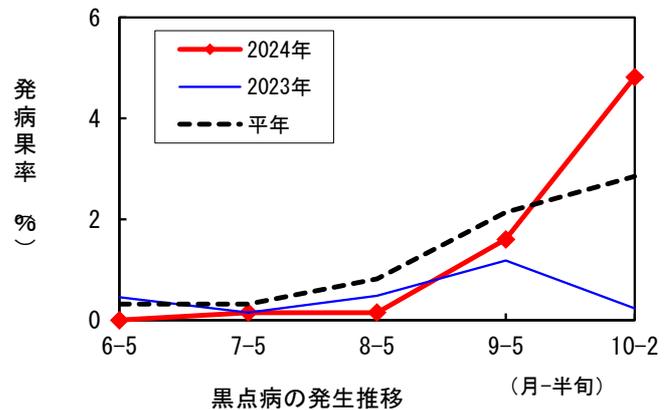
(c) 防除指導

- ・定期予報により発生状況を周知し、適期防除を指導。

b ミカンハダニ

(a) 発生推移 (発生量：並)

- ・6～7月の発生は多かったものの、以降はやや少ない発生となった。達観で被害葉はやや多かった。



(b) 原因の解析

- ・暖冬のため越冬虫数が多かったと考えられる。
- ・5～8月の少雨傾向により、夏季の発生は多かったが、以降は防除や多雨の影響で平年並～やや少なくて推移した。

(c) 防除指導

- ・定期予報により発生状況を周知し、適期防除を指導。
- ・薬剤感受性低下を避けるため、マシン油の活用や薬剤のローテーション散布を指導。

c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生推移の概要	発生要因の解析
そうか病	平年：並 前年：やや早	平年：並 前年：並	・葉や果実での発生は一部ほ場で認められた。発生量は平年並であった。	・適期に防除が実施された。
かいよう病	平年：並 前年：やや早	平年：やや少 前年：並	・葉、果実ともに発生量は平年より少なかった。	・適期に防除が実施された。 ・5～8月は少雨傾向であった
アブラムシ類	平年：並 前年：早	平年：やや少 前年：並	・発生ほ場率・寄生葉率は少なくて推移した。	・適期に防除が実施された。

(イ) なし (2024年4～8月)

a 黒星病

(a) 発生推移 (発生量：やや少)

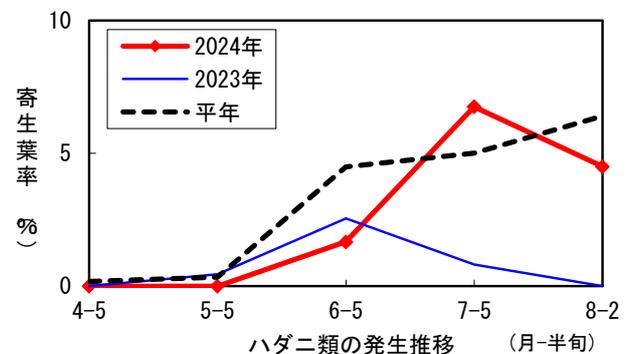
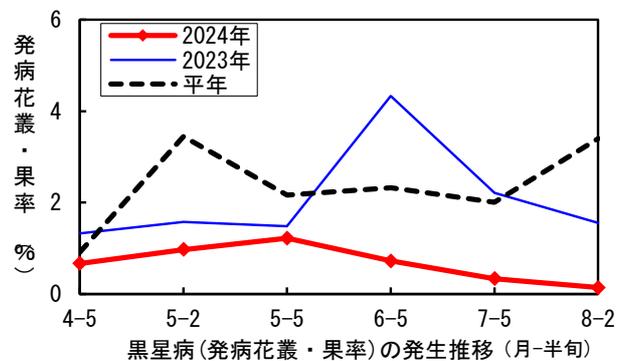
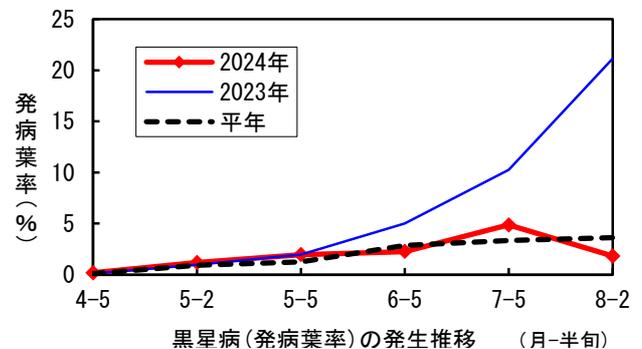
- ・葉での発生は、収穫終了まで平年並であった。
- ・果実での発生は4月下旬から一部ほ場で認められ、5月以降は平年よりやや少なくて推移した。

(b) 原因の解析

- ・5～8月の少雨傾向や、本年5～7月に多発した果樹カメムシの対策として、摘果作業の徹底、最終的な摘果時期を遅らせる等の対応により、本病の罹病果が除かれた事等が考えられる。

(c) 防除指導

- ・適期防除、罹病葉や罹病果の除去、感受性低下を避けるための薬剤のローテーション散布、DMI剤等の使用回数制限などについて、定期予報で指導。



b ハダニ類

(a) 発生推移 (発生量：並)

- ・寄生葉率は平年並であった。

(b) 原因の解析

- ・前年の防除が徹底されたため、越冬虫数が少なかった。
- ・1～4月は多雨傾向であった。
- ・防除が徹底された。

(c) 防除指導

- ・定期予報により発生状況を周知し、適期防除を指導。
- ・薬剤感受性低下を避けるため、薬剤のローテーション散布について指導。

c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生推移の概要	発生要因の解析
赤星病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：並	・発生量は平年より少なく前年並であった。発生ほ場率は平年よりやや低く推移した。	・適期に防除が実施された。 ・各産地のビャクシンの赤星病寄生率は年々低下していると考えられる。
黒斑病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・発生は軽微であった。	・県の主力品種である「幸水」、「豊水」が抵抗性であるため。
ナシヒメシンクイ	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：多	・フェロモントラップによる誘殺数は概ね平年よりやや多かった。	・一部ほ場で適期防除ができなかった。
カメムシ類	平年：やや早 前年：やや早	平年：やや多 前年：多	・予察灯捕殺数は4月以降増加し、果実への被害が局地的に発生した。	・昨年秋季の発生量が多く、暖冬であった為、越冬世代成虫が多かった。
アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや多	・発生は平年並の4月上旬から認められ、以降概ね平年並に推移した。	・防除適期に他の害虫と同時に防除されたと考えられる。
モモシンクイガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・フェロモントラップによる誘殺数はやや多かった。	・一部ほ場で適期防除ができなかった。
ハマキムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・被害は平年同様に軽微であった。	・他の害虫と同時に防除されたと考えられる。

(ウ) かき (2024年4～10月)

a 炭疽病

(a) 発生推移 (発生量：並)

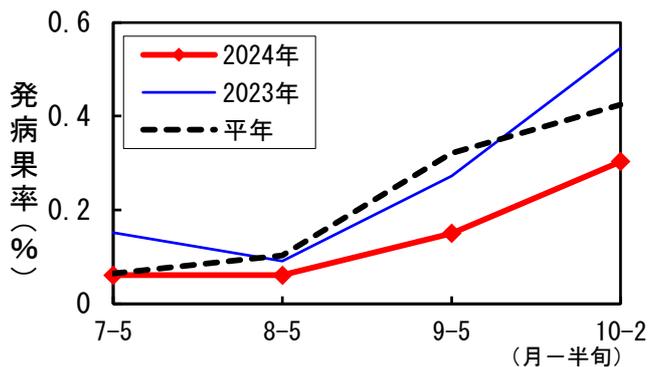
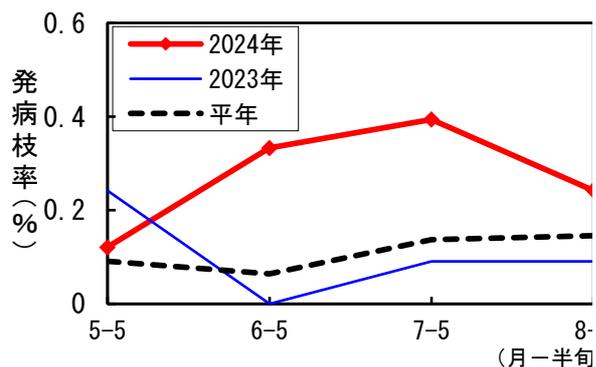
- ・枝では平年よりやや多く、果実では平年並で推移した。

(b) 原因の解析

- ・春先に雨量が多く高温であったことから初発が早かったが、5～8月の少雨傾向や防除により果実への感染拡大が抑えられたと考えられる。
- ・今年度は多発した日焼け果と併発した罹病果が散見された。

(c) 防除指導

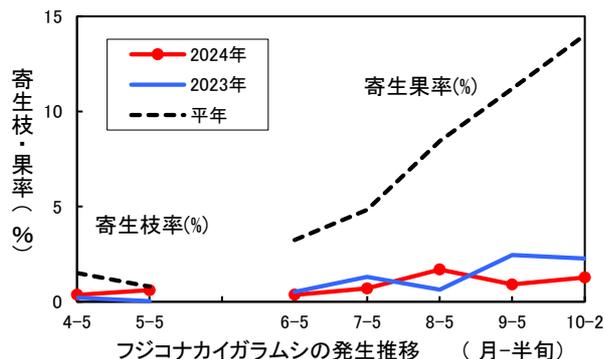
- ・定期予報により、罹病枝及び罹病果の除去と処分、定期防除の徹底等を指導。



b フジコナカイガラムシ

(a) 発生推移 (発生量：やや少)

- ・発生枝率は、4月5半旬から認められ、以降平年並で推移した。
- ・寄生果率は6月下旬～10月下旬まで平年より低く推移した。



(b)原因の解析

- ・前年の寄生果率が低かったため、寄生枝率（越冬世代）は平年より低く推移した。

(c) 防除指導

- ・定期予報により、散布ムラのない丁寧な散布、天敵に配慮した薬剤の選択等を指導。

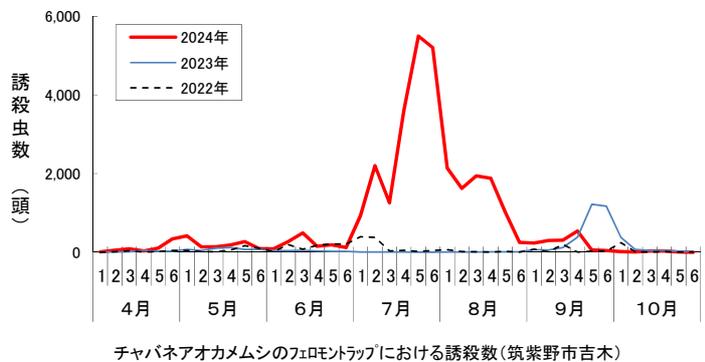
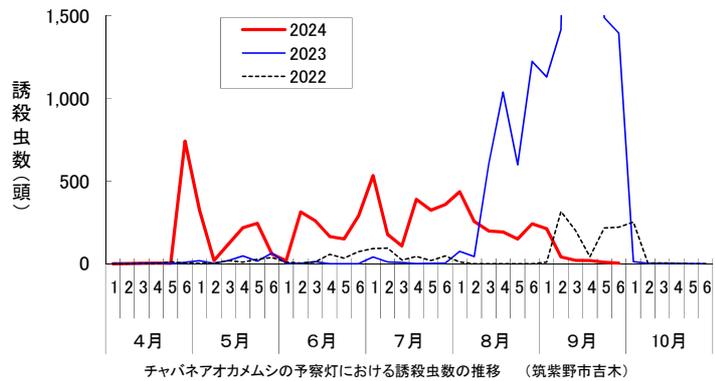
c その他の病害虫

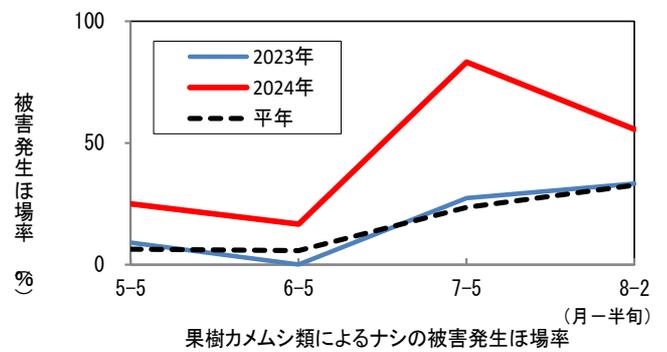
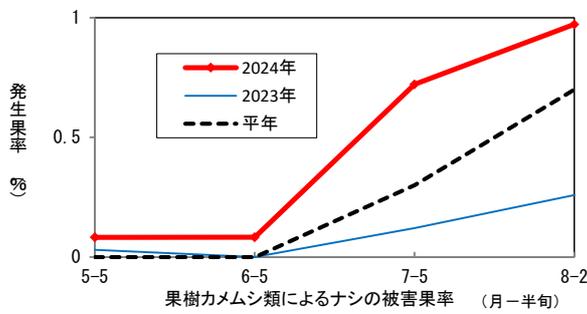
病害虫名	発生時期	発生量	発生推移の概要	発生要因の解析
カキノヘタムシガ	平年：並 前年：やや早	平年：並 前年：やや少	・発生は7月5半旬から認められ、以降発生量は平年並であった。	・適期に防除が実施された。
カメムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・下述の果樹カメムシ類の項を参照	・下述の果樹カメムシ類の項を参照。
ハマキムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	・フェロモントラップ誘殺は、平年並の4月上旬から認められた ・果実での被害は6月下旬から認められ、被害量は平年並で推移した。	・適期に防除が実施された。
アザミウマ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・発生は平年同様軽微であった。	・他の害虫と同時に防除されたと考えられる。

(エ) 果樹カメムシ類 2024年4～10月（主として、チャバネアオカメムシ）

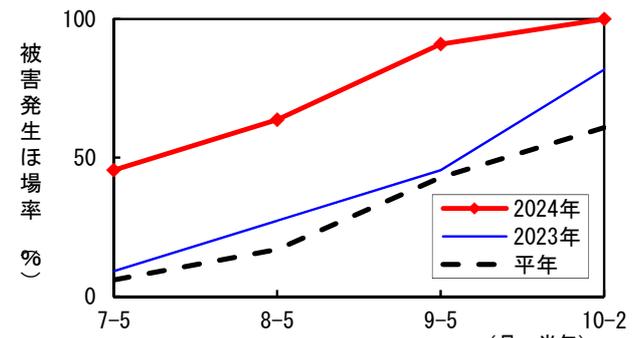
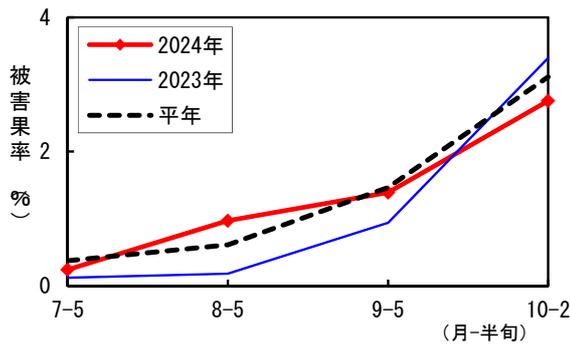
(a) 発生推移（発生量：4～7月 - 平年・前年より多 8～10月 - 平年並）

- ・トラップ（予察灯、フェロモン）による誘殺虫は平年より早くから確認され、前期（4月～8月3半旬）の誘殺数は前年より多かった。
- ・予察灯では後期（8月4半旬～10月）の誘殺が減り、その後も前年より少なく推移した。
- ・フェロモントラップでは7月下旬に誘殺のピークとなり、以降は減少傾向であった。
- ・予察灯や果樹園への飛来は早くから確認されたが、園地間差が大きく、飛来量と加害程度は必ずしも一致しなかった。また加害は偶発的、局所的になる傾向があった。
- ・ナシの被害果率は収穫直前でも1%ほどで、平年よりやや高い程度であった。被害発生ほ場率は平年よりもやや高かった。





- ・カキの被害果率はほぼ平年並に推移したが、ほ場によっては局地的に多発したほ場があった。被害果の発生ほ場率は7月から高く推移し、10月にはすべての調査ほ場で被害果が確認された



カメムシ類被害果の発生推移「富有」

カメムシ類被害果発生ほ場率の推移「富有」

(b) 原因の解析

- ・越冬量は前年よりやや多く、暖冬で春からの動きが早かった。
- ・ヒノキ球果の着生量は少なかった。口針鞘数は7月5半旬の調査開始から少なく推移し、調査の最後（9月2半旬）までヒノキからの離脱目安である25本/果に達しなかった。
- ・ビーティングで確認された成幼虫数は少なかった。球果の採取時に気温を測定した結果、多くの場所で30℃を超えており、中には35℃以上の場所もあった。このことから、成虫が高温を避けたためにビーティングで確認できなかった可能性がある。
- ・近年、盛夏期には果樹カメムシ類の活動が鈍るとされる30度以上の気温が常態化しており、カメムシ類の生態とその予察手法に乖離が発生している恐れがある。

(c) 防除指導

- ・5月1日付の注意報発出等、発生予察情報を適宜発表し、これらに基づく適期防除について呼びかけるとともに、カメムシ誘殺消長の推移をホームページで随時掲載した。

(オ) キウイフルーツ(2024年3～6月)

a キウイフルーツかいよう病

(a) 発生推移

- ・過去に発生して切り戻し措置を行っていたほ場では、一部再発が確認された。昨年度より多くの樹で樹液の流出が見られ、園内での感染拡大が見られるほ場もあった。

(b) 原因の解析

- ・2023年から2024年にかけて暖冬傾向であったが、氷点下の低温となった後、一週間以内に4～5月並みの最高気温となる気象条件が複数回あった。このため樹体が傷み、春先の樹液の漏出が増えた園が多くなったと考えられる。

(c) 防除指導

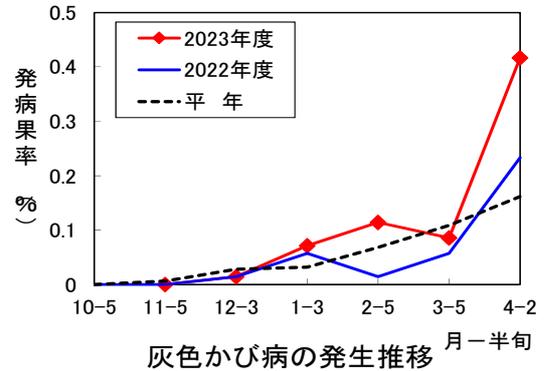
- ・技術情報により、発芽前からの銅剤による予防散布、園内巡回による罹病部位の切除、健全な花粉の利用、せん定鋏等による人為的感染の防止等について指導した。
- ・新規に発生した園を特定するために、PCRによる検定を実施した。
- ・県域会議において上記の検定結果等の状況を示し、注意喚起した。

ウ 野菜

(ア) 冬春イチゴ (令和5(2023)年6月～令和6(2024)年4月)

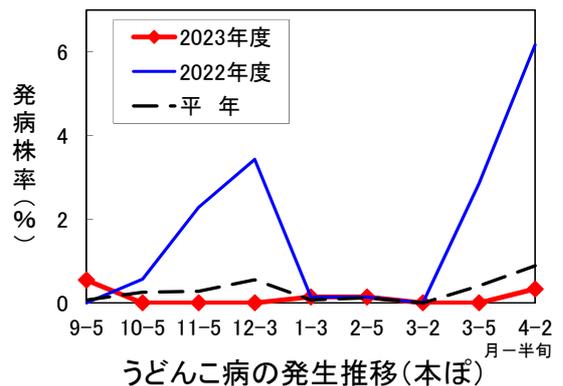
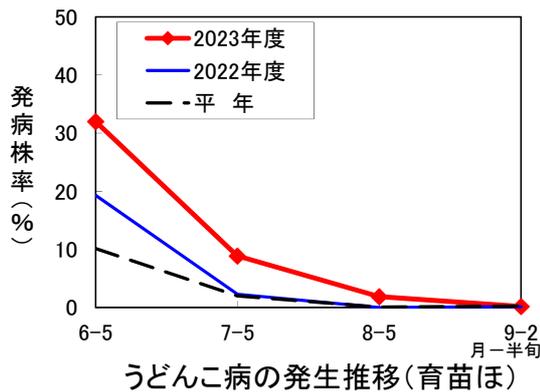
a 灰色かび病

- (a) 発生経過 (発生量: 平年よりやや多)
- ・発生は12月から認められた。3月まで平年並で推移したが、4月に一部ほ場で多発した。
- (b) 原因解析
- ・防除の実施。
 - ・防除や管理作業の不徹底。
 - ・3～4月の高温傾向。
- (c) 防除指導
- ・11月以降の発生予測で、発病果の除去、換気等について指導した。



b うどんこ病

- (a) 発生経過 (発生量: 育苗ほ…平年よりやや多、本ほ…平年よりやや少)
- 【育苗ほ】
- ・6月に多発が認められ、その後は平年より発生が多く推移した。
- 【本ほ】
- ・9月に一部ほ場で発生が認められたが、その後は平年より少なく推移した。
- (b) 原因解析
- 【育苗ほ】
- ・防除の不徹底。
 - ・暖冬による育苗初期の菌密度の増加。
- 【本ほ】
- ・7～9月の高温による菌密度の低下。
- (c) 防除指導
- ・7月以降の発生予測で、発病葉の除去、異なる系統の薬剤によるローテーション散布等について指導した。



c 炭疽病

- (a) 発生経過 (発生量: 育苗ほ…平年よりやや多、本ほ…平年よりやや多)
- 【育苗ほ】
- ・6月に平年より多く発生が認められた。7月以降は平年並に推移した。
- 【本ほ】
- ・本ほでは9月から発生が認められた。一部ほ場で12月に多発したが、4月まで平年並に推移した。

(b) 原因解析

【育苗ほ】

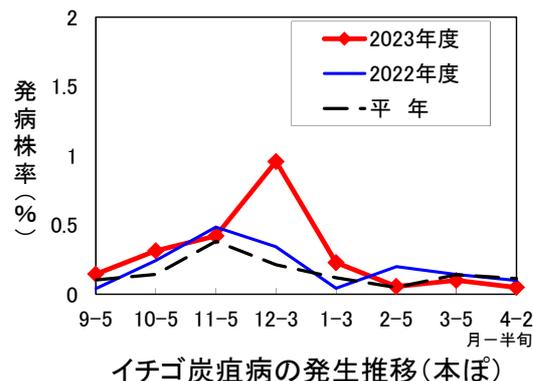
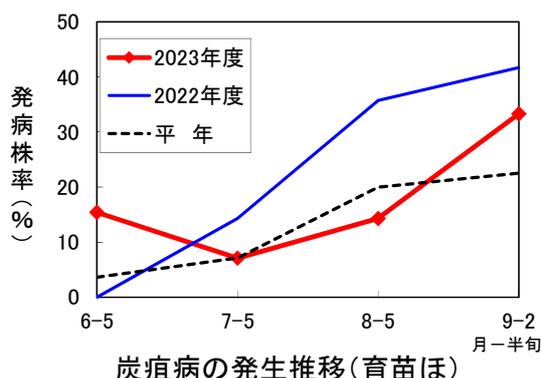
- ・ 6～9月の高温及び5月上旬、6月下旬、7月上旬の多雨。

【本ほ】

- ・ 苗からの持ち込み。

(c) 防除指導

- ・ 7～11月の発生予測で、発病株や周辺株の抜き取りや密植を避ける等の指導を行った。
- ・ 技術情報第8号(令和6年1月5日発出)にて、親株の炭疽病潜在感染状況の周知および防除を徹底するよう注意喚起した。



d ハダニ類

(a) 発生経過 (発生量：育苗ほ…平年並、本ほ…平年並)

【育苗ほ】

- ・ 6月に発生が認められ、8月まで平年並で推移したが、ほ場間差が大きく、一部のほ場で多発したものの、9月に減少した。

【本ほ】

- ・ 9月から発生が認められ、一部のほ場で多発した。1月に寄生株率が増加したが、その後は低下し、昨年並に推移した。

(b) 原因解析

【育苗ほ】

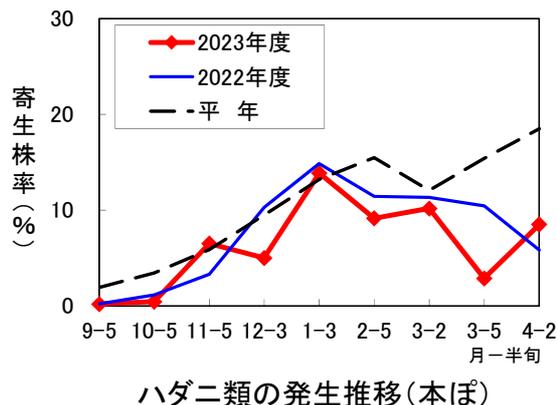
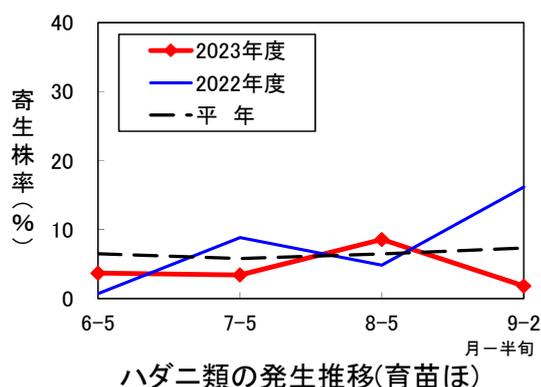
- ・ 初期防除の遅れによる、一部のほ場の多発。

【本ほ】

- ・ 苗からの持ち込みによる発生。
- ・ 初期防除の遅れによる、一部のほ場の多発。
- ・ 天敵利用及び薬剤防除の徹底によるハダニ類密度の低減。

(c) 防除指導

- ・ 7月以降の定期予測で、除草や発生初期の防除、天敵の利用等について指導した。
- ・ 多発ほ場が認められたことから、発生予測第11号(令和6年1月23日発出)にて防除を徹底するよう別途注意喚起した。



e その他の病害虫

	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
育苗ほ	萎黄病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・健全な親株からの採苗。 ・防除の徹底。
	アブラムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	・一部ほ場で8月に多発が認められたものの、平年より少発傾向で推移した。	・防除の徹底。
	オオタバコガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・防除の徹底。
	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：並	・一部ほ場で8月に発生が認められ、平年並の発生で推移した。	・防除の徹底。
	シロイチモジヨトウ	平年：並 前年：－	平年：並 前年：－	・一部ほ場で9月に発生が認められた（前年発生無し）。	・期間を通じた高温傾向。
	チョウ目被害	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	・6月に発生が認められ、9月まで被害が増加した。被害株率は地域間差が大きかった。	・期間を通じた高温傾向。
	コナジラミ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：並	・一部ほ場で7月に多発が認められたものの、その後、発生量は減少した。	・期間を通じた高温傾向。 ・防除の徹底。
本ほ	萎黄病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・防除の徹底。
	菌核病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・本年発生は認められなかった。	・防除の徹底。
	アブラムシ類	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：並 前年：並	・9月に発生が認められた。1月に発生が多くなったが、全体としては平年並で推移した。	・防除の不徹底。 ・12月以降の高温傾向。
	アザミウマ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・11月に発生が認められた。全体として平年より少なく推移していたが、3月5半旬に多発ほ場がみられた。発生は、ほ場間差が大きかった。	・防除の不徹底。 ・12月以降の暖冬傾向。
	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：多 前年：やや少	・9月に多発ほ場がみられた。10月も多発がみられたが、地域間差が大きかった。	・7月以降の高温、少雨。 ・防除の不徹底。 ・薬剤感受性低下。
	オオタバコガ	平年：やや遅 前年：やや遅	平年：並 前年：並	・一部ほ場で11月のみ発生が認められた。	・防除の徹底。
	シロイチモジヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・一部ほ場で11月のみ発生が認められた（調査開始時から前年まで発生なし）。	・防除の徹底。
	チョウ目害虫被害	平年：並 前年：並	平年：多 前年：多	・9月に発生が認められ、平年より多く推移した。	・7月以降の高温、少雨。 ・防除の不徹底。 ・薬剤感受性低下。
コナジラミ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	・9月に発生が認められた。10月に多発ほ場がみられたが、11月以降は平年並で推移した。発生は一部ほ場にとどまっていた。	・防除の不徹底。 ・期間を通じての高温傾向。	

(イ) 冬春トマト¹⁾ (令和5(2023)年10月～令和6(2024)年4月)

注1) 令和4年からの調査で平年値が無いため、前年比を記載。

a すずかび病

(a) 発生経過 (発生量: 前年並)

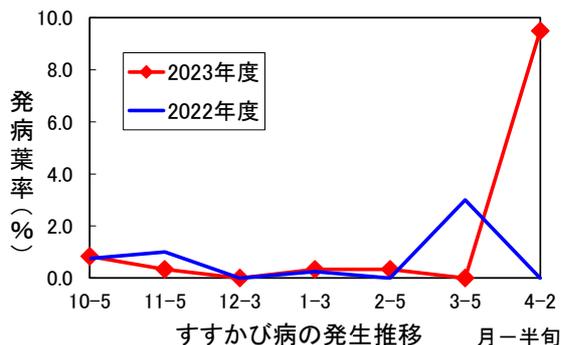
- ・発生は10月に認められた。期間を通して概ね前年並で推移したが、4月に一部ほ場で多発した。

(b) 原因解析

- ・防除の実施。
- ・多発ほ場における防除の不徹底。
- ・2～4月の高温、多雨傾向。

(c) 防除指導

- ・12月以降の発生予報で、発病果及び発病葉の除去や換気等について指導した。



b コナジラミ類

(a) 発生経過 (発生量: 前年並)

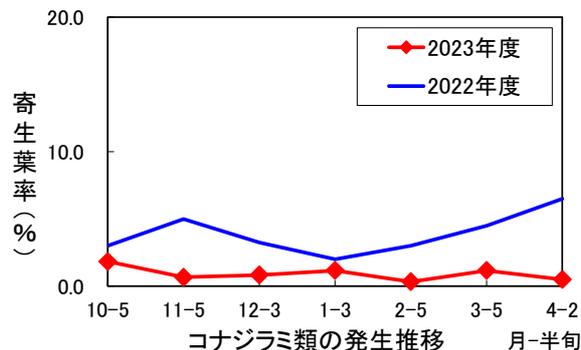
- ・発生は10月に認められたが、期間を通して前年より少発生で推移した。

(b) 原因解析

- ・前年多発したほ場における防除の徹底。

(c) 防除指導

- ・11月以降の発生予報で、ほ場周辺の雑草防除の徹底や防虫ネットの目合い等について指導した。



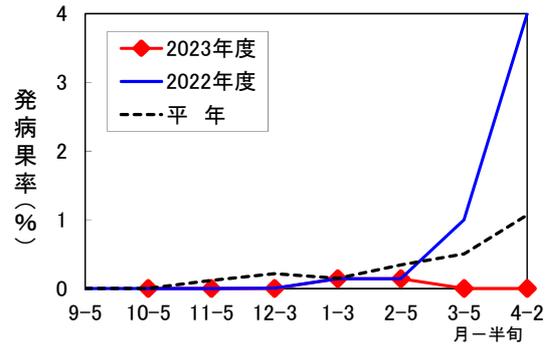
c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
疫病	前年：－	前年：－	・期間を通して発生は認められなかった。	・防除の徹底。
灰色かび病	前年：並	前年：並	・2月に発生が認められた。期間を通して概ね前年並で推移したが、2月以降、一部ほ場で多発した。	・防除の不徹底。 ・2～4月の高温・多雨傾向。
葉かび病	前年：－	前年：－	・期間を通して発生は認められなかった。	・防除の徹底。 ・耐病性品種の普及。
黄化葉巻病	前年：－	前年：－	・1月以降、一部ほ場で発生が認められた (前年発生なし)。	・発生ほ場における防除の不徹底。
アブラムシ類	前年：－	前年：－	・期間を通して発生は認められなかった。	・防除の徹底。
ハモグリバエ類	前年：－	前年：－	・期間を通して発生は認められなかった。	・防除の徹底。

(ウ) 冬春ナス (令和 5 (2023)年 9月～令和 6 (2024)年 4月)

a 灰色かび病

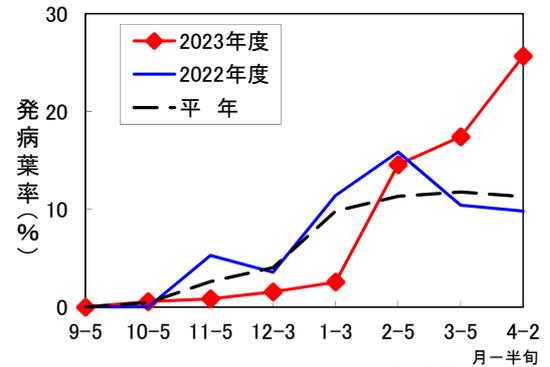
- (a) 発生経過 (発生量: 平年よりやや少)
- 1、2月に発生が認められたが、発生率は平年並であった。
- (b) 原因解析
- 発病葉、発病果の摘除及び適期防除により、発生が抑制された。
- (c) 防除指導
- 定期予報で、ハウスの換気、薬剤散布等について指導した。



灰色かび病の発生推移

b すすかび病

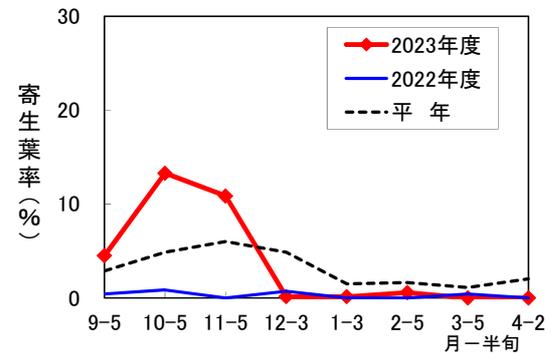
- (a) 発生経過 (発生量: 平年よりやや多)
- 10月から発生が認められたが、1月まで平年よりやや少なく推移した。2月以降増加し、多発ほ場が多くなった。
- (b) 原因解析
- 着果負担による樹勢低下。
 - 初期防除の不徹底。
- (c) 防除指導
- 定期予報で、適正な肥培管理、初期防除の徹底について指導した。



すすかび病の発生推移

c ミナミキイロアザミウマ

- (a) 発生経過 (発生量: 平年よりやや多)
- 9～11月にかけて一部ほ場で多発した。12月以降の発生は少なかった。
- (b) 原因解析
- 初期防除の不徹底及び天敵のタバコカスミカメの増殖が遅れ、コナジラミに対する密度が不足したため、多発を招いた。
- (c) 防除指導
- 定期予報で、薬剤防除、天敵利用時の注意点について指導した。



ミナミキイロアザミウマの発生推移

d その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
うどんこ病	平年: 並 前年: 並	平年: やや少 前年: 少	11月から発生が認められたが、多発しなかった。	防除の不徹底。
ハダニ類	平年: 並 前年: 並	平年: 並 前年: 並	10～12月に一部ほ場で発生したが、多発しなかった。	防除の不徹底。
アブラムシ類	平年: 並 前年: 遅	平年: 並 前年: 並	11月、4月に一部ほ場で発生したが、多発しなかった。	防除の不徹底。
ハモグリバエ類	平年: 早 前年: 早	平年: やや多 前年: やや多	9月～12月に発生し、平年よりやや多く推移した。	防除の不徹底。
コナジラミ類	平年: 並 前年: 並	平年: やや多 前年: やや多	期間を通じ発生がみられ、平年よりやや多く推移した。	9～11月の高温。 侵入防止の不徹底。

(エ) 冬キャベツ（令和6（2024）年10月～令和7（2025）年2月）

a 菌核病

(a) 発生経過（発生量：平年並）

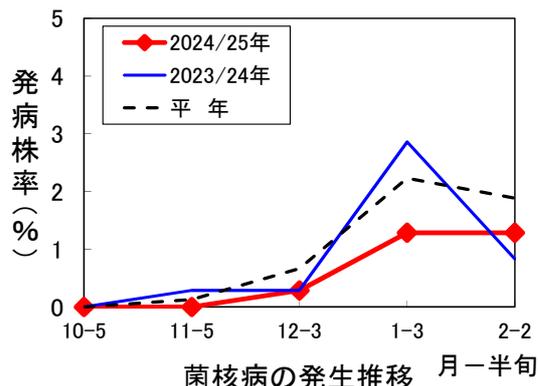
- ・11月に発生が認められ、平年並に推移した。

(b) 原因解析

- ・冬季の低温傾向、防除の徹底により多発とはならなかった。

(c) 防除指導

- ・11月以降の定期予報で、予防散布の実施や発病株の除去等について指導した。



b コナガ

(a) 発生経過（発生量：平年より少）

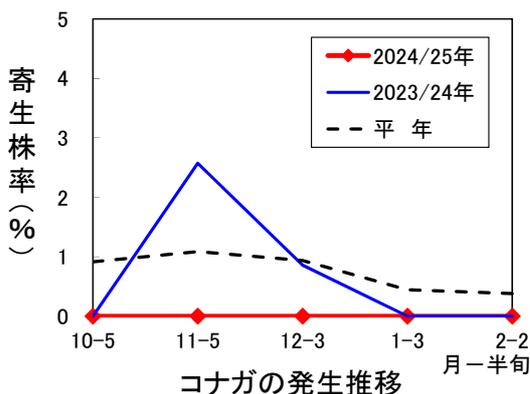
- ・期間を通じ、発生が認められなかった。

(b) 原因解析

- ・多発したハスモンヨトウ、オオタバコガとは対照的に、夏季の異常高温がコナガ発生の抑制要因になったことが考えられる。

(c) 防除指導

- ・11月以降の定期予報で、初期防除の徹底や薬剤ローテーション散布等について指導した。



c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
黒腐病	平年：並 前年：早	平年：少 前年：多	・一部ほ場で12月以降発生が見られた。	・11月の多雨。 ・感受性品種の罹病。
軟腐病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・12月以降の低温傾向 ・防除の徹底。
べと病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	・発生は認められなかった。	・防除の徹底。
アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：並	・10～11月に発生が認められたが、12月以降発生が減少した。	・12月以降の低温傾向。 ・防除の徹底。
モンシロチョウ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・10月に一部ほ場で発生が認められたが、その後減少した。	・12月以降の低温傾向。 ・防除の徹底。
ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：多 前年：やや多	・10月に多くのほ場で発生が認められ、多発した。12月以降発生量が減少した。	・8～10月の高温、乾燥。 ・薬剤の感受性低下。 ・防除の不徹底。
オオタバコガ	平年：並 前年：並	平年：多 前年：多	・10月に発生が認められ、12月まで被害が多発した。	・8～10月の高温、乾燥。 ・防除の不徹底。
シロイチモジヨトウ	平年：並 前年：早	平年：やや多 前年：やや多	・10月に一部ほ場で発生が認められた。	・防除の不徹底。
ウワバ類	平年：早 前年：－	平年：並 前年：－	・10月に一部ほ場で発生が認められた。（前年発生無し）	・防除の不徹底。

(オ) 冬レタス¹⁾ (令和6(2024)年10月～令和7(2025)年2月)

注1) 令和2年まで玉レタス、令和2年以降リーフレタスを調査。平年値は両方を含む過去10年間の平均に基づく。

a 灰色かび病

(a) 発生経過 (発生量: 平年並)

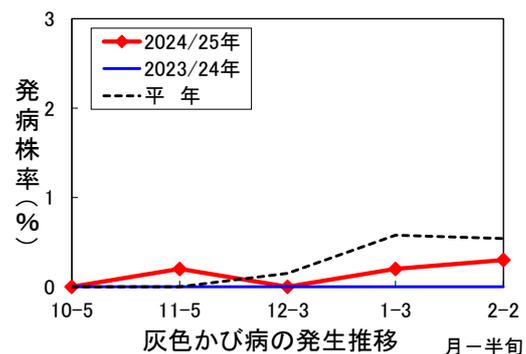
- ・発生は11月に認められた。期間を通して一部ほ場で発生が認められたが、発生量は平年よりやや少なかった。

(b) 原因解析

- ・11月の高温、多雨傾向。

(c) 防除指導

- ・1月以降の定期予報で、発病株の除去やトンネル被覆後の栽培管理における注意点等について指導した。



b 菌核病

(a) 発生経過 (発生量: 平年よりやや少)

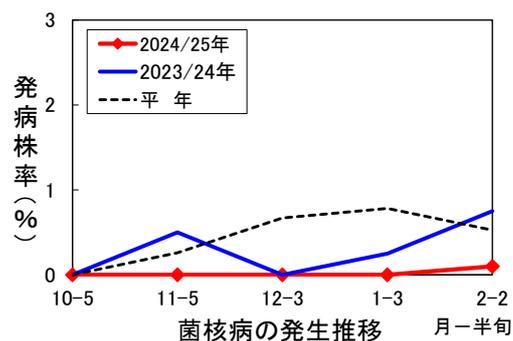
- ・2月に一部ほ場で発生が認められたが、期間を通して平年よりやや少ない発生量であった。

(b) 原因解析

- ・発生ほ場における防除の不徹底。

(c) 防除指導

- ・12月以降の定期予報で、予防散布の実施や発病株の除去等について指導した。



c その他の病虫害

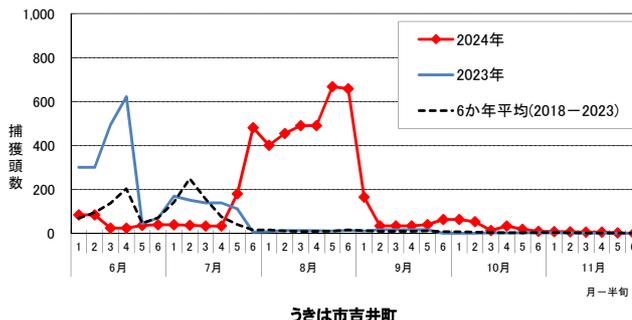
病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
アブラムシ類	平年: 並 前年: -	平年: やや多 前年: -	・10～11月にかけて、一部ほ場で発生が認められたが、12月は調査地点で発生は認められなかった(前年発生なし)。	・10～11月の高温傾向。 ・防除の徹底。
ハスモンヨトウ	平年: 並 前年: 並	平年: やや多 前年: やや多	・10～11月にかけて、一部ほ場で発生が認められたが、12月は調査地点で発生は認められなかった。	・10～11月の高温傾向。 ・防除の徹底。
オオタバコガ	平年: - 前年: -	平年: - 前年: -	・発生は認められなかった。	・防除の徹底。
シロイチモジヨトウ	平年: やや早 前年: -	平年: 並 前年: -	・一部ほ場で10月のみ発生が認められた(前年発生なし)。	・10月の高温傾向。 ・防除の徹底。

(カ) 野菜共通 (令和6(2024)年4月～11月)

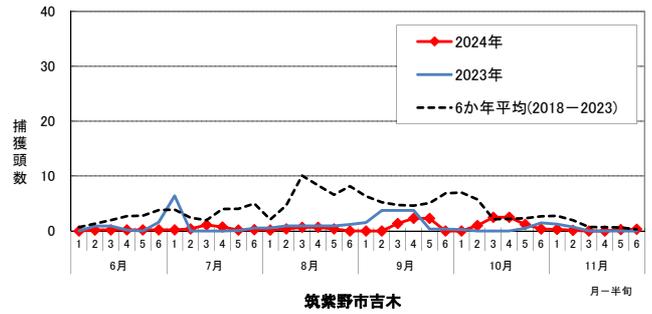
a コナジラミ類

(a) 発生経過

- ・冬春ナスでの発生量は、平年よりやや多かった。
- ・冬春トマトでの発生量は、昨年より多かった。
- ・うきは市のトマトほ場トラップで捕獲頭数は7月下旬～8月に多くなり、8月下旬にピークがみられ、平年より多かった。



- ・筑後市のトラップでは6月下旬～8月1半旬及び9月下旬～10月上旬に捕獲頭数が多くなったが、前年より少なかった。
- ・筑紫野市のトラップでは7月上旬及び9月中旬に捕獲があったが、前年並であった。



黄色粘着板トラップにおけるコナジラミ類捕獲頭数の推移

(b) 原因解析

- ・7月におけるうきは市、筑後市での捕獲頭数の増加は、防除が徹底できていなかったトマトハウスから飛び込みにより発生したものと考えられる。

(c) 防除指導

- ・定期予察情報にてトラップでの捕殺頭数及び冬春トマトでの発生量を基に、注意喚起を行った。
- ・アスパラガスにおけるコナジラミ類の農薬による防除が不十分となっている事例があることから、薬剤感受性試験を実施し、結果を指導機関に提供した。

b その他の病害虫 (令和6(2024)年春～秋)

病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析
ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：多 前年：多	<ul style="list-style-type: none"> ・フェロモントラップでの誘殺ピークは、地区によって異なるが9月中旬及び11月上旬であった。 ・野菜類では9月以降、被害が多く見られた。 	・8～10月の高温乾燥傾向。
オオタバコガ	平年：並 前年：並	平年：多 前年：多	<ul style="list-style-type: none"> ・フェロモントラップでの誘殺ピークは、地区によって異なるが9月下旬～10月中旬であった。また、一部地点では11月上旬にもピークがあった。 ・冬キャベツでは10～12月の発生量が平年より多かった。 	・8～10月の高温乾燥傾向。

エ 特用作物

(ア) 茶 (2024年4～9月)

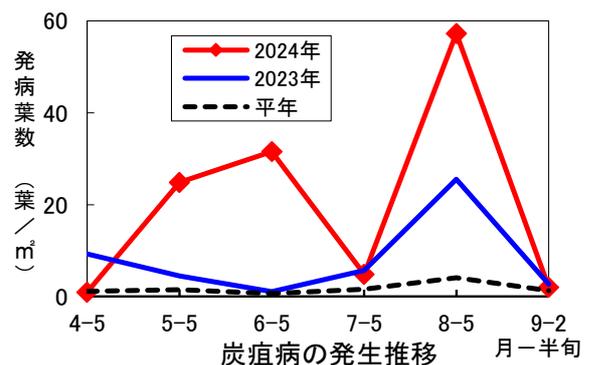
a 炭疽病

(a) 発生推移 (発生量：多)

- ・発生は、5月5半旬から認められ、8月5半旬の調査では特に高い発病葉率が確認された。

(b) 原因の解析

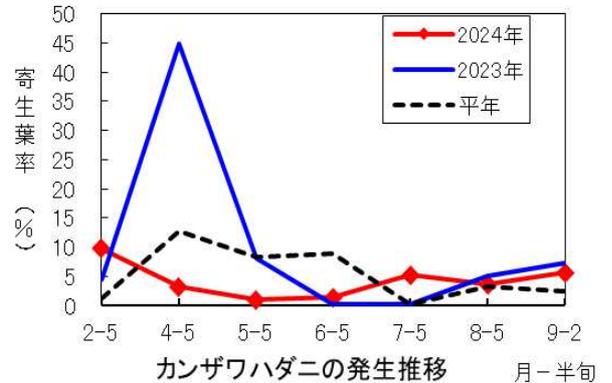
- ・昨年度から樹体に病原が残った園地があった。



- ・ 1 番茶収穫後時期の高温多雨傾向により、発病が促されたことや、2 番茶収穫期のため防除が行えず、感染が拡大した可能性がある。
- ・ 発病葉率に比して、生産物の減収・品質低下は軽微であった。

(c) 防除指導

- ・ 技術情報及び定期予報により、罹病枝及び罹病果の除去、適正な肥培管理、予防に重点をおいた定期防除の徹底について指導した。



b カンザワハダニ

(a) 発生推移 (発生時期：やや早、発生量：並)

- ・ 越冬虫数は多かった。4 月 5 半月以降は防除が徹底され平年並の発生程度で推移した。一部の園では夏季も発生がやや多かった。

(b) 原因の解析

- ・ 昨年度末の高密度の寄生、及び暖冬により越冬量が多くなり、その後増殖した。
- ・ 4 月以降の防除及び夏季の枝の更新により、ハダニの寄生が抑制された。

(c) 防除指導

- ・ 定期予報により発生状況を周知し、適期防除やローテーション散布について指導した。

c その他の病害虫

病害虫名	発生時期	発生量	発生推移の概要	発生要因の解析
もち病	平年：－ 前年：－ (前年発生なし)	平年：少 前年：並	・ 調査期間には発生は認められなかった。	・ ほ場菌密度が低かった ・ 適期防除。
チャノコカクモンハマキ	平年：やや遅 前年：遅	平年：やや多 前年：やや多	・ フェロモントラップにおける誘殺ピークは、平年並で前年より遅かった。 ・ 巻葉数は、7 月 5 半月以降は多傾向であった。	・ 春季から夏季にかけての高温傾向。 ※フェロモントラップの設置場所が 2024 年度から変更のため、誘殺数は参考値。
チャノホソガ	平年：並 前年：やや早	平年：並 前年：やや少	・ 発生時期・被害程度について、概ね平年並であった。	・ 適期に防除が実施された。
チャノミドリヒメヨコバイ	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：並	・ 5 月～6 月は平年よりやや多い発生で、以降はやや少なく推移した。	・ 適期に防除が実施された。
チャノキイロアザミウマ	平年：やや遅 前年：並	平年：並 前年：やや少	・ 初発時期は 5 月で、以降概ね平年並発生となった。	・ 適期に防除が実施された。
チャハマキ	(平年：やや遅) (前年：並)	(平年：やや少) (前年：並)	・ フェロモントラップにおける誘殺ピークは、4 月 6 半月であった。	※フェロモントラップの設置場所が 2024 年度から変更のため、誘殺数は参考値。
チャトゲコナジラム	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	・ 発生時期・被害程度について、概ね平年並であった。	・ 適期防除。

(2) 主要病害虫の発生面積及び防除面積（令和6年度）

作物名	作付面積 (ha)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
			甚	多	中	少	計	実防除	延防除
普通期 水稲	32,600	苗立枯病	0	0	0	0	0	26,080	26,080
		葉いもち	0	0	710	22,100	22,810	32,600	32,600
		穂いもち	0	0	710	7,840	8,550	32,600	32,600
		紋枯病	0	0	1,430	19,250	20,680	32,600	32,600
		白葉枯病	0	0	0	0	0	29,340	29,340
		ばか苗病	0	0	0	0	0	22,820	22,820
		イネシガラセンチュウ	0	0	0	0	0	29,340	29,340
		もみ枯細菌病	0	0	0	7,130	7,130	32,600	32,600
		ごま葉枯病	0	0	0	0	0	32,600	32,600
		稲こうじ病	0	0	0	2,140	2,140	32,600	32,600
		ニカメイガ	0	0	0	710	710	32,600	32,600
		セジロウンカ	0	0	0	29,230	29,230	32,600	81,500
		トビイロウンカ	0	0	0	14,260	14,260	32,600	81,500
		ヒメトビウンカ	0	0	1,430	30,660	32,090	32,600	81,500
		ツマグロヨコバイ	0	710	2,140	24,960	27,810	32,600	81,500
		イネドロオイムシ	0	0	0	0	0	29,340	29,340
		イネクロカメムシ	0	0	0	710	710	32,600	48,900
		斑点米カメムシ類	0	0	5,700	12,830	18,530	32,600	48,900
		フタオビコヤガ	0	0	0	0	0	29,340	29,340
		コブノメイガ	4,990	12,830	9,270	2,850	29,940	32,600	32,600
イネミズブウムシ	0	0	0	0	0	29,340	29,340		
スクミリンゴガイ	4,990	2,140	2,850	12,120	22,100	32,600	32,600		
麦類 (令和5年 11月～6 年6月)	22,360	さび病類	0	0	825	2,552	3,377	8,944	9,838
		うどんこ病	0	0	0	0	0	21,242	31,863
		赤かび病	0	0	0	15,530	15,530	22,360	44,720
		黒穂病類	0	0	1,352	2,101	3,453	20,124	20,124
		小麦縮萎縮病	0	0	0	0	0	0	0
		大麦縮萎縮病	0	0	0	0	0	0	0
		斑葉病	0	0	0	0	0	5,860	5,860
大豆 (令和6 年産)	8,040	さび病	0	670	0	1,340	2,010	0	0
		べと病	0	0	0	5,360	5,360	643	965
		葉焼病	0	0	0	2,010	2,010	643	965
		紫斑病	0	0	800	6,430	7,240	8,040	10,693
		アブラムシ類	0	0	0	670	670	0	0
		ハスモンヨトウ	3,350	1,340	1,340	2,010	8,040	8,040	20,100
		吸実性カメムシ類	0	0	4,690	3,350	8,040	8,040	12,060
		フタスジヒメハムシ	0	670	2,680	4,690	8,040	724	724
マメクイシンガ	0	0	0	800	800	8,040	20,100		
かんきつ	1,100	そうか病	0	0	100	200	300	1,100	1,100
		黒点病	0	100	0	200	300	1,100	5,500
		かいよう病	0	0	0	300	300	1,100	2,200
		ミカンハダニ	300	100	0	500	900	1,100	4,400
		チャノキイロアザミウマ	0	0	0	1,100	1,100	1,100	1,100
		アブラムシ類	0	0	0	200	200	1,100	2,200
なし	298	黒斑病	0	0	0	0	0	298	894
		黒星病	27	0	81	135	244	298	5,364
		赤星病	0	0	0	27	27	298	894
		ナシヒメシンクイ	0	0	0	81	81	298	1,788
		ハマキムシ類	0	0	0	0	0	298	596
		ハダニ類	27	0	0	108	135	298	1,192
		カメムシ類	0	27	0	163	190	298	2,086
		カイガラムシ類	0	0	0	0	0	298	1,788
		アブラムシ類	0	0	27	135	163	298	596
ぶどう	652	晩腐病	0	0	0	326	326	652	3,912
		褐斑病	130	0	130	261	521	652	1,304
		黒とう病	0	0	0	130	130	652	1,304
		べと病	0	0	391	261	652	652	1,304
		灰色かび病	0	0	130	130	260	652	652
		チャノキイロアザミウマ	0	0	326	326	652	652	1,304
かき	1,070	炭そ病	0	0	0	178	178	1,070	10,700
		カキノヘタムシガ	0	0	0	0	0	1,070	3,210
		フジコナカイガラムシ	89	0	178	357	624	1,070	6,420
		カメムシ類	0	89	268	624	981	1,070	7,490
		ハマキムシ類	0	0	89	713	803	1,070	3,210
カキクダアザミウマ	0	0	0	0	0	1,070	2,140		
キウイフ ルーツ	256	かいよう病	0	0	0	256	256	256	256

作物名	作付面積 (ha)	病害虫名	程度別発生面積 (ha)					防除面積 (ha)	
			甚	多	中	少	計	実防除	延防除
イチゴ (令和5 年9月～ 6年4月)	421	灰色かび病	0	0	0	271	271	421	1,263
		うどんこ病	0	0	0	90	90	421	1,684
		炭そ病	0	0	30	211	241	421	842
		萎黄病	0	0	0	0	0	421	421
		アブラムシ類	0	0	90	331	421	421	1,263
		アザミウマ類	30	0	30	211	271	421	1,684
		コナジラミ類	0	0	0	150	150	421	1,263
		ハダニ類	0	30	90	211	331	421	2,105
		オオタバコガ	0	0	30	30	60	421	842
ハスモンヨトウ	30	0	30	211	271	421	842		
シロイチモジヨトウ	0	0	30	30	60	421	842		
冬春トマ ト (令和 5年10月 ～6年4 月)	110	疫病	0	0	0	0	0	110	660
		灰色かび病	0	0	18	36	54	110	660
		葉かび病	0	0	0	0	0	110	660
		うどんこ病	0	0	27	27	54	110	660
		すすかび病	0	27	0	55	82	110	660
		黄化葉巻病	0	0	0	27	27	110	660
		アザミウマ類	0	0	0	0	0	110	220
		コナジラミ類	0	0	27	55	82	110	660
		ハモグリバエ類	0	0	0	0	0	110	330
アブラムシ類	0	0	0	0	0	110	660		
冬春ナス (令和5 年9月～ 6年4月)	103	うどんこ病	44	15	15	15	89	102	510
		灰色かび病	0	15	15	44	74	102	510
		すすかび病	14	29	15	44	103	102	510
		ミナミキイロアザミウマ	0	0	0	44	44	102	1,020
		コナジラミ類	29	0	15	58	102	102	204
		ハモグリバエ類	0	0	0	58	58	102	102
		アブラムシ類	0	0	0	29	29	102	102
		ハダニ類	0	0	0	29	29	102	102
冬キャベ ツ (令和 6年10月 ～7年2 月)	379	黒腐病	0	0	0	54	54	379	758
		菌核病	0	0	0	217	217	379	379
		軟腐病	0	0	0	0	0	379	379
		べと病	0	0	0	0	0	379	379
		アブラムシ類	0	0	0	108	108	379	948
		タマナギンウワバ	0	0	0	54	54	379	1,137
		モンシロチョウ	0	0	0	54	54	379	1,137
		コナガ	0	0	0	0	0	379	1,137
		オオタバコガ	0	0	216	54	270	379	1,516
ハスモンヨトウ	0	54	162	54	270	379	1,516		
シロイチモジヨトウ	0	0	0	162	162	379	1,516		
冬レタス (令和6 年10月～ 7年2月)	612	灰色かび病	0	0	0	306	306	612	918
		菌核病	0	0	0	102	102	612	918
		アブラムシ類	0	0	102	102	204	612	1,224
		ハスモンヨトウ	0	0	0	102	102	612	1,530
		オオタバコガ	0	0	0	0	0	612	1,224
シロイチモジヨトウ	0	0	0	102	102	612	1,530		
茶	1,430	炭そ病	1,144	0	0	286	1,430	1,430	7,150
		もち病	0	0	0	0	0	1,430	4,290
		チャノコカクモンハマキ	143	143	143	858	1,287	1,430	5,720
		チャノホソガ	0	0	0	429	429	1,430	4,290
		チャノミドリヒメヨコバイ	143	429	0	715	1,287	1,430	7,150
		カンザワハダニ	143	429	429	143	1,144	1,430	7,150
		クワシロカイガラムシ	143	429	572	143	1,287	1,430	2,860
		チャノキイロアザミウマ	0	0	0	1,287	1,287	1,430	8,580
		チャトゲコナジラミ	1,001	143	286	0	1,430	1,430	2,860

II 情報の提供実績

令和6年度侵入調査事業計画及び令和6年度指定有害動植物発生予察事業実施計画について（令和6年3月22日5消安第7065号-1）の令和6年度指定有害動植物発生予察事業実施計画2の（4）及び福岡県病害虫発生予察事業実施要領第6に基づき、防除を適期に合理的かつ経済的に行うため、気象状況及び農作物の生育状況等を勘案し、病害虫の発生状況に基づき必要な情報を関係機関等に提供した。

1 情報の種類と発表回数

（1）情報の種類

ア 発生予報：有害動植物の発生予想を定期的に発表するもの。

発表時期及び回数については、農作物、有害動植物の性質等を考慮の上、防除に有効に利用されるよう定めるものとする。

記載事項は、有害動植物名、有害動植物名の発生時期、発生面積、発生程度、発生地域及びそれらの平年比、前年比、予報の根拠の概要、防除上注意すべき事項（防除の要否、回数、防除時期、使用薬剤等）、その他必要な事項とする。

イ 警報：重要な有害動植物が大発生することが予想され、かつ、早急に防除措置を講ずる必要が認められる場合に発表するもの。

記載事項は、有害動植物名、発生の予想される地域及び時期、発生程度、防除時期及び防除法、その他必要な事項とする。

ウ 注意報：警報を発表するほどではないが、重要な有害動植物が多発生することが予想され、かつ、早めに防除措置を講ずる必要が認められる場合に発表するもの。

記載事項は、有害動植物名、発生の予想される地域及び時期、発生程度、防除時期及び防除法、その他必要な事項とする。

エ 特殊報：新規な有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発生消長に特異的な現象が認められた場合に発表するもの。

記載に当たっては、その内容により問題の重要性、意義等につき解説を加えるよう配慮するものとする。

オ 速報：有害動植物の発生消長に著しい変化があると予想され、又は発生消長を速やかに周知する必要が認められた場合に発表するもの。

記載事項については、その内容について必要な事項とする。

カ 技術情報：有害動植物の発生状況や防除の情報について、病害虫防除所長が必要と認めた場合に発表するもの。

記載事項については、その内容について必要な事項とする。

（2）発表回数

種類	令和6年度	(前年度)
発生予報	12	(12)
警報	0	(0)
注意報	7	(1)
特殊報	2	(3)
速報	1	(1)
技術情報	14	(12)
合計	36	(29)

2 情報の発表状況

(1) 発生予報

	発表月日	対象作物	対象病虫害
第1号	3月28日	かんきつ なし イチゴ 冬春トマト 冬春ナス	そうか病、かいよう病、ミカンハダニ 黒星病 灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 灰色かび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ
第2号	4月30日	かんきつ なし かき 果樹共通 茶	そうか病、ミカンハダニ 黒星病、赤星病 フジコナカイガラムシ チャバネアオカメムシ カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマ、 チャノミドリヒメヨコバイ、チャトゲコナジラミ
第3号	5月31日	かんきつ なし かき 果樹共通 茶	そうか病、ミカンハダニ 黒星病、ハダニ類 炭疽病、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類 果樹カメムシ類 炭疽病、もち病、カンザワハダニ、 チャノコカクモンハマキ、チャノキイロアザミウマ、 チャトゲコナジラミ、チャノミドリヒメヨコバイ
第4号	7月1日	水稻(普通期) かんきつ なし かき 果樹共通 イチゴ(育苗期) 茶	セジロウンカ、トビイロウンカ 黒点病、かいよう病、ミカンハダニ 黒星病、ナシヒメシンクイ、ハダニ類 炭疽病、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類 果樹カメムシ類(チャバネアオカメムシ) うどんこ病、炭疽病、ハダニ類 炭疽病、カンザワハダニ、チャノコカクモンハマキ チャノホソガ、チャノキイロアザミウマ、 チャノミドリヒメヨコバイ、チャトゲコナジラミ
第5号	8月1日	水稻(普通期) 大豆 かんきつ なし かき 果樹共通 イチゴ(育苗期) 野菜共通 茶	いもち病、紋枯病、セジロウンカ、トビイロウンカ、コ ブノメイガ ハスモンヨトウ 黒点病、ミカンハダニ 黒星病、ナシヒメシンクイ、ハダニ類 炭疽病、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類、 カキノヘタムシガ 果樹カメムシ類(チャバネアオカメムシ) 炭疽病、ハダニ類 コナジラミ類 炭疽病、カンザワハダニ、チャノコカクモンハマキ、 チャノホソガ、チャノキイロアザミウマ、 チャノミドリヒメヨコバイ、チャトゲコナジラミ
第6号	8月29日	水稻(普通期) 大豆 かんきつ かき 果樹共通 イチゴ(育苗期) 野菜共通 茶	いもち病、紋枯病、トビイロウンカ、斑点米カメムシ類 ハスモンヨトウ、吸実性カメムシ類 黒点病、ミカンハダニ 炭疽病、フジコナカイガラムシ、ハマキムシ類 果樹カメムシ類(チャバネアオカメムシ) 炭疽病、ハダニ類 ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナジラミ類 炭疽病、もち病、カンザワハダニ、チャノコカクモンハ マキ、チャノホソガ、チャノキイロアザミウマ、チャノ ミドリヒメヨコバイ、チャトゲコナジラミ

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第7号	10月1日	大豆 かんきつ かき 果樹共通 イチゴ 冬春ナス 野菜共通	ハスモンヨトウ、吸実性カメムシ類 ミカンハダニ 炭疽病、フジコナカイガラムシ 果樹カメムシ類(チャバネアオカメムシ) うどんこ病、炭疽病、ハダニ類 ミナミキイロアザミウマ ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナジラミ類
第8号	10月30日	イチゴ 冬春ナス 冬レタス 冬キャベツ 野菜共通	うどんこ病、炭疽病、ハダニ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ 灰色かび病、菌核病 黒腐病、菌核病、コナガ ハスモンヨトウ、オオタバコガ、コナジラミ類
第9号	11月29日	イチゴ 冬春トマト 冬春ナス 冬レタス 冬キャベツ	灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 すすかび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ 灰色かび病、菌核病 黒腐病、菌核病、コナガ
第10号	12月19日	イチゴ 冬春トマト 冬春ナス 冬レタス 冬キャベツ	灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 すすかび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ 灰色かび病、菌核病 黒腐病、菌核病、コナガ
第11号	1月23日	イチゴ 冬春トマト 冬春ナス 冬レタス 冬キャベツ	灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 すすかび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ 灰色かび病、菌核病 黒腐病、菌核病、コナガ
第12号	2月28日	イチゴ 冬春トマト 冬春ナス	灰色かび病、うどんこ病、ハダニ類 灰色かび病、コナジラミ類 灰色かび病、すすかび病、ミナミキイロアザミウマ

(2) 注意報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	4月24日	麦類	赤かび病
第2号	5月1日	果樹全般	果樹カメムシ類(チャバネカメムシ、ツヤカメムシ他)
第3号	7月1日	かんきつ類	ミカンハダニ
第4号	7月22日	果樹全般	果樹カメムシ類(チャバネカメムシ、ツヤカメムシ他)
第5号	9月19日	大豆、野菜類	ハスモンヨトウ
第6号	9月27日	大豆、野菜類	ハスモンヨトウ
第7号	10月30日	野菜類	チョウ目害虫(ハスモンヨトウ、材外ハコガ、シイモシヨトウ)

(3) 特殊報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	9月18日	ホオズキ	タバコノミハムシ
第2号	11月27日	かんきつ、かき、 イチジク	チュウゴクアミガサハゴロモ

(4) 速報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	6月18日	水稻	イネ縞葉枯病

(5) 技術情報

	発表月日	対象作物	対象病害虫
第1号	5月31日	茶	炭疽病
第2号	6月12日	普通期水稻	スクミリンゴガイ
第3号	6月17日	果樹全般	果樹カメムシ類(チャハネアカメムシ他)
第4号	7月2日	トマト、ミニトマト	トマトキバガ
第5号	7月17日	水稻	海外飛来性害虫(セジロウカ、トビイロウカ、コブノメカ)
第6号	7月26日	果樹全般	果樹カメムシ類(チャハネアカメムシ、ツヤアカメムシ他)
第7号	7月29日	水稻	海外飛来性害虫(セジロウカ、トビイロウカ、コブノメカ)
第8号	7月29日	水稻	イネカメムシ
第9号	10月31日	イチゴ	ハダニ類
第10号	11月7日	キウイフルーツ	キウイフルーツかいよう病
第11号	1月23日	イチゴ(親株)	炭疽病潜在感染状況
第12号	1月23日	キウイフルーツ	キウイフルーツかいよう病
第13号	2月4日	果樹全般	果樹カメムシ類(チャハネアカメムシ)
第14号	3月28日	麦類	赤かび病

3 情報の提供先

県内関係機関・農業団体・市町村・国の機関等に、ファックス・電子メール・郵送で、また、ホームページ (<https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>) への掲載、X (旧 Twitter) への投稿により、発生予報、注意報、特殊報等の病害虫情報を提供している。

区分	提供先	提供方法及び件数			
		ファックス	電子メール	郵送	計
県	農林水産政策課、食の安全・地産地消課、 団体指導課、園芸振興課、水田農業振興課 経営技術支援課生産資材係		6		6
	農林事務所		6		6
	農林業総合試験場 (企画部、豊前分場、筑後分場、八女分場、 資源活用研究センター)		5		5
	農林事務所普及指導センター		10		10
	農業大学校		1		1
	病害虫防除員			22	22
	計	0	28	22	50
	全国農業協同組合連合会福岡県本部 (営農開発部、農産部、園芸部)	3			3
	全国農業協同組合連合会福岡県本部 (農機資材部)		1		1
	農業協同組合 (農産又は園芸担当課)	15	5		20
	福岡県農業共済組合本所 福岡県農業共済組合支所 (筑前福岡、筑後川流域、 筑後、筑豊、京築・北九州)	5	1		6
	計	23	7	0	30
市町村	市町村 (農政担当課)	38	22		60
	計	38	22	0	60
その他	農林水産省消費・安全局		1		1
	九州農政局消費・安全部		1		1
	九州農政局福岡地域センター	1			1
	門司植物防疫所	1			1
	(独)九州沖縄農業研究センター	1			1
	(財)日本植物防疫協会		1		1
	福岡管区気象台気象防災部 (地域防災推進課)		1		1
	計	3	4	0	7
合計		64	61	22	147

※令和7年3月31日時点の提供先、提供方法及び件数。6年度中に変動あり (FAX送信からメール送信への変更希望があったため)。

4 情報の概要

(1) 注意報

ア 第1号 麦類 赤かび病

公印省略

6 農林試第410号
令和6年4月24日

各関係機関団体の長 }
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和6年度病虫害発生予察注意報第1号について

このことについて、病虫害発生予察注意報第1号(赤かび病)を発表したので送付します。

注意報第1号

1 対象作物名：麦類

2 病虫害名：赤かび病

3 発生予想：多

4 予報の根拠

- (1) 本病は、**開花期**に最も感染しやすく、この時期に、降雨が続き、比較的気温が高い(平均気温18度以上)と多発する。
- (2) 4月上～下旬に断続的な降雨があり、4月中旬の気温が高く経過しているため、本病の感染に最適な条件となっている。
- (3) 福岡管区気象台4月18日付け発表の1か月予報では、向こう1か月(4月20日～5月19日)の気温は、暖かい空気に覆われるため高く、降水量は、平年並か多いと予想されている。
- (4) 本年は、麦の防除適期(「5 防除上注意すべき事項(1)」参照)に降雨が続き、計画的な防除が困難な気象条件であった。

5 防除上注意すべき事項

- (1) 1回目の薬剤防除時期は、小麦および裸麦(開花受粉性)では開花期(出穂後7～10日)、二条大麦(閉花受粉性)では蒴殻が押し出されてくる穂揃期の約10日後(出穂後12～14日)である。2回目の防除は、いずれも1回目の薬剤散布の7～10日後である。**2回目の防除が遅れている場合は、速やかに防除を実施する。**
- (2) **赤かび病に弱い品種(ちくしW2号、ミナミノカオリ、はるか二条)や裸麦**では2回防除を徹底し、その他の品種についても、曇雨天が続いていることから2回目の防除を実施する。
- (3) 液剤による薬剤防除の場合、散布した薬剤が乾く前に降雨があると、防除効果が低下する。また粉剤では、散布後6時間以内に降雨があると防除効果が低下するので、薬剤防除を行う際は、

散布後の降雨予想等に注意を払う。

- (4) 薬剤防除に当たっては、農薬使用基準（使用時期「収穫前日数」、使用回数等）を遵守する。
特に小麦と大麦で農薬使用基準の異なる薬剤が多いので注意を払うとともに、周辺ほ場への飛散防止対策を講ずる。



赤かび病の発生状況（左：小麦、右：大麦）

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。
発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①

○X（旧 Twitter）で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

X（旧 Twitter）の本アカウント（福岡県農作物病害虫情報）へのアクセス

URL: https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード②



最新の病害虫発生状況



各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和6年度病虫害発生予察注意報第2号について

このことについて、病虫害発生予察注意報第2号(果樹カメムシ類)を発表したので送付します。

注意報第2号

- 1 対象作物名：果樹全般
- 2 病虫害名：果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ他)
- 3 発生予想：例年より早い時期からの発生がみられる。発生量が多い。
- 4 予報の根拠
 - (1) 令和5年後期(8~10月)のチャバネアオカメムシの発生量(予察灯・フェロモントラップ誘殺数)は過去10年間で最も多い状況であった。
 - (2) 県下31地点の常緑広葉樹林下落葉中における1㎡当たりの越冬成虫数は2.3頭/㎡で、過去10年平均値及び前年度よりもやや多かった。
また、越冬成虫の採集地点率は96.6%で、過去10年の平均値及び前年度よりも多かった。



ビワを加害するチャバネアオカメムシ

表 チャバネアオカメムシの1㎡当たり越冬成虫数

項目/年	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2014~23年平均	
越冬成虫数	県内平均	5.0	0.9	0.9	0.9	4.1	0.9	5.3	0.3	0.8	1.1	2.3	2.0
	朝倉	9.1	0.4	1.9	1.2	3.8	1.2	4.4	0.4	0.9	1.1	3.8	2.4
	久留米	6.8	1.7	1.1	1.4	5.4	0.9	8.5	0.5	1.0	1.1	2.8	2.8
	筑後	2.7	0.8	0.7	0.4	2.3	0.6	3.2	0.0	0.3	0.5	1.3	1.2
	福岡・飯塚・行橋	2.7	0.3	0.2	1.0	5.4	0.9	5.1	0.3	1.1	2.3	1.9	1.9
県内採集地点率(%)	96.6	75.9	72.4	79.3	100.0	86.2	96.6	41.4	82.1	81.5	96.6	81.2	
4~7月成虫誘殺数	予察灯	2,128	86	126	206	1,400	203	3,044	115	337	3,037	-	1,068
	フェロモントラップ	15,279	237	338	493	2,530	38	2,635	19	1,142	998	-	2,371

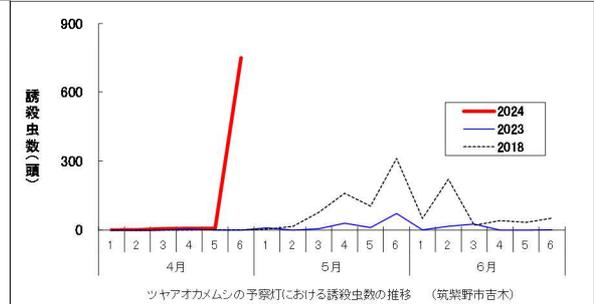
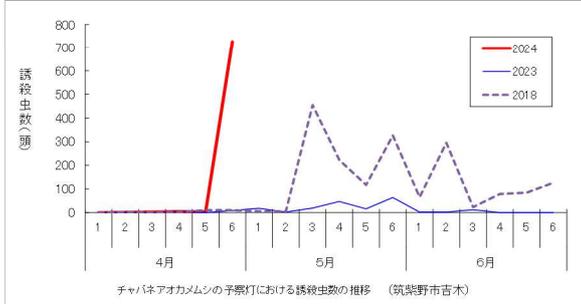
(3) 近年の発生状況との比較では、2018年と同様の前期型発生と予想される。

・筑紫野市の予察灯での4月1半旬～4月6半旬までのチャバネアオカメムシ成虫誘殺数は、過去10年間では最大となった。

2024年度 751頭 (前年 14頭、2018年 24頭)

・筑紫野市の予察灯での4月1半旬～4月6半旬までのツヤアオカメムシ成虫誘殺数は、過去10年間では最大となった。

2024年度 768頭 (前年 5頭、2018年 3頭)

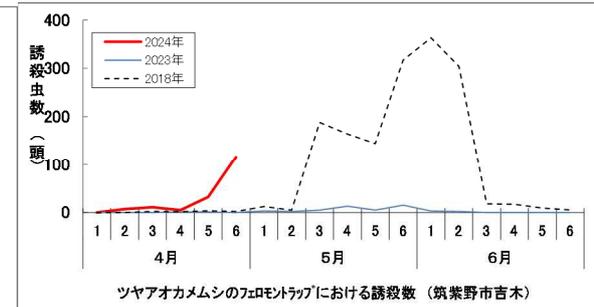
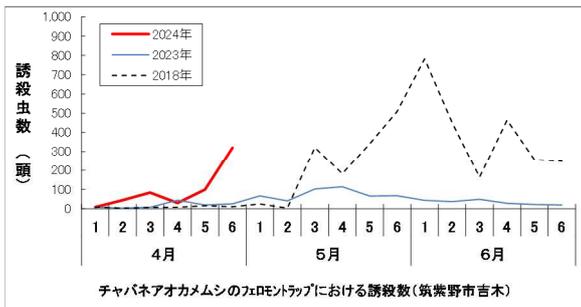


・筑紫野市のフェロモントラップでの4月1半旬～4月6半旬までのチャバネアオカメムシ成虫誘殺数は過去10年間では最大となった。

2024年度 599頭 (前年 104頭、2018年 47頭)

・筑紫野市のフェロモントラップでの4月1半旬～4月6半旬までのツヤアオカメムシ成虫誘殺数は過去10年間では最大となった。

2024年度 179頭 (前年 2頭、2018年 9頭)



(4) 福岡管区气象台4月25日付け発表の1か月予報では、向こう1か月(4月27日～5月26日)の気温は、暖かい空気に覆われるため高いと予想されている。

5 防除上注意すべき事項

(1) 果樹カメムシ類は夜温が高くなると活動が活発になるので、気温の推移と予察灯やフェロモントラップでの誘殺数が増加する時期と量に留意し、果樹園への飛来状況の把握に努める。

発生時期や発生量は地域や園によって大きく異なるため、把握のための観察は一部の樹だけではなく、園全体の樹について行う。

(2) ウメ・ビワ・モモ・ナシなど春季に結実する果樹については、例年より早く被害が発生する恐れがあるため、飛来状況を確認し、防除や袋掛け作業を徹底する。また、果樹カメムシ類は広範囲に移動することから、薬剤散布は広域で一斉防除を実施することで、高い防除効果が期待される。

(3) 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページ

(<https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>) を参照する。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①

○X (旧 Twitter) で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

X (旧 Twitter) の本アカウント (福岡県農作物病害虫情報) へのアクセス

URL: https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード②



福岡県病害虫防除所
最新の病害虫発生状況



各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和6年度病虫害発生予察注意報第3号について

このことについて、病虫害発生予察注意報第3号(ミカンハダニ)を発表したので送付します。

注意報第3号

1 対象作物名: かんきつ類

2 病虫害名: ミカンハダニ

3 発生予想: 平年・前年より多い

4 予報の根拠

(1) 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

寄生葉率 21.2% (平年 11.8%、前年 2.8%)

発生ほ場率 54.5% (平年 57.3%、前年 45.5%)

(2) 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

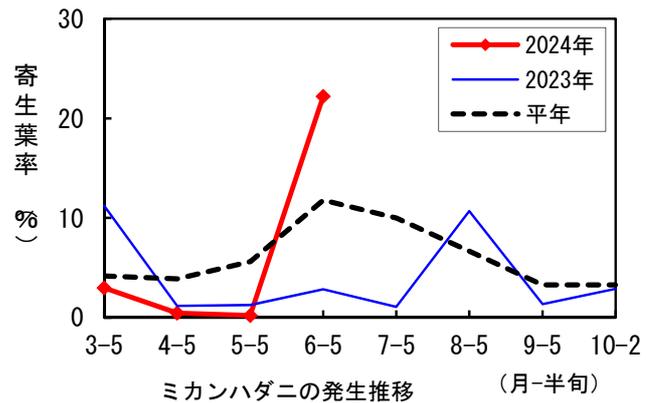
5 防除上注意すべき事項

(1) ほ場ごとに状況を確認し、発生が認められる場合は防除する。

(2) 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除に努める。

(3) 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下を防ぐため同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



病虫害防除所のホームページでは、各種病虫害の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病虫害防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①

○X (旧 Twitter) で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

X (旧 Twitter) の本アカウント (福岡県農作物病虫害情報) へのアクセス

URL: https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード



最新の病虫害発生状況



各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

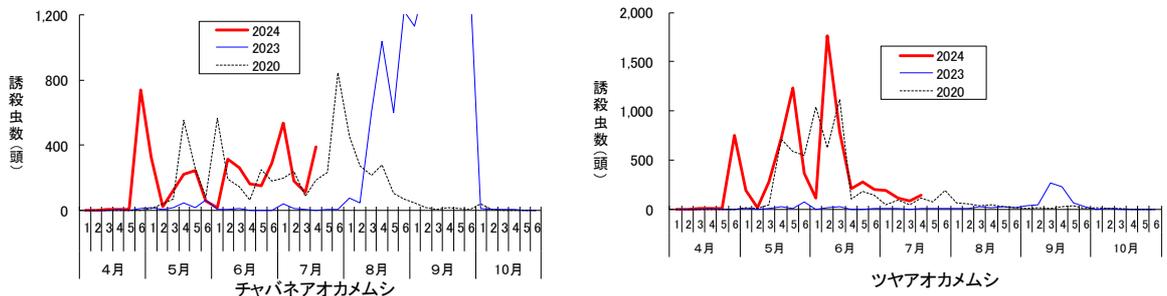
福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和6年度病虫害発生予察注意報第4号について

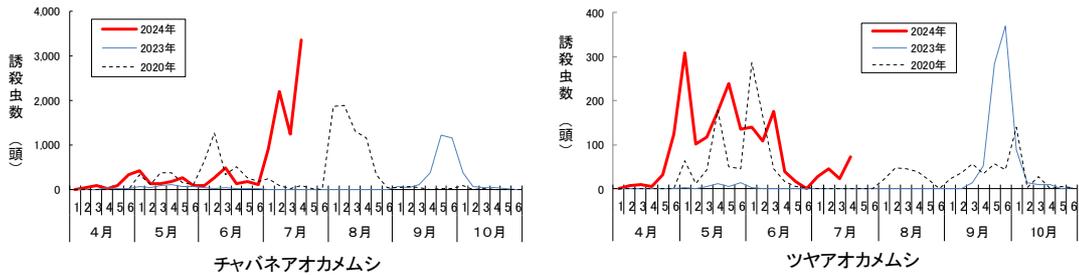
このことについて、病虫害発生予察注意報第4号(果樹カメムシ類)を発表したので送付します。

注意報第4号

- 1 対象作物名：果樹全般
- 2 病虫害名：果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ他)
- 3 発生予想：例年より早い時期からの発生がみられ、発生量は多く、7月下旬以降に被害が急増するおそれがある。
- 4 予報の根拠
 - (1) 本年(令和6年)は、予察灯におけるチャバネアオカメムシ誘殺頭数が前期発生型であった令和2年(2020年)に類似しているが、既にこの時の累積頭数を超えている(令和2年 3,113頭 本年 4,141頭 筑紫野市4月1日～7月21日)。
 - (2) フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの誘殺頭数は、6月末までは令和2年(2020年)より少なめに推移したが、7月以降は急激に誘殺数が上昇した(令和2年 5,187頭、本年 10,845頭 筑紫野市4月1日～7月22日)。前期発生型でも7月から誘殺が急増した例はなく、果樹等への加害が懸念される。
 - (3) ツヤアオカメムシについては、予察灯における累積誘殺頭数が既に令和2年(2020年)の頭数を超えている。(令和2年 5,419頭、本年 7,446頭 筑紫野市4月1日～7月21日) またフェロモントラップにおける誘殺も同様である(令和2年 921頭、本年 1,910頭 筑紫野市4月1日～7月22日)。



予察灯における果樹カメムシの誘殺数 (筑紫野市吉木)



フェロモントラップによる果樹カメムシの誘殺数(筑紫野市吉木)

(4) 福岡管区气象台7月18日付け発表の1か月予報では、向こう1か月（7月20日～8月19日）の気温は、かなり高くなると予想されている。

5 防除上注意すべき事項

- (1) 果樹カメムシ類は夜温が高くなると活動が活発になるので、気温の推移と予察灯やフェロモントラップでの誘殺数が増加する時期と量に留意し、果樹園への飛来状況の把握に努める。
発生時期や発生量は地域や園によって大きく異なるため、把握のための観察は一部の樹だけではなく、園全体の樹について行う。
- (2) 例年より早く被害が発生する恐れがあるため、飛来状況を確認し、防除や袋掛け作業を徹底する。また、果樹カメムシ類は広範囲に移動することから、薬剤散布は広域で一斉防除を実施する。
- (3) 今後の発生状況については、病虫害防除所ホームページ (<https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>) を参照する。

病虫害防除所のホームページでは、各種病虫害の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病虫害防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①

○X (旧 Twitter) で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

X (旧 Twitter) の本アカウント (福岡県農作物病虫害情報) へのアクセス

URL: https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード②



最新の病害虫発生状況



各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和6年度病虫害発生予察注意報第5号について

このことについて、病虫害発生予察注意報第5号（ハスモンヨトウ）を発表したので送付します。

注意報第5号

1 対象作物名：大豆、野菜類（イチゴなど）

2 病虫害名：ハスモンヨトウ

3 発生予想：多

4 予報の根拠

(1) 8月1半旬から9月2半旬のフェロモントラップにおける雄成虫の誘殺数は平年よりやや少なかったが、9月3半旬以降、ハスモンヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が増加傾向であり、特に筑後市で、9月3半旬から4半旬にかけて急激に増加している（図1）。

(2) 大豆の9月2半旬調査の結果では、白変葉発生株率は15.4%（平年3.3% 前年17.1%）、発生ほ場率は83.3%（平年48.9% 前年100%）で平年より多かった（図2）。なお、ハスモンヨトウの10株当たり払い落とし幼虫数は2.3頭（平年4.1頭 前年2.8頭）、発生ほ場率58.3%（平年64.8% 前年100%）であった（図3）。

(3) イチゴの9月2半旬調査の結果では、チョウ目被害株率は6.8%（平年2.7% 前年4.0%）、発生ほ場率58.3%（平年49.8% 前年50.0%）で、平年より多かった（図4）。

(4) 福岡管区気象台9月19日付発表の1か月予報では、向こう1か月の気温（9/21～10/20）は高く、期間の前半はかなり高くなると予想されている。

4 防除上注意すべき事項

(1) 共通

ア ほ場周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。

イ 中齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに薬剤防除を実施する。

ウ 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。なお、一部の薬剤で感受性の低下が懸念されているため、薬剤の選定には十分注意する。

エ フェロモントラップを活用した防除適期の目安は、誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるため、ほ場で発生状況を必ず確認し、防除する。

(2) 大豆

ほ場のハスモンヨトウや白変葉の発生状況を確認し、薬剤防除を実施する。

(3) 野菜

ア 施設栽培の場合は、ハウスの開口部に防虫ネット(目合い0.4mm以下)を張り、成虫の飛び込みを防止する。

イ イチゴ、ナス、トマト等の果菜類では、葉以外にも花蕾や果実を食害するため注意する。

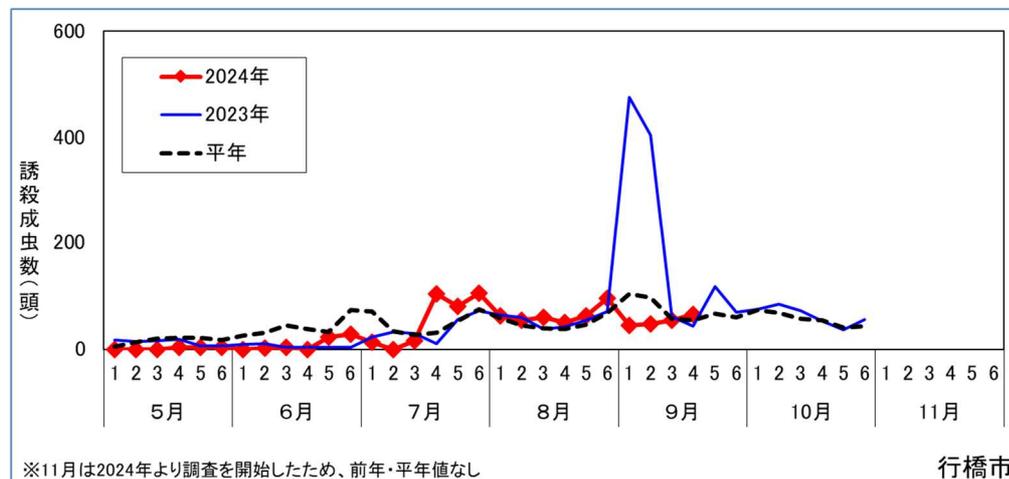
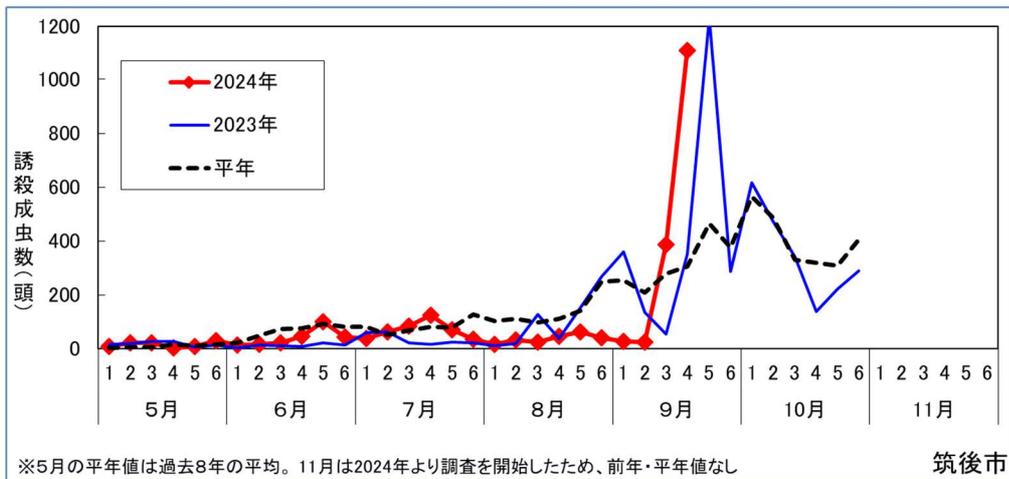
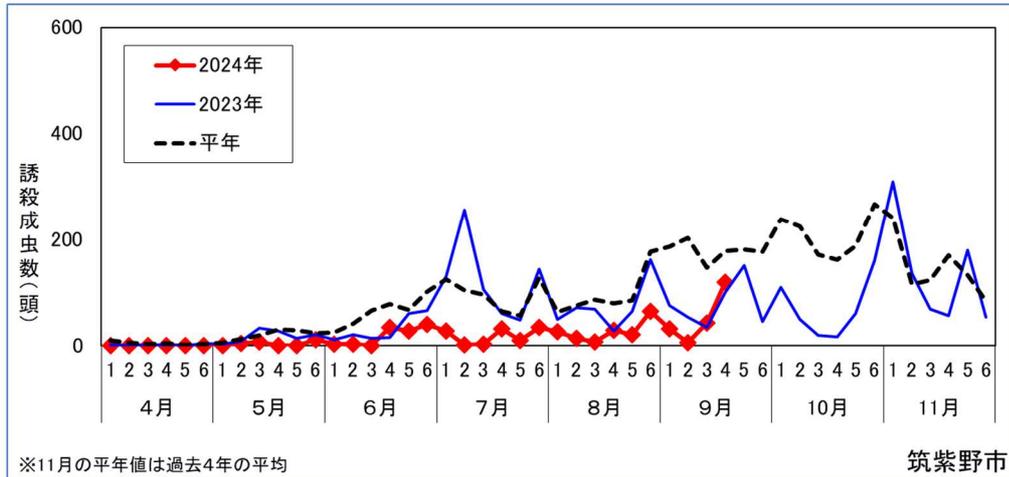


図1 フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺成虫数

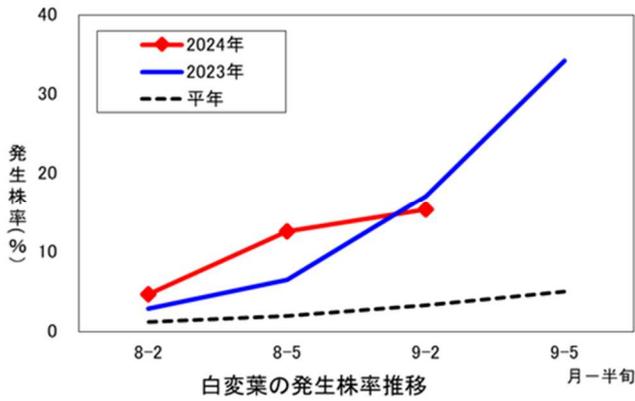


図2 大豆における白変葉の発生株率の推移

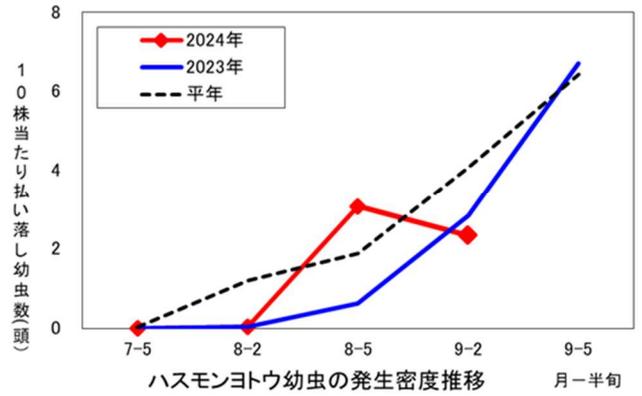


図3 大豆におけるハスモンヨトウの発生密度推移

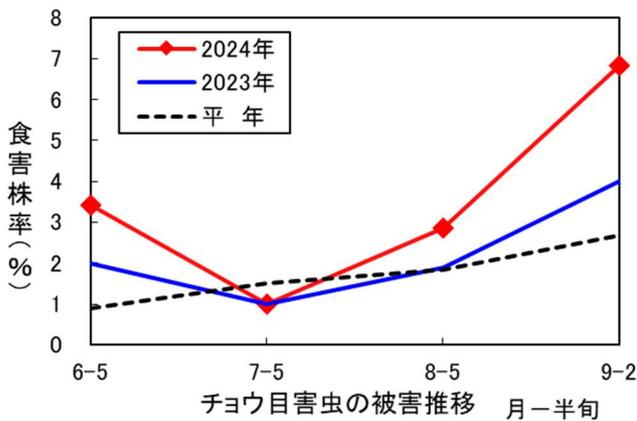


図4 イチゴにおけるチョウ目被害の推移

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード

○X (旧 Twitter) で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

X (旧 Twitter) の本アカウント (福岡県農作物病害虫情報) へのアクセス

URL: https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード



最新の病害虫発生状況



カ 第6号 大豆、野菜類 ハスモンヨトウ

公印省略

6農林試第420号-6

令和6年9月27日

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和6年度病虫害発生予察注意報第6号について

このことについて、病虫害発生予察注意報第6号を発表したので送付します。

令和6年9月19日付けでハスモンヨトウの注意報第5号を发出したところですが、大豆の9月5半旬調査において多発ほ場が見られています。今後も本虫の発生に好適な気象条件が続くと予想されるため、大豆や野菜のほ場での発生状況に注意し、防除の徹底をお願いします。

注意報第6号

1 対象作物名：大豆・野菜類

2 病虫害名：ハスモンヨトウ

3 発生予想：多

4 予報の根拠

- (1) 大豆の9月5半旬調査の結果では、ハスモンヨトウの10株当たり払い落とし幼虫数は97.9頭(平成6.4頭 前年 6.7頭)で、過去10か年で最も多かった(図1)。発生ほ場率83.3%(平成61.9% 前年91.7%)であった(図2)。一部のほ場では、10株当たり払い落とし幼虫数600頭を超えるほ場が見られており、9月2半旬以降急増している。
- (2) ハスモンヨトウによる白変葉(食害葉)の発生株率は48.3%(平成5.0% 前年34.3%)、発生ほ場率は100%(平成43.1% 前年83.3%)で、依然として多い(図3, 4)。
- (3) 9月3半旬以降、ハスモンヨトウのフェロモントラップへの誘殺数が増加傾向である。特に筑後市では、9月3半旬から4半旬にかけて平成より非常に多くなっている(図5)。
- (4) イチゴ、ナスの9月5半旬調査では、ハスモンヨトウによる食害が確認されている。
- (5) 福岡管区気象台9月26日付発表の1か月予報では、向こう1か月の気温(9/28~10/27)は高く、期間の前半はかなり高くなると予想されている。

5 防除上注意すべき事項

- (1) ほ場周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。
- (2) 中齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに薬剤防除を実施する。
- (3) フェロモントラップを活用した防除適期の目安は、誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺消長に差があるため、ほ場でのハスモンヨトウや白変葉、食害株等の発生状況を確認し、薬剤防除を実施する。
- (4) 今後の発生状況については、病虫害防除所のホームページを参照する。
<<https://www.jpjn.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>>
- (5) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。なお、

一部の薬剤で感受性の低下が懸念されているため、薬剤の選定には十分注意する。

(6) 施設栽培の場合は、ハウスの開口部に防虫ネットを張り、成虫の飛び込みを防止する。

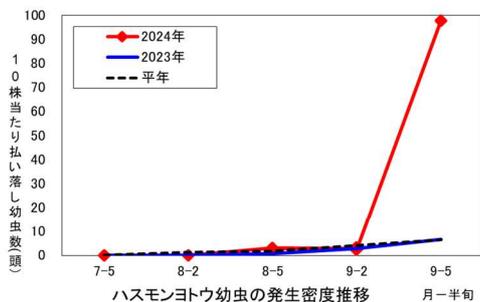


図1 大豆におけるハスモンヨトウ幼虫発生密度の推移

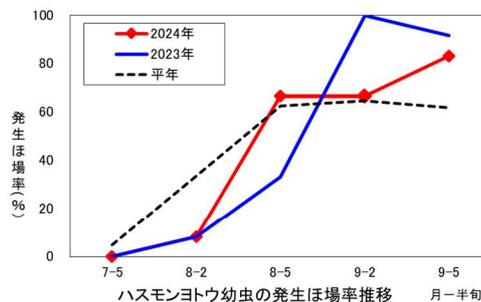


図2 大豆におけるハスモンヨトウ幼虫発生ほ場率の推移

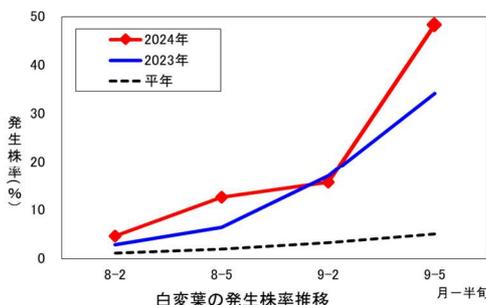


図3 大豆における白変葉の発生株率の推移

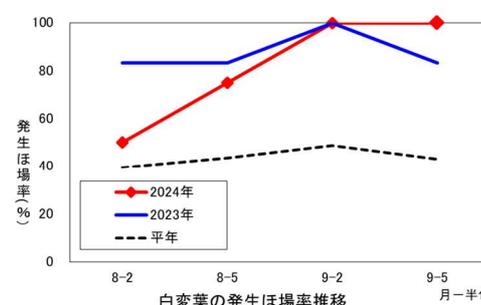


図4 大豆における白変葉の発生ほ場率の推移

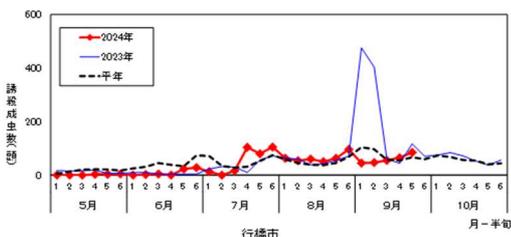
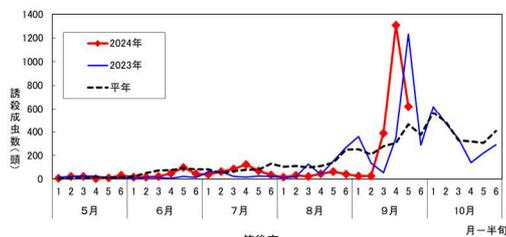
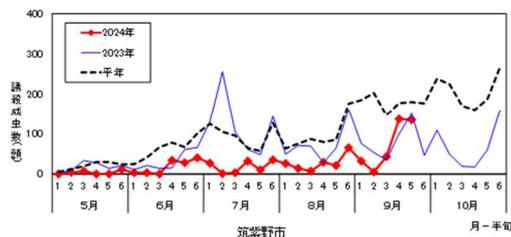


図5 フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺成虫数の推移

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.jpnp.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード

○X (旧 Twitter) で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

X (旧 Twitter) の本アカウント (福岡県農作物病害虫情報) へのアクセス

URL: https://x.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード



キ 第7号 野菜類 チョウ目害虫

公印省略

6 農林試第420号-7
令和6年10月30日

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和6年度病虫害発生予察注意報第7号について

このことについて、病虫害発生予察注意報第7号を発表したので送付します。

イチゴ、冬キャベツ、冬レタスの10月5半旬調査において、チョウ目害虫による食害や卵塊が多く確認されています。今後も本虫による食害が拡大することが予想されるため、各ほ場での発生状況に注意し、防除の徹底をお願いします。

注意報第7号

1 対象作物名：野菜類

2 病虫害名：チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

3 発生予想：多

4 予報の根拠

- (1) イチゴの10月5半旬調査の結果では、ハスモンヨトウの寄生株率が1.9%（平成0.9% 前年1.3%）で（図1）、発生ほ場率30.8%（平成22.7% 前年42.9%）であった。チョウ目害虫の被害株率が17.4%（平成7.8% 前年11.9%）で（図2）、発生ほ場率100%（平成58.5% 前年92.9%）であった。
- (2) 冬キャベツの10月5半旬調査の結果では、ハスモンヨトウの寄生株率が4.7%（平成0.6% 前年2.0%）で（図3）、発生ほ場率83.3%（平成15.1% 前年42.9%）であった。オオタバコガの寄生株率が3.7%（平成1.9% 前年0.3%）で（図4）、発生ほ場率50.0%（平成37.8% 前年14.3%）であった。シロイチモジヨトウの寄生株率が2.3%（平成0.2% 前年0%）で、発生ほ場率50.0%（平成8.5% 前年0%）であった。
- (3) 冬レタスの10月5半旬調査において、一部のほ場でハスモンヨトウ及びシロイチモジヨトウの寄生を多く確認している。
- (4) ハスモンヨトウのフェロモントラップへの誘殺数は、10月4半旬以降急増しており、平成より多い（図5）。
- (5) オオタバコガのフェロモントラップへの誘殺数は、9月中旬以降、平成より多く推移している（図6）。
- (6) 福岡管区気象台10月24日付発表の1か月予報では、向こう1か月の気温（10/26～11/25）は高く、期間の前半はかなり高くなると予想されている。

5 防除上注意すべき事項

- (1) ほ場周辺の雑草は増殖の場となるので、除草を徹底する。
- (2) 中齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに薬剤防除を実施する。

- (3) フェロモントラップを活用した防除適期の目安は、誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺消長に差があるため、ほ場での発生状況を確認し、薬剤防除を実施する。
- (4) 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。
<<https://www.jpnp.ne.jp/fukuoka/doukou/hassei.html>>
- (5) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。なお、一部の薬剤で感受性の低下が懸念されているため、薬剤の選定には十分注意する。
- (6) 施設栽培の場合は、ハウスの開口部に防虫ネットを張り、成虫の飛び込みを防止する。
- (7) 結球する野菜では、結球内部に食入し、被害が大きくなるため、結球前の防除を徹底する。

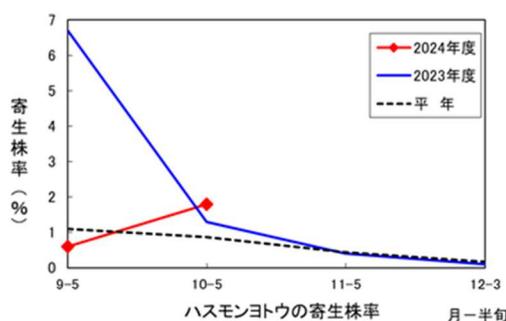


図1 イチゴにおけるハスモンヨトウの寄生株率の推移

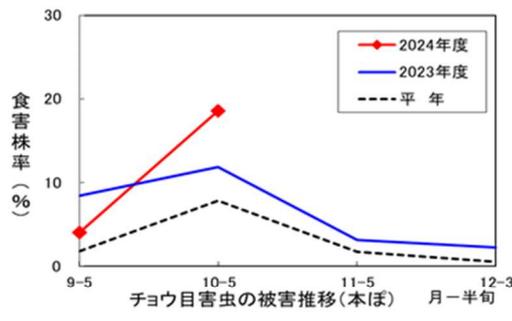


図2 イチゴにおけるチョウ目害虫の被害の推移

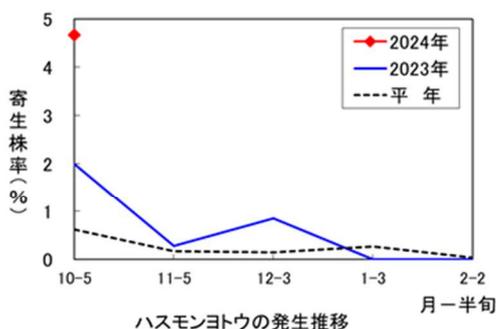


図3 冬キャベツにおけるハスモンヨトウの寄生株率の推移

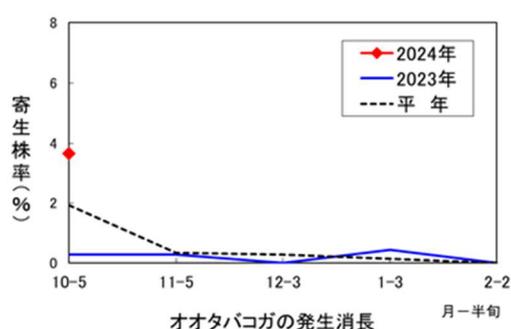


図4 冬キャベツにおけるオオタバコガの寄生株率の推移

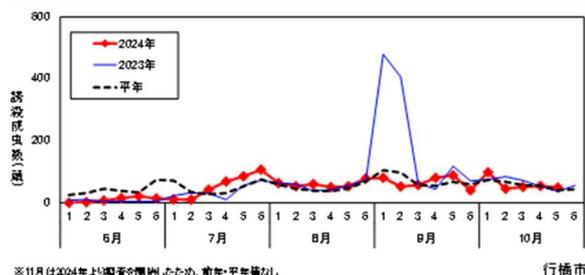
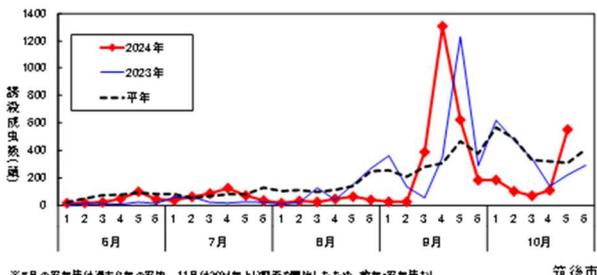
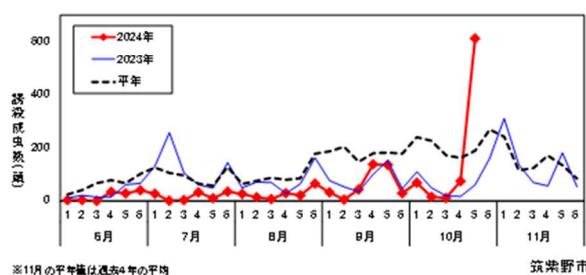


図5 フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺成虫数の推移

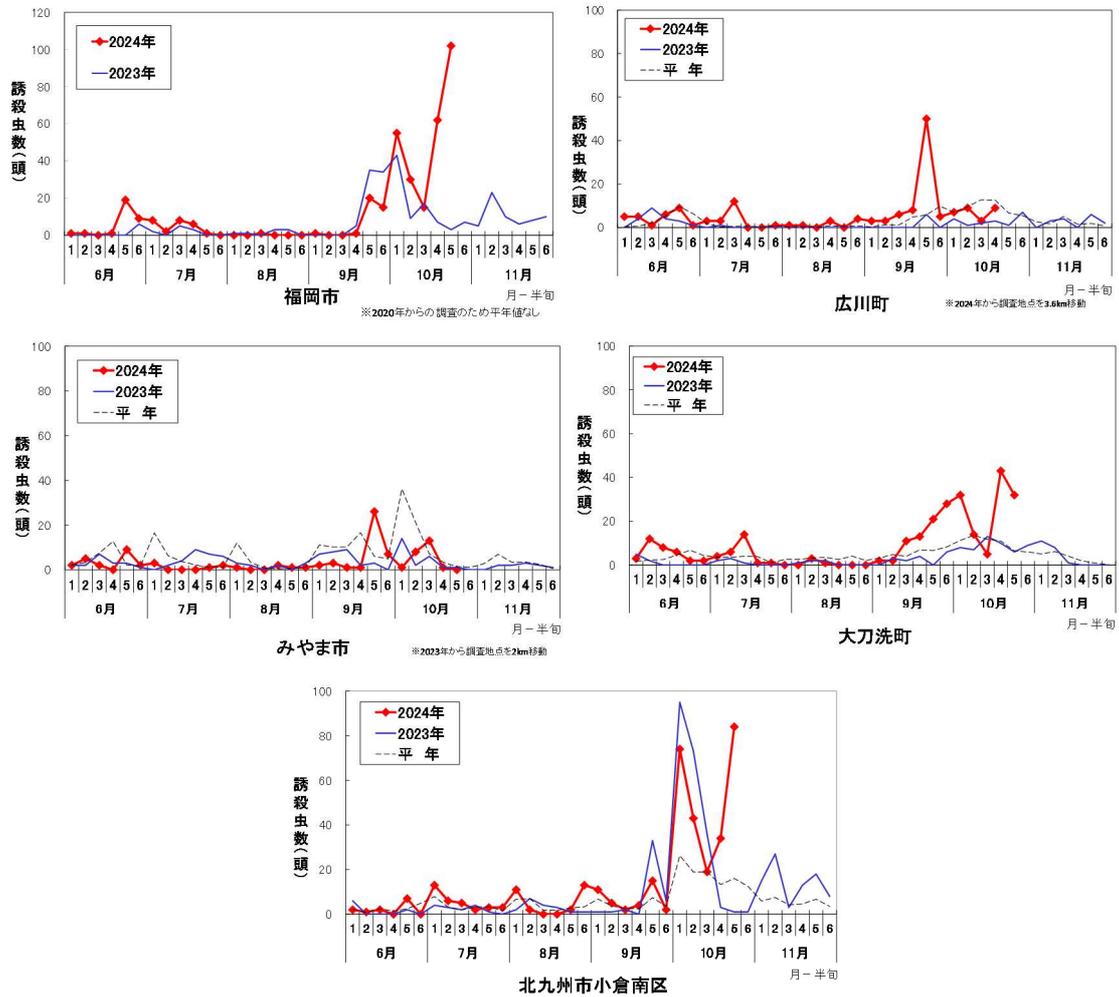


図6 フェロモントラップにおけるオオタバコガの誘殺成虫数の推移

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード

○X (旧 Twitter) で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

X (旧 Twitter) の本アカウント (福岡県農作物病害虫情報) へのアクセス

URL: https://x.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード

福岡県病害虫防除所



最新の病害虫発生状況



(2) 特殊報

ア 第1号 タバコノミハムシ

公印省略

6 農林試 1564 号
令和 6 年 9 月 18 日

各関係機関団体の長 }
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和 6 年度病虫害発生予察特殊報第 1 号について

このことについて、下記のとおり発表したので送付します。

特殊報第 1 号

- 1 害虫名 タバコノミハムシ
学名 : *Epitrix hirtipennis*(Melsheimer)
- 2 発生作物 ホオズキ
- 3 発生の経過と概要
令和 6 年 6 月、県北部のホオズキ生産ほ場において、数 mm の小孔が複数生じたホオズキ葉とハムシ類成虫の寄生が確認された。当該ほ場で採取された個体がタバコノミハムシであることが疑われたため、農林水産省門司植物防疫所に同定依頼をしたところ、本種であることが判明した。
- 4 国内での発生状況
平成 23 年に群馬県で本種が確認されて以降、九州から北陸、関東に至る各地で本種の発生が確認されている。
- 5 本種の特徴
 - (1) 形態
成虫はやや扁平な長楕円形で、体長は 1.5~2.5mm。前胸は赤褐色であり、翅鞘は黄褐色で中央部に不明瞭な暗色の横帯を有する。後脚腿節は肥大している (写真 1)。
 - (2) 被害
成虫は葉を貫通、あるいは葉の表皮を残して葉肉を食害するため、葉に直径 1~2mm 程度の白変または小孔が食害痕として確認される (写真 2)。ふ化幼虫は地中で根を食害する。
 - (3) 寄主植物
ナス科植物を寄主とし、国内ではホオズキ以外にもトマトやナス、バレイショで被害が報告されている。

6 防除対策

- (1) 令和6年9月9日現在、ホオズキにおいて、本種に対する登録農薬はない。なお、他県の事例では、本種は主に減農薬や無農薬栽培のほ場で発生が確認されており、慣行防除を実施しているほ場では被害の発生はほとんど確認されていない。
- (2) 本種の発生ほ場では、周辺のナス科植物への移動を防ぐため、栽培終了後は残渣を速やかに処分する。



写真1 タバコノミハムシ成虫
(農林水産省門司植物防疫所提供)



写真2 タバコノミハムシ成虫による葉の食害痕

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。

発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード



最新の病害虫発生状況

○X (旧Twitter) で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

X (旧Twitter) の本アカウント (福岡県農作物病害虫情報) へのアクセス

URL: https://x.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード



(2) 特殊報

イ 第2号 カンキツ、カキ、イチジク

公印省略

6農林試第1564号-2

令和6年11月27日

各関係機関団体の長 }
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

令和6年度病虫害発生予察特殊報第2号について

このことについて、下記のとおり発表したので送付します。

特殊報第2号

- 害虫名 チュウゴクアミガサハゴロモ
学名: *Ricania shantungensis* (Chou & Lu, 1977)
- 発生作物 カンキツ、カキ、イチジク
- 発生の経過と概要
2024年6月に県内のカキ産地において、地域一帯のカキ園で黒褐色から鉄さび色のハゴロモ類が大量発生した。(写真1)。その後カンキツ園(写真2)やイチジク園、街路樹のヤナギにも発生が確認され、一部ではその排泄物にカビが生えるすす病が確認された。採取された成虫を農林水産省門司植物防疫所に持ち込み同定を依頼した結果、チュウゴクアミガサハゴロモと同定された。
- 分布と国内発生状況
原産地は中国であるが、韓国で2012年、トルコで2019年、フランスで2020年、ドイツで2021年、イタリアで2022年に確認されたとの報告があり、拡大傾向にある。
国内では2017年に大阪で初めて確認されたが、その後、神奈川、千葉、東京、岡山及び徳島で発生が確認されている。作物への被害については、2024年に神奈川と埼玉の防除所から特殊報が発出されている。
- 本種の特徴と生態
(1) 外観
成虫の体長は14~15mm、前翅長14mm程度。黒褐色から鉄さび色の前翅の前縁の中央部に、扁平で半円形の白斑がある(写真3)。
卵塊は、他のハゴロモ科の虫と同様に白いワックス状の物質で覆われ、樹木などの枝に産み付けられる(写真4)。観察では直径10mm以下の細い枝に産み付ける傾向がある。
主な生態は不明であるが、集団で吸汁加害することが多く、極めて広食性で宿主として報告のあるものはカバノキ科、クワ科、ブナ科、マメ科、モクセイ科、ツバキ科、バラ科、ツツジ科、モチノキ科、ニシキギ科、ヒノキ科、フトモモ科など多くの木本性植物があり、またキク科の草本類にも寄生し産卵が観察されるとの報告がある。

(2) 被害

集団で樹木の枝を吸汁し、その排泄物にカビが生えすす病を誘発する。また成虫は樹皮を剥いで産卵する(写真5)ため樹が損傷し、細枝が枯れることもある。

6. 防除対策

本虫に対して登録のある薬剤はないが、無防除の園では秋まで発生が継続しているものの、慣行の防除が行われるカキの栽培園では姿が見えなくなっている。産卵された枝の除去に努めるなど、個体数を減らす耕種的防除を行う。



写真1 カキの葉上の本虫



写真2 カンキツ枝上の本虫



写真3 前翅の縁に白斑がある



写真4 カンキツ枝上の卵塊



写真5 枝に産み付けられた卵

病虫害防除所のホームページでは、各種病虫害の発生状況を随時更新しています。発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病虫害防除所のホームページへのアクセス
URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード



最新の情報発生状況

○X(旧Twitter)で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。
Xの本アカウント(福岡県農作物病虫害情報)へのアクセスは
URL: https://X.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード



Ⅲ 国内検疫事業

1 侵入調査事業

植物防疫法（昭和25年5月4日 法律第151号）第十六条の七の2及び国が定める侵入調査事業計画に基づき、侵入警戒有害動植物の侵入を警戒するため、誘殺トラップや現地ほ場での発生状況を調査した。

なお、令和4年に植物防疫法が改正され、侵入調査事業が植物防疫法の中に位置付けられ、発生予察の対象となる侵入警戒有害動植物が指定された。

(1) ミカンコミバエ種群、ウリミバエ、クインスランドミバエ、チチュウカイミバエ

ア 調査場所及び調査地点数

(ア) ミカンコミバエ種群、ウリミバエ、クインスランドミバエ

糸島市（2地点）、筑紫野市、福津市、岡垣町、みやこ町、久留米市、筑後市、柳川市、みやま市

合計：10地点

(イ) チチュウカイミバエ

糸島市、筑紫野市、福津市、みやこ町、久留米市、筑後市、みやま市

合計：7地点

イ 調査期間及び時期

令和6年4～11月、令和7年3月の2半旬と5半旬

ウ 調査方法

ミカンコミバエ、ウリミバエ及びクインスランドミバエの誘引・殺虫混合剤ユーゲルアD8またはチチュウカイミバエの誘引剤メドフライコールを入れたスタイナー型トラップをそれぞれ設置し、誘殺数を調査した。

エ 調査結果

いずれの地点でも誘殺は確認されなかった。

(2) コドリングア

ア 調査場所及び調査地点数

筑紫野市、筑後市

合計：2地点

イ 調査期間及び時期

令和6年4月～12月、令和7年3月の2半旬と5半旬（期間内20回調査）

ウ 調査方法

コドリングアの誘引剤コドリングコールⅡを用いたジャクソン型トラップをナシ園近くの施設の敷地内に設置し、誘殺数を調査した。

エ 調査結果

コドリングアの誘殺は確認されなかった。

(3) トマトキバガ

ア 調査場所及び調査地点数

(ア) トラップ調査

福岡市、久留米市、筑紫野市、うきは市、筑後市、筑前町

合計：6地点

(イ) 見取り調査

福岡市、久留米市、うきは市、柳川市、八女市、筑後市

イ 調査期間及び時期

(ア) トラップ調査

令和6年4月～令和7年3月の2半旬と5半旬（期間内24回調査）

(イ) 見取り調査

令和6年10、11月、令和7年2、3月の2半旬と5半旬、令和6年12月、令和7年1月の3半旬（期間内10回調査）

ウ 調査方法

(ア) トラップ調査

トマトの栽培施設周辺にフェロモントラップを設置し、誘殺された疑義虫は交尾器を確認し同定した。

(イ) 見取り調査

トマト栽培ほ場において、目視で被害葉、被害果の有無を調査した。

エ 調査結果

4月～12月にかけていずれの地区のトラップでも誘殺が確認された。特に6月及び10～11月の誘殺が多かった。1月以降の誘殺数は少なかったが3月5半旬に4か所で誘殺が確認された。

見取り調査ではいずれのトマトほ場でも被害の発生は確認されなかった。

令和6年度 トマトキバガフェロモントラップ 誘殺状況

(単位：頭)

調査場所	周辺作物	4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月		合計	
		2半旬	5半旬																								
福岡市	トマト	1	1	2	4	32	45	21	19	16	10	9	9	31	37	37	66	13	4	0	0	0	0	0	0	1	358
うきは市	トマト	1	0	0	1	1	1	3	1	1	1	0	14	12	50	86	92	15	2	0	0	0	0	0	0	1	282
筑後市	トマト	0	2	0	1	7	9	15	5	0	2	0	8	21	49	84	64	18	2	0	0	0	0	0	0	0	287
筑紫野市	トマト	0	0	0	0	0	4	0	1	0	0	2	1	1	6	18	8	1	1	0	0	0	0	0	0	0	43
筑前町	ナス	0	0	0	0	6	8	4	3	3	2	1	15	12	29	34	18	8	1	0	0	0	0	0	0	2	146
久留米市	トマト	0	1	1	2	9	0	0	1	0	0	13	9	48	105	85	17	1	1	1	1	0	0	1	1	296	

(4) *Meloidogyne enterolobii*、columnnea latent viroid (CLVd)、pepper chat fruit viroid (PCFVd)、トマト退緑萎縮ウイルス (TCDVd)、tomato apical stunt viroid (TASVd)、pepino mosaic virus (PepMV)、tomato brown rugose fruit virus (ToBRFV)、tomato leaf curl New Delhi virus (ToLCNDV)、バナナネモグリセンチュウ、コロンビアネコブセンチュウ、ジャガイモやせいもウイルス (PSTVd)、カンキツネモグリセンチュウ、tomato mottle mosaic virus (ToMMV)

ア 調査場所及び調査地点数

(ア) tomato mottle mosaic virus (ToMMV) を除く12病害虫

筑後市、柳川市

合計：2地点

(イ) tomato mottle mosaic virus (ToMMV)

久留米市、柳川市、筑後市

合計：3地点

イ 調査期間及び時期

令和6年12月3半旬に1回調査

ウ 調査方法

トマト栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ 調査結果

いずれの病害虫も確認されなかった。

(5) 火傷病菌

年度当初の計画による通常調査に加え、中国で火傷病の発生が確認されたことを受け、緊急調査を実施した。

ア 調査場所及び調査地点数

(ア) 通常調査

朝倉市、筑後市

合計：2地点

(イ) 緊急調査

八女市、筑後市

合計：2地点

イ 調査期間及び時期

(ア) 通常調査

令和6年4～7月の5半旬、4月、5月及び8月の2半旬（期間内7回調査）

(イ) 緊急調査

令和6年

ウ 調査方法

ナシ栽培ほ場において、目視で発病の有無を調査した。

エ 調査結果

火傷病の発病樹は確認されなかった。

(6) カンキツグリーンング病菌、*Spiroplasma citri*、*Xylella fastidiosa*

ア 調査場所及び調査地点数

(ア) カンキツグリーンング病菌

八女市、みやま市

合計：2地点

(イ) *Spiroplasma citri*、*Xylella fastidiosa*

八女市（2地点）、みやま市

合計：3地点

イ 調査期間及び時期

令和6年4月の5半旬（年1回調査）

ウ 調査方法

カンキツ栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ 調査結果

カンキツグリーンング病の発病、ミカンキジラミの寄生ともに確認されなかった。

(7) イネミイラ穂病菌、イネ条斑細菌病菌、イネクキセンチュウ

ア 調査場所及び調査地点数

遠賀町、東峰村
合計：2地点

イ 調査期間及び時期
令和6年8月の2半旬（年1回調査）

ウ 調査方法
水稲栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ 調査結果
イネミイラ穂病菌、イネ条斑細菌病菌の発生株及びイネクキセンチュウは、確認されなかった。

(8) テンサイシストセンチュウ

ア 調査場所及び調査地点数
福岡市、宗像市、北九州市
合計：3地点

イ 調査期間及び時期
令和6年11月の5半旬（年1回調査）

ウ 調査方法
キャベツ栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査し、寄生が疑われる株は掘り取って持ち帰り、寄生の有無を調査した。

エ 調査結果
各ほ場においてテンサイシストセンチュウは確認されなかった。

(9) ヘシアンバエ、*Ramularia collo-cygni*

ア 調査場所及び調査地点数
(ア) ヘシアンバエ
糸島市、久留米市、小郡市、嘉麻市、筑後市、築上町
合計：6地点

(イ) *Ramularia collo-cygni*
糸島市、久留米市、筑後市、築上町
合計：4地点

イ 調査期間及び時期
令和6年4月の5半旬（年1回調査）

ウ 調査方法
小麦栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ 調査結果
ヘシアンバエ、*Ramularia collo-cygni*ともに確認されなかった。

(10) スイカ果実汚斑細菌病菌

ア 調査場所及び調査地点数
福岡市、北九州市
合計：2地点

イ 調査期間及び時期
令和6年5月、6月（各月1回ずつ調査）

ウ 調査方法
スイカ栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ 調査結果
スイカ果実汚斑細菌病の発病株は確認されなかった。

スイカ果実汚斑細菌病の侵入警戒調査結果（単位：株）

調査場所	5月2半旬	6月2半旬	7月2半旬
福岡市	0	0	0
北九州市	0	0	0

(11) インゲンマメ萎凋細菌病菌

ア 調査場所及び調査地点数
宗像市、久留米市、柳川市、築上町
合計：4地点

イ 調査期間及び時期
令和6年8月の2半旬（年1回調査）

ウ 調査方法
大豆栽培ほ場において、目視で被害の有無を調査した。

エ インゲンマメ萎凋細菌病菌の発病株は確認されなかった。

(10) ウメ輪紋ウイルス

ア 調査場所及び調査地点数
久留米市 1地点

イ 調査方法

(ア) 見取り調査

5月中旬にウメ輪紋病発生の有無を目視により確認した。

(イ) 疑似症状又は類似症状等の検定

見取り調査において、疑似症状又は類似症状を呈した葉等が確認されなかったため、各地点から5本ずつ選定し、採取した葉について、門司植物防疫所で検定を行った。

ウ 調査結果

ウメ輪紋病の発病樹は確認されなかった。

IV 病害虫防除対策

1 問題となっている病害虫に関する調査

(1) ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫検定

ア 目的

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は平成 23 年をピークに低下しているが、早植地帯や常発地等での発生リスクは、依然として高いと考えられる。

平成 20 年には国内の土着個体群とは異なる薬剤感受性を有する海外個体群の飛来が報告されており、防除対策を講じる上で、本種の薬剤感受性の動向には十分に注意を払う必要がある。

このことから県内の保毒虫率を明らかにし、今後の防除対策の基礎資料とする。

イ 調査方法

(ア) 採集時期：5 月

(イ) 採集場所：県内 15 地点の小麦ほ場

(ウ) 検定方法：簡易エライザ法（小麦穂より採集した第 1 世代幼虫を検定）

ウ 結果の概要

平均保毒虫率は 0.3% で、前年に引き続き低水準で推移している（表 1、図 1）。

表 1 検定地点別のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率及び保毒虫確認ほ場率

検定地点	検定虫数 (頭)	保毒虫数 (頭)	保毒虫率 (%)
筑紫野市山家	78	0	0
宗像市朝町	94	0	0
糸島市二丈松末	94	0	0
久留米市宮ノ陣町	94	1	1.1
小郡市力武	94	0	0
うきは市浮羽町山北	94	0	0
朝倉市馬田	94	0	0
筑前町栗田	94	0	0
嘉麻市中益	94	2	2.1
糸田町嵐ヶ池	94	0	0
柳川市大浜町	94	0	0
柳川市三橋町	94	0	0
筑後市若菜	94	0	0
大川市諸富	94	0	0
築上町椎田	94	1	1.1
平均保毒虫率 (%)			0.3
保毒虫確認ほ場率 (%)			20.0

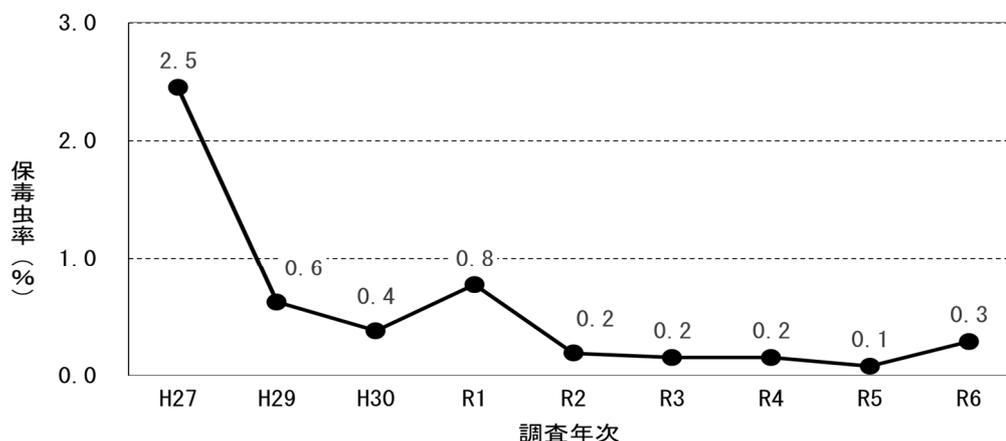


図 1 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率の推移
（検定対象：15 地点の小麦ほ場で採集した第一世代幼虫）

(2) 水稻種子のいもち病及びもみ枯細菌病感染状況調査

ア 目的

水稻種子について、いもち病及びもみ枯細菌病感染状況を事前に把握すると共に、種子消毒の徹底を促すための調査を行った。

イ 調査概要

(ア) 実施時期：令和6年12月、令和7年2月

(イ) 調査対象：県内15地域のほ水稻種子

(ウ) 供試品種：夢つくし、恵つくし、元気つくし、ヒヨクモチ、つやおとめ、山田錦、夢一献、実りつくし、ツクシホマレ、ヒノヒカリ

(エ) 調査方法

〈いもち病〉

乾燥させた粃を、プロッター法（君島、1999）に基づき 25℃で孢子形成させた。粃は3日後に、実体顕微鏡により検鏡し、孢子形成が見られた粃の割合を調査した。

〈もみ枯細菌病〉

①試料の種もみ50粒を15mlのチューブに入れ、滅菌水5mLを加え2時間振とう

②CCNT培地に①を200μL入れ、滅菌済コーンラージ棒で培地を回しながら均一に塗布

③41℃の恒温器で2日間培養し、2日後にコロニーの有無を確認した

ウ 調査結果

(ア) いもち病

全ての調査検体において、孢子形成は確認されなかった（表2）。

(イ) もみ枯細菌病

全ての調査検体において、コロニーの形成は確認されなかった（表2）。

表2 令和6年産水稻種子のいもち病及びもみ枯細菌病の保菌率

品種	いもち病				もみ枯細菌病		
	調査数	保菌数	保菌率 (%)	保菌粒率 10%以上数	調査数	保菌数	保菌率 (%)
夢つくし	54	0	0	0	21	0	0
恵つくし	3	0	0	0	1	0	0
元気つくし	38	0	0	0	12	0	0
ヒヨクモチ	4	0	0	0	2	0	0
つやおとめ	1	0	0	0	1	0	0
山田錦	2	0	0	0	1	0	0
夢一献	1	0	0	0	1	0	0
実りつくし	2	0	0	0	1	0	0
ツクシホマレ	3	0	0	0	1	0	0
ヒノヒカリ	70	0	0	0	22	0	0
	178	0	0	0	63	0	0

エ その後の対応

調査結果を福岡県米麦品質改善協会へ報告。

(3) キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統発生拡大への対応

ア 目的

2014年4月下旬、県南部で、県内未発生で他の系統に比べて病原性の高い、キウイフルーツかいよう病 Psa3 系統（以下、「Psa3」）の発生が確認された。同年中は1市内の限られた1地区のみの発生であったが、翌2015年には、県内の4市1町に発生が拡大し、2019年には5市1町、2020年には6市1町、2024年には7市1町に拡大した。

Psa3 は、感染樹から流出した樹液の風雨による飛散や樹液の付着した剪定器具の使いまわし

等により容易に拡大する。感染すると花蕾や結果母枝が枯死し、収量に甚大な被害を及ぼす。そこで、Psa3 の感染地域を把握し、伐採・抜根、枝の切除等の対策に資するため調査を行った。

イ 調査方法

①検定

主に2月から6月にかけて、生産者から JA・普及指導センターを通じて持ち込まれた発病が疑われる枝や葉について、病斑と疑われる部分から DNA 抽出キット等を用いて DNA を抽出し、J. Rees-George et al. (2010) 及び Balestra et al. (2013) の PCR 法で、かいよう病菌の判定と系統の判別を行った。

②予察調査

2016 年に発生が確認され、発病枝の切除で対応した「ヘイワード」の園を、発生予察調査園に定めて、3～5月に定期的に巡回した。うち5本を調査樹とし、発病葉や発病枝の数を調査した。

ウ 調査結果

①検定

本年は、3月下旬に最初の発症が確認された。

本年の検定では、46 検体について調査を行った結果、23 検体で陽性となった。陽性となった検体は、全て未発生の園地から採取されたものであり、依然として感染が拡大していると考えられた。

②予察調査

3～5月の調査の際に発病枝・発病葉ともに発生は認められなかった。

エ その後の対応

2014 年の発病園に対する対応は、「発病樹と隣接樹を伐採」もしくは「発病園を全伐採」が基本であった。しかし、2014～2016 年の試験研究や発病園に対する対応によって得られた知見に基づき、2016 年以降は、「ヘイワード」等の比較的かいよう病に強い品種については「発病枝の部分切除」で対応することが多かった。部分切除後の樹で、枝の枯死や葉の褐点症状が生じる場合があったが、樹液の漏出といった収量に影響する重大な被害は生じなかった。

一方、「紅妃（レインボーレッド）」等のかいよう病に弱い品種や雄木については、部分切除で対応しても発病樹の拡大は抑えられないと考えられ、引き続き『発病樹は伐採』、状況によっては『周辺樹も伐採、発病園を全伐採』という対応が基本となる。

(4) かんきつミカンハダニの薬剤感受性検定

ア 目的

かんきつ類の重要害虫であるミカンハダニは比較的薬剤抵抗性が発達しやすく、生産現場では一部の殺ダニ剤について効果の低下が指摘されている。

そこで、対象地区で採取したミカンハダニについて、殺ダニ剤の薬剤抵抗性を調査し、有効な農薬の選択に資するものとする。

イ 検定方法

(ア) 採集時期：9月30日～10月1日

(イ) 採集場所：①糸島市二丈吉井 露地ほ場
②宗像市池田 露地ほ場
③大牟田市今山 露地ほ場

(ウ) 供試薬剤：果樹専技との協議により、以下の3～4剤を選択した

ミカンハダニ検定薬剤

農薬名	対象成分	Irac	希釈倍率
カネマイトフロアブル	アセキノシル・・・15.0%	20B	1,000
スターマイトフロアブル	シエノピラフェン・・・30.0%	25A	2,000
ダニゲッターフロアブル	スピロメシフェン・・・30.0%	23	2,000
マイトコーネフロアブル(大牟田市のみ実施)	ピフェナゼート・・・20.0%	20D	1,000

(エ) 検定方法

- ① 検定容器は直径約100mm、高さ約60mmのプラスチックカップを用いた。カップに約35mm径立方体のスポンジを入れ、8×6cm長方形の脱脂綿をスポンジの上に乗せ、スポンジの半分の高さまでイオン交換水を入れた。
- ② 無防除のミカンの葉を適度な大きさに切り、直径9cmのろ紙2枚で挟み、葉が乾燥しないよう①のスポンジ上に置いた。葉の裏側に重ねるろ紙は、予めミカンハダニ接種用に直径1.5cmの穴を開けておき、葉面を露出させた。
- ③ 採取したミカンハダニの成虫を穴から露出した葉面に5～10頭ずつ接種し、25℃で静置した。
- ④ 7日後に成虫を取り除き、産卵数を計測した。ろ紙を外して葉を所定濃度に調製した薬液に60秒間浸漬した後、再度産卵数を計測した。無処理区はイオン交換水に60秒間浸漬した。
- ⑤ 水滴を取り除いた葉をろ紙上に戻して25℃で静置した。葉が乾燥しないよう、適宜プラスチックカップに給水した。
- ⑥ 無処理区のふ化程度を随時観察し、薬液処理6日目に、各処理区の孵化卵数、未孵化卵数、死虫数、生存虫数を計数し、下記の式により補正死亡率を求めた。試験は4～5反復で行った。



$$\text{補正死亡率(\%)} = \frac{[(\text{無処理区の生存率} - \text{処理区の生存率}) / \text{無処理区の生存率}] \times 100}{1}$$

ウ 調査結果

カンキツのハダニ薬剤検定(2024年) 調査月日:2024年10月15日<薬剤接種6日後調査>

採取場所	供試薬剤	使用濃度(倍)	供試卵数(A)	未ふ化卵数(B1)	ふ化卵数	ふ化後死虫数(B2)	生息虫数(C)	発育虫率(E)(%) (C)÷(A)×100	補正死亡率(%) ((E)対照区 - (E)試験区) ÷ (E)対照区 × 100
			計	計	計	計	計	平均	
糸島	カネマイトフロアブル	1,000	27	6	21	21	0	0.0	100
	スターマイトフロアブル	2,000	39	29	10	9	1	2.6	96
	ダニゲッターフロアブル	2,000	23	7	16	16	0	0.0	100
	対照区	イオン交換水	14	5	9	1	8	57.1	0
宗像	カネマイトフロアブル	1,000	28	10	18	18	0	0.0	100
	スターマイトフロアブル	2,000	35	4	31	15	16	45.7	47
	ダニゲッターフロアブル	2,000	24	4	20	20	0	0.0	100
	対照区	イオン交換水	29	0	29	4	25	86.2	0
大牟田	カネマイトフロアブル	1,000	48	10	38	38	0	0.0	100
	スターマイトフロアブル	2,000	68	37	31	30	1	1.5	97
	ダニゲッターフロアブル	2,000	112	47	65	56	9	8.0	82
	マイトコーネフロアブル	1,000	79	17	62	56	6	7.6	83
	対照区	イオン交換水	89	17	72	33	39	43.8	0

今回の検定による防除効果は、殺卵及び孵化直後の殺幼虫の効果となる。

- 糸島：3薬剤とも感受性が高かった。
- 宗像：カネマイト、ダニゲッターの感受性は高かったが、スターマイトの感受性が低下している。
- 大牟田：カネマイト、スターマイトの感受性は高かったが、ダニゲッター、マイトコーネの感受性が低下している。

エ その後の対応

JA 全農ふくれんの生産対策会議において結果を説明し、普及指導センターや JA を通じて産

地へ検定結果を通知した。

(5) イチゴ炭疽病潜在感染株（親株）調査

ア 目的

イチゴの巡回調査地点で、親株の炭疽病菌保菌程度を調査し、今後の防除の参考に資する。

イ 調査方法

令和6年11月～12月に県下10地点のほ場の親株から、各20株ずつ複葉を採取し、エタノール浸漬法により以下の手順で調査した。

- ① 検定葉を70%エタノールに浸漬した後、水洗した。
- ② 大型のポリ容器に滅菌水で湿らせたペーパータオルを敷き、ろ紙上に検定葉を並べて、容器を密封し、28℃の恒温で静置した。
- ③ 2週間後に検鏡し、炭疽病菌の孢子の有無を確認した。

ウ 調査結果

親株の潜在感染株率、潜在感染株確認ほ場率ともに前年並であった。

- ・ 潜在感染株率 64.5%（前年 54.5%）
- ・ 潜在感染株確認ほ場率 100%（前年 100%）

エ その後の対応

令和6年1月23日付けで技術情報を発表し、今後の防除等について周知を行った。

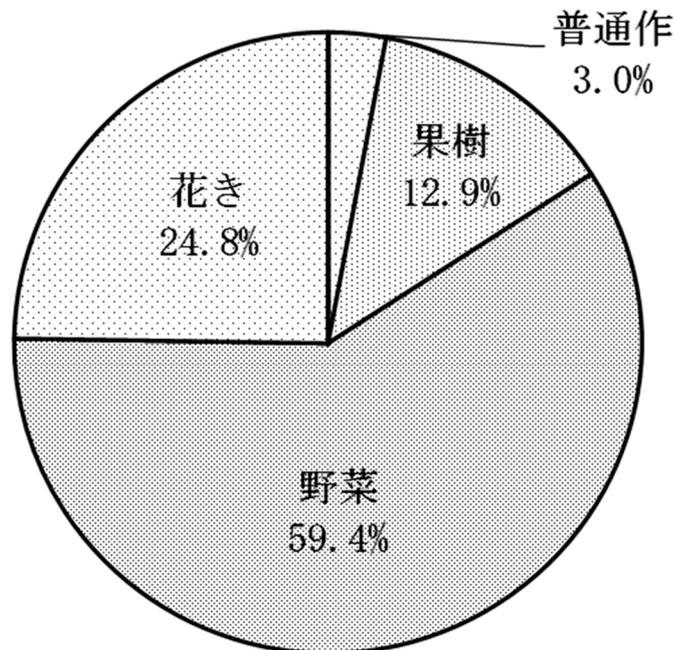
2 病虫害診断

(1) 普及指導センター等からの作物別依頼件数と診断結果

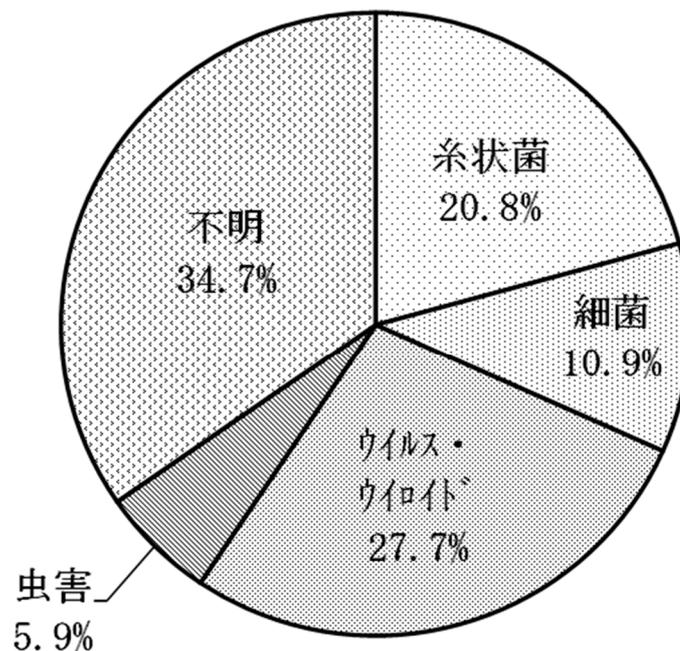
令和6年4月から令和7年3月までの診断依頼件数は、普通作物3件(3.0%)、果樹13件(12.9%)、野菜60件(59.4%)、花き・花木25件(24.8%)の合計101件であった。

作物ごとに主な診断依頼品目をみると、普通作は大豆2件。果樹はいちじく3件。野菜はトマト類23件、イチゴ16件、キュウリ13件。花き・花木はキク3件であった。

原因別にみると、病虫害が原因であるものは66件(65%)で、その内訳は、糸状菌21件(20.8%)、細菌11件(10.9%)、ウイルス・ウィロイド28件(27.7%)、虫害6件(5.9%)であった。また、不明は35件(34.7%)であった。



病虫害診断依頼（作物別内訳）



病虫害診断依頼（原因別内訳）

令和6年度 植物防疫年報

令和7年 ○月 発行

編集・発行 福岡県筑紫野市大字吉木 587

福岡県農林業総合試験場病害虫部予察課

福岡県行政資料

分類番号 PA	所属コード 4703719
登録年度 7	登録番号 (0000)

リサイクル適正

(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。